

平成30年度
病虫害の効率的防除体制の再編委託事業

成 績 報 告 書

平成31年2月

農業・食品産業技術総合研究機構

中央農業研究センター

目 次

DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立

(1) 青森県産業技術センターりんご研究所	1
(2) 秋田県果樹試験場	22
(3) 山形県農業総合研究センター園芸試験場	40
(4) 長野県果樹試験場	53
(5) 農研機構果樹茶業研究部門	60

減農薬栽培に対応した水稻の種子伝染性病害に対する防除体系の確立

(1) 農研機構中央農業研究センター	63
(2) 茨城県農業総合センター農業研究所	68
(3) 埼玉県農業技術研究センター	74
(4) 長野県農業試験場	85

ダイズ害虫のウコンノメイガに対するフェロモンを用いた発生予察技術の確立

(1) 農研機構中央農業研究センター北陸研究拠点	95
(2) 新潟県農業総合研究所作物研究センター	101
(3) 富山県農林水産総合技術センター農業研究所	103
(4) 石川県農林総合研究センター	109

防除体制再編に向けた取り組み状況	114
------------------	-----

(1) リンゴ黒星病に対する各種薬剤の防除効果

氏名 平山和幸

所属 りんご研究所

〒 036-0332

青森県黒石市大字牡丹平字福民 2 4

1. 調査背景と目的

リンゴ黒星病の重点防除時期である春季の基幹防除剤として用いられてきた DMI 剤は耐性菌の発生により、本病の防除剤としての実用性が低下した。そこで、生物検定により黒星病に対する各種薬剤の防除効果を明らかにし、黒星病防除剤としての実用性を評価する。

2. 調査方法

1) 試験 1

- (1) 供試樹：‘ふじ’ / マルバカイドウ 1 区 3 樹
- (2) 供試薬剤：フルーツセイバー 2,000 倍、ネクスターフロアブル 1,500 倍、オルフィンフロアブル 4,000 倍、ジマンダイセン水和剤 600 倍
- (3) 薬剤散布：5 月 1 日（開花直前）、5 月 11 日（落花直後）、5 月 21 日（落花 10 日後頃）に動力噴霧機を用いて、葉から薬剤が滴る程度散布した。なお、4 月 23 日、全区にスピードスプレーヤーでベフラン液剤 25 の 1,000 倍を散布した。
- (4) 調査方法：6 月 11 日、1 樹当たり 10 新梢の全葉について下記の発病指数別に発病状況を調査し、発病葉率と発病度を求めた。防除価は発病度から算出した。
発病指数 0：発病なし、 1：病斑面積が葉面積お 1/4 未満、
2：同 1/4～1/2、 3：同 1/2 以上

2) 試験 2

- (1) 供試樹：ポット植え ‘ふじ’ / マルバカイドウ 1 区 3 樹
- (2) 供試薬剤：ベフラン液剤 25 の 1,000 倍、フルーツセイバー 2,000 倍、ユニックス顆粒水和剤 47 の 2,000 倍、フリントフロアブル 25 の 3,000 倍、ナリア WDG 2,000 倍、ファンタジスタ顆粒水和剤 3,000 倍、ジマンダイセン水和剤 600 倍
- (3) 試験方法：7 月 31 日、各新梢先端部の未展開葉と展開葉の間にラベルをつけ、ハンドスプレーを用いて供試薬剤を散布・風乾後、接種箱（18℃・多湿条件）で 2 日間静置し、以降、野外で管理した。
- (4) 8 月 17 日、1 樹当たり 3～6 新梢について、ラベルを基準に上位 3 葉および下位 7 葉について前述の発病指数別に発病状況を調査し、発病葉率と発病度を求めた。防除価

は発病度から算出した。

3) 試験3

- (1) 供試樹：ポット植え‘ふじ’／マルバカイドウ 1区1樹
- (2) 供試薬剤：オルフィンフロアブル4,000倍、ネクスターフロアブル1,500倍、パレードフロアブル2,000倍、ベフラン液剤25の1,000倍
- (3) 試験方法：6月15日、各新梢の先端葉にラベルをつけ、分生子懸濁液を噴霧接種後、接種箱（18℃・多湿条件）に2日間静置した。その後、6月18日（接種3日後）にハンドスプレーを用いて供試薬剤を散布し、以降、野外で管理した。
- (4) 調査方法：7月3日、1樹当たり8～11新梢について、ラベルの下位7葉を対象に前述の発病指数別に発病状況を調査し、発病葉率と発病度を求めた。防除価は発病度から算出した。

3. 調査結果

1) 試験1

- (1) 無散布が発病葉率43.8%、発病度16.0の中発生となった。その中で対照のジマンダイセン水和剤600倍は発病葉率2.6%、発病度0.9の防除価94.4と高い防除効果を示した。
- (2) フルーツセイバー2,000倍、ネクスターフロアブル1,500倍、オルフィンフロアブル4,000倍では発病葉率0～3.1%、発病度0～1.0、防除価93.8～100と、いずれも対照薬剤と同等または優る高い防除効果を示した。

2) 試験2

- (1) 無散布が発病葉率90.0%、発病度76.7の甚発生となった。その中で対照のジマンダイセン水和剤600倍は発病が認められず、防除価100と高い防除効果を示した。
- (2) ベフラン液剤25の1,000倍、フルーツセイバー2,000倍では発病葉率0.7～1.1%、発病度0.2～0.4、防除価99.5～99.7と、高い防除効果を示した。
- (3) ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍、ナリアWDG2,000倍、ファンタジスタ顆粒水和剤3,000倍では発病葉率16.4～34.4%、発病度5.5～12.2、防除価84.1～92.8と対照薬剤に比べやや劣る防除効果を示した。
- (4) フリントフロアブル25の3,000倍は発病葉率72.9%、発病度58.2、防除価24.1と対照薬剤に比べ劣る防除効果を示した。

3) 試験3

- (1) 無散布が発病葉率76.8%、発病度47.6の多発生となった。その中で対照のベフラン液剤25の1,000倍は発病葉率2.6%、発病度0.9、防除価98.2と高い治療効果を示した。
- (2) オルフィンフロアブル4,000倍は発病葉率41.1%、発病度15.5、防除価67.5と程度はやや低いものの治療効果を示した。
- (3) ネクスターフロアブル2,000倍、パレードフロアブル2,000倍は発病葉率65.1～69.6%、発病度36.0～44.0、防除価7.5～24.4と治療効果は認められなかった。

表1 黒星病に対する各種薬剤の防除効果（試験1）

供試薬剤	希釈 倍数	樹No.	調査 葉数	指数別発病葉数				発病 葉率	発病度	防除価
				0	1	2	3			
フルーツセイバー	2,000倍	I	156	150	6	0	0	3.8%	1.3	93.8
		II	164	159	5	0	0	3.0	1.0	
		III	163	159	4	0	0	2.5	0.8	
		平均	161.0					3.1	1.0	
ネクスターフロアブル	1,500倍	I	149	148	1	0	0	0.7	0.2	96.9
		II	148	147	1	0	0	0.7	0.2	
		III	165	160	5	0	0	3.0	1.0	
		平均	154.0					1.5	0.5	
オルフィンフロアブル	4,000倍	I	151	151	0	0	0	0	0	100
		II	162	162	0	0	0	0	0	
		III	169	169	0	0	0	0	0	
		平均	160.7					0	0	
ジマンダイセン水和剤	600倍	I	164	157	7	0	0	4.3	1.4	94.4
		II	162	158	4	0	0	2.5	0.8	
		III	168	166	2	0	0	1.2	0.4	
		平均	164.7					2.6	0.9	
無散布		I	172	108	60	4	0	37.2	13.2	
		II	159	89	60	9	1	44.0	17.0	
		III	159	79	76	3	1	50.3	17.8	
		平均	163.3					43.8	16.0	

表2 黒星病に対する各種薬剤の防除効果（試験2）

供試薬剤	希釈 倍数	樹No.	調査 葉数	指数別発病葉数				発病 葉率	発病度	防除価
				0	1	2	3			
ベフラン液剤25	1,000倍	I	60	60	0	0	0	0%	0	99.7
		II	50	49	1	0	0	2.0	0.7	
		III	40	40	0	0	0	0	0	
		平均	50.0					0.7	0.2	
フルーツセイバー	2,000倍	I	30	29	1	0	0	3.3	1.1	99.5
		II	60	60	0	0	0	0	0	
		III	50	50	0	0	0	0	0	
		平均	46.7					1.1	0.4	
ユニックス顆粒水和剤47	2,000倍	I	60	44	16	0	0	26.7	8.9	92.8
		II	60	57	3	0	0	5.0	1.7	
		III	40	33	7	0	0	17.5	5.8	
		平均	53.3					16.4	5.5	
プリントフロアブル25	3,000倍	I	30	10	1	4	15	66.7	60.0	24.1
		II	50	8	13	9	20	84.0	60.7	
		III	50	16	8	5	21	68.0	54.0	
		平均	43.3					72.9	58.2	
ナリアWDG	2,000倍	I	40	22	14	3	0	45.0	16.7	85.8
		II	40	25	12	3	0	37.5	15.0	
		III	30	29	1	0	0	3.3	1.1	
		平均	36.7					28.6	10.9	
ファンタジスタ顆粒水和剤	3,000倍	I	40	24	15	1	0	40.0	14.2	84.1
		II	30	20	10	0	0	33.3	11.1	
		III	50	35	14	0	1	30.0	11.3	
		平均	40.0					34.4	12.2	
ジマンダイセン水和剤	600倍	I	50	50	0	0	0	0	0	100
		II	50	50	0	0	0	0	0	
		III	50	50	0	0	0	0	0	
		平均	50.0					0	0	
無散布		I	40	6	3	7	24	85.0	74.2	
		II	40	1	9	6	24	97.5	77.5	
		III	40	5	3	5	27	87.5	78.3	
		平均	40.0					90.0	76.7	

表3 黒星病に対する各種薬剤の治療効果（試験3）

供試薬剤	希釈 倍数	調査 葉数	指数別発病葉数				発病 葉率	発病度	防除価
			0	1	2	3			
オルフィンフロアブル	4,000倍	56	33	21	1	1	41.1%	15.5	67.5
ネクスターフロアブル	1,500倍	56	17	18	7	14	69.6	44.0	7.5
パレードフロアブル	2,000倍	63	22	25	5	11	65.1	36.0	24.4
ベフラン液剤25	1,000倍	77	75	2	0	0	2.6	0.9	98.2
無散布		56	13	21	7	15	76.8	47.6	

4. 考察

DMI 剤耐菌の発生下において、ベフラン液剤、ジマンダイセン水和剤、フルーツセイバー、ネクスターフロアブル、オルフィンフロアブルは高い防除効果を示し、実用性は高いと考えられた。ユニックス顆粒水和剤 47、ナリア WDG、ファンタジスタ顆粒水和剤はやや程度の劣る防除効果を示したものの実用性はあると考えられた。フリントフロアブル 25 は防除効果が低く、実用性はないと考えられた。また、ベフラン液剤 25 は高い治療効果を、オルフィンフロアブルは程度はやや低いものの治療効果を有することが示唆された。

なお、本県では QoI 剤耐性リンゴ黒星病の発生も確認されており、フリントフロアブルの効力低下は本耐性菌によるものと考えられた。ナリア WDG においても効力低下が認められるものの、QoI 剤と SDHI 剤の混合剤であることから防除効果を示したと考えられた。ファンタジスタ顆粒水和剤は QoI 剤耐性菌の発生下においても防除効果を示しており、耐性菌に対しても感受性の低下幅が小さいことが示唆された。

5. 今後の課題

なし

6. 要約

DMI 剤耐性菌発生下における黒星病防除剤として、ベフラン液剤 25、ジマンダイセン水和剤、フルーツセイバー、ネクスターフロアブル、オルフィンフロアブルは実用性が高い、ユニックス顆粒水和剤 47、ナリア WDG、ファンタジスタ顆粒水和剤は実用性がある、フリントフロアブル 25 は実用性はないと考えられた。

7. 成果の公表及び特許

- 1) 平成 31 年りんご病害虫防除暦（青森県りんご病害虫防除暦編成部会編）
- 2) 平成 31 年度農作物病害虫防除指針（青森県農作物病害虫防除指針編成会議編）

(2) DMI 剤に代わる黒星病に有効な薬剤の検索

赤平知也

青森県産業技術センターりんご研究所

[〒036-0332 青森県黒石市牡丹平字福民24]

1. 調査背景と目的

2016年に青森県で DMI 剤耐性リンゴ黒星病菌の発生が確認されたことを受けて、2017年より DMI 剤を使用しない防除体系を実施している。そこで、DMI 剤耐性菌発生下における各種薬剤の予防効果を明らかにする。

2. 調査方法

1) 供試樹

りんご研究所内の B9-3 号圃に植栽の 14 年生 ‘ふじ’ / マルバカイドウを 1 区 3 区供試した。

2) 薬剤散布

「落花直後」(5月12日)、「落花10日後頃」(5月22日)、「落花20日後頃」(6月1日)の3回、供試薬剤を動力噴霧機を用いて1樹当たり約15L散布した。なお、試験開始前は「展葉1週間後頃」(4月23日)にベフラン液剤25の1,000倍を散布し、「開花直前」は無散布とした。試験終了後は「平成30年りんご病害虫防除暦」に準じて慣行散布を行った。

3) 調査方法

6月22日に各区30新梢(1樹10新梢)を任意に抽出し、黒星病の発生状況を下記の指数別に調査した。

発病指数 0：発病なし 1：病斑面積が葉面積の1/4未満

2：病斑面積が葉面積の1/4以上～1/2未満 3：病斑面積が葉面積の1/2以上

発病度 = $\frac{\sum(\text{発病指数} \times \text{葉数})}{(\text{調査葉数} \times 3)} \times 100$

3. 調査結果

1) 「開花直前」を無散布とし、「落花直後」から「落花20日後頃」の3回散布で薬剤の効果を評価した。6月22日の調査で、無散布区は発病葉率28.5%、発病度11.6、発病果率10.6%と中発生条件の試験となった(表1)。このような条件下で、ジマンダイセン水和剤は発病葉率8.1%、発病度2.7、防除価77で、被害果はみられなかった。「開花直前」を無散布としたことで、散布前の感染が生じていたものの、一定の防除効果を示した。

2) このような条件下において、キノンドー水和剤80、キノンドー顆粒水和剤、デランフロアブル1,500倍及び2,000倍、ラビライト水和剤は発病葉率2.1～9.4%、発病度0.7～3.1、発病果率0

～0.7%と薬剤間で差はあるものの、ジマンダイセン水和剤とほぼ同等の防除効果が認められた。この中でもデランフロアブルは他の薬剤と比較して高い効果を示した。

表1 黒星病に対する各種薬剤の効果

供試薬剤	倍数	樹	新梢葉			防除価	果実	
			調査葉数	発病葉率	発病度		調査果数	発病果率
キノドー水和剤	1,200	I	156	9.0	3.0	76	150	0.0
		II	163	8.6	2.9			
		III	151	7.3	2.4			
		平均	156.7	8.3	2.8			
キノドー顆粒水和剤	1,000	I	156	5.8	1.9	86	150	0.0
		II	169	5.3	1.8			
		III	159	3.8	1.3			
		平均	161.3	5.0	1.7			
デランフロアブル	2,000	I	162	2.5	0.8	94	150	0.0
		II	165	1.8	0.6			
		III	157	1.9	0.6			
		平均	161.3	2.1	0.7			
デランフロアブル	1,500	I	162	6.2	2.1	82	150	0.0
		II	160	6.3	2.1			
		III	180	6.7	2.2			
		平均	167.3	6.4	2.1			
ラビライト水和剤	500	I	164	12.2	4.1	73	150	0.7
		II	166	9.6	3.2			
		III	158	6.3	2.1			
		平均	162.7	9.4	3.1			
ジマンダイセン水和剤	600	I	179	11.2	3.7	77	150	0.0
		II	157	7.0	2.3			
		III	165	6.1	2.0			
		平均	167.0	8.1	2.7			
無処理区	—	I	147	35.4	15.0			
		II	152	29.6	12.1			
		III	166	20.5	7.6			
		平均	155.0	28.5	11.6			

表2 試験期間中の降水量

日付	5/2	5/3	5/4	5/5	5/6	5/7	5/8	5/9	5/10	5/11	5/12	5/13	5/14	5/15	5/16	5/17	5/18	5/19
降水量(mm)	4.5	15.5	14.5	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	72	1
											●							△
日付	5/20	5/21	5/22	5/23	5/24	5/25	5/26	5/27	5/28	5/29	5/30	5/31	6/1	6/2	6/3	6/4	6/5	6/6
降水量(mm)	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	12.5	29	0	0	0	0	0
			●										●					
日付	6/7	6/8	6/9	6/10	6/11	6/12	6/13	6/14	6/15	6/16	6/17	6/18	6/19	6/20	6/21	6/22		
降水量(mm)	0	0.5	0	0	3.5	24	0.5	0	0	0	0	0	0	0	2	0		
																△		

●: 散布日、△: 調査日

4. 考察

いずれの供試薬剤も防除効果が認められたが、デランフロアブルは他の薬剤と比較して高い効果を示し、実用性が高いと考えられた。1,500倍の方が効果が劣った原因はわからなかったが、デランフロアブルについては、今後、大規模試験を視野に入れて検討する必要がある。

5. 今後の課題

引き続き、有効薬剤の検討を行う。

6. 要約

キノンドー水和剤 80、キノンドー顆粒水和剤、デランフロアブル 1,500 倍及び 2,000 倍、ラビライト水和剤はジマンダイセン水和剤とほぼ同等の防除効果が認められた。中でもデランフロアブルは他の薬剤と比較して高い効果を示した。

7. 成果の公表及び特許

- 1) 平成 31 年りんご病害虫防除暦（青森県りんご病害虫防除暦編成部会編）
- 2) 平成 31 年度農作物病害虫防除指針（青森県農作物病害虫防除指針編成会議編）

(3) カルシウム資材加用による防除効果への影響

赤平知也・十川聡子

青森県産業技術センターりんご研究所

[〒036-0332 青森県黒石市牡丹平字福民24]

1. 調査背景と目的

2016年に青森県でDMI 剤耐性リンゴ黒星病菌の発生が確認されたことを受けて、2017年よりDMI 剤を使用しない防除体系を実施している。炭酸カルシウム水和剤はサビなどの発生軽減策として青森県では「落花10日後頃」から「6月中旬」まで加用散布を指導している。一方、生産現場では2017年頃より炭酸カルシウム資材を散布している園地で黒星病の発生が少ないとの情報が寄せられている。そこで、生産現場で使用されるカルシウム資材加用による黒星病発生への影響を明らかにする。

2. 調査方法

1) 供試樹

りんご研究所内のD4-1号圃に植栽の10年生‘ふじ’/マルバカイドウを1区2樹供試し、6月16日に新梢の枝を切り返して、伸びてきた枝を対象にした。

2) 薬剤散布

「落花30日後頃」まで無散布にして、7月4日、7月14日、7月24日、8月3日の10日間隔で計4回、表1の供試薬剤を動力噴霧機を用いて1樹当たり約12L散布した。なお、「6月中旬」（6月20日）にアントラコール顆粒水和剤500倍を全区に散布し、試験終了後は「平成30年りんご病害虫防除暦」に準じて慣行散布を行った。

3) 調査方法

8月22日に各区30新梢（1樹15新梢）を任意に抽出し、黒星病の発生状況を下記の指数別に調査した。果実については初期感染で生じたさび状の病斑を除き、赤道部からこうあ部にかけて生じていた径1mm以下の果実病斑を対象に各区120果（1樹60果）を任意に抽出し、発生状況を調査した。また、7月4日の1回目散布後から処理区によっては被害葉の黄変落葉がみられたため、7月14日（2回目散布後）に切り返しをしない当年の新梢を対象に各区30新梢を任意に抽出し、落葉率を調査した。

発病指数 0：発病なし 1：病斑面積が葉面積の1/4未満

2：病斑面積が葉面積の1/4以上～1/2未満 3：病斑面積が葉面積の1/2以上

発病度＝ $\Sigma(\text{発病指数} \times \text{葉数}) / (\text{調査葉数} \times 3) \times 100$

3. 調査結果

- 1) 「落花 30 日後頃」まで無散布にして多発生樹を作成し、この状況下で新梢を切り返して新たに伸びてきた枝を対象に薬剤の効果の評価した。8 月 22 日の調査で無散布区は発病葉率 54.5%、発病度 27.7 と多発生条件の試験となった（表 1）。このような条件下で、チオノックフロアブルの単用散布は発病葉率 3.0%、発病度 1.0、防除価 96 であり、ジマンダイセン水和剤の単用散布は発病葉率 2.1%、発病度 0.7、防除価 98 といずれも高い防除効果を示した。
- 2) チオノックフロアブルにクレフノン、クレミクス、ネオミクスを加用した区では発病葉率 1.5～2.6%、発病度 0.5～0.9、防除価 97～98 と単用区に比較してほぼ同等の防除効果を示した。また、ジマンダイセン水和剤にクレフノン、クレミクス、ネオミクスを加用した区でも同様に発病葉率 0～2.3%、発病度 0～0.8、防除価 97～100 と単用区とほぼ同等の防除効果を示した。
- 3) 一方、果実では無散布区は発病果率 52.5%と多発生となった試験であったが、チオノックフロアブルの単用散布は発病葉率 6.7%、防除価 87 で比較的高い効果を示し、ジマンダイセン水和剤の単用散布は発病果率 2.5%、防除価 95 と高い防除効果を示した。この条件下で、チオノックフロアブルにクレフノン、クレミクスを加用した区では発病果率 5.0～8.3%、防除価 84～91 と単用区とほぼ同等の防除効果を示したが、ネオミクスを加用した区では発病果率 16.7%、防除価 68 と効果が低かった。また、ジマンダイセン水和剤にクレフノン、クレミクスを加用した区でも発病果率 0～1.7%、防除価 97～100 と単用区とほぼ同等の防除効果を示したが、ネオミクスを加用した区では発病果率 7.5%、防除価 86 と効果がやや低かった。
- 4) 黒星病多発生樹に対して、チオノックフロアブル及びジマンダイセン水和剤を散布したところ、カルシウム資材の有無に関わらず、無散布区及びチオノックフロアブル散布区では落葉率が 0～0.2%であったのに対し、ジマンダイセン水和剤散布区では 8.4～11.6%と落葉が激しかった。また、落葉は黒星病の被害葉に限られていた。

4. 考察

カルシウム資材加用の有無に関わらず、10 日間隔の散布ではチオノックフロアブル及びジマンダイセン水和剤はいずれも高い防除効果を示し、カルシウム資材加用による防除効果の向上は認められなかった。しかしながら、カルシウム資材の散布により薬剤の付着状況が視認しやすくなったことから、散布ムラを確認するための一手段として有効であると考えられた。また、果実についてはネオミクスを加用した区で、防除効果が低下する傾向にあったが、この要因については不明である。一方、多発生樹に対してジマンダイセン水和剤を散布すると被害葉が激しく落葉する傾向にあることが明らかとなった。

5. 今後の課題

薬剤散布におけるカルシウム資材の利用法を検討する。

6. 要約

生産現場で実施されているカルシウム資材加用による防除効果の向上は認められなかった。

7. 成果の公表及び特許

なし

表1 黒星病に対する各種薬剤の効果

供試薬剤	カルシウム剤	樹	新梢葉				果実		
			調査葉数	発病葉率	発病度	防除価	調査果数	発病果率	防除価
チオノックフロアブル 500倍	クレフノン100倍	I	343	3.5	1.2				
		II	311	1.6	0.5				
		平均	327.0	2.6	0.9	97	120	8.3	84
	クレミックス300倍	I	297	2.4	0.8				
		II	288	0.7	0.2				
		平均	292.5	1.5	0.5	98	120	5.0	91
	ネオミックス250倍	I	292	3.4	1.1				
		II	330	1.8	0.6				
		平均	311.0	2.6	0.9	97	120	16.7	68
	—	I	288	4.2	1.4				
		II	322	1.9	0.6				
		平均	305.0	3.0	1.0	96	120	6.7	87
ジマンダイセン水和剤	クレフノン100倍	I	303	2.0	0.7				
		II	309	2.6	0.9				
		平均	306.0	2.3	0.8	97	120	1.7	97
	クレミックス300倍	I	277	0.7	0.2				
		II	293	2.0	0.7				
		平均	285.0	1.4	0.5	98	120	0.0	100
	ネオミックス250倍	I	321	0.0	0.0				
		II	311	0.0	0.0				
		平均	316.0	0.0	0.0	100	120	7.5	86
	—	I	285	2.1	0.7				
		II	299	2.0	0.7				
		平均	292.0	2.1	0.7	98	120	2.5	95
無処理区	—	I	286	59.4	29.4				
		II	315	49.5	26.0				
		平均	300.5	54.5	27.7		120	52.5	

表2 試験期間中の降雨

日付	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8	7/9	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21
降水量(mm)	48.5	1.5	0.5	23.5	0	0	1.5	3.5	3	18	0	0	0	40	5	0	0	0
	●										●							
日付	7/22	7/23	7/24	7/25	7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2	8/3	8/4	8/5	8/6	8/7	8/8
降水量(mm)	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	26	2	0	0
			●										●					
日付	8/9	8/10	8/11	8/12	8/13	8/14	8/15	8/16	8/17	8/18	8/19	8/20	8/21	8/22				
降水量(mm)	0	1.5	1	0	0	0	59	21	12	0	0	0	0	0				
																		△

●: 散布日、△: 調査日

表3 各薬剤散布区における落葉率

供試薬剤	カルシウム剤	調査葉数	落葉率
チオノックフロアブル500倍	クレフノン100倍	454	0.2
〃	クレミックス300倍	446	0.0
〃	ネオミックス250倍	452	0.0
〃	—	461	0.2
ジマンダイセン水和剤600倍	クレフノン100倍	462	11.0
〃	クレミックス300倍	451	9.3
〃	ネオミックス250倍	443	8.4
〃	—	453	11.6
無処理区	—	459	0.2

(4) 青森県の県南地域におけるリンゴ黒星病の DMI 剤感受性評価

氏 名 平山和幸

所 属 りんご研究所

〒 036-0332

青森県黒石市大字牡丹平字福民 2 4

1. 調査背景と目的

青森県ではこれまで、津軽地域において DMI 剤耐性リンゴ黒星病菌の発生が確認されている。一方、県南地域における黒星病菌の DMI 剤感受性は検討されておらず、耐性菌の発生状況も不明となっている。そこで、県南地域の黒星病菌について、寒天平板希釈法による DMI 剤感受性検定および生物検定を実施し、DMI 剤耐性リンゴ黒星病菌の発生状況を調査する。

2. 調査方法

1) 薬剤感受性検定（寒天平板希釈法）

(1) 供試菌株：20 菌株

(2) 採集場所：青森県三戸郡五戸町大字扇田（りんご研究所県南果樹部の殺菌剤無散布圃場）

(3) 検定薬剤：ルビゲン水和剤（有効成分：フェナリモル）

スコア顆粒水和剤（有効成分：ジフェノコナゾール）

(4) 試験方法：PDA 培地にルビゲン水和剤およびスコア顆粒水和剤を有効成分濃度が 0, 0.01, 0.05, 0.1, 0.5, 1, 5, 10, 50, 100ppm となるように添加し検定培地とした。供試菌株を PDA 培地にて 20℃・暗黒条件下で 3 週間前培養し、菌そう周縁部を直径 4mm のコルクボーラーで打ち抜き、菌そう面が下になるように検定培地に置床した。その後、20℃・暗黒条件下で 3 週間培養し、菌そう直径を計測して 50% 効果濃度 (EC₅₀) を求める。

2) 生物検定

(1) 供試樹：ポット植え‘ふじ’／マルバカイドウ 1 区 1 樹

(2) 供試薬剤：ルビゲン水和剤 3,000 倍、スコア顆粒水和剤 3,000 倍、インダーフロアブル 5,000 倍、アンビルフロアブル 1,000 倍、オンリーワンフロアブル 2,000 倍、ラリー水和剤 2,000 倍、ジマンダイセン水和剤 600 倍

(3) 接種源：りんご研究所県南果樹部の殺菌剤無散布圃場から罹病葉を無作為に採集し、病斑部に形成された分生子を筆で書き取り蒸留水に懸濁し、細胞計数盤を用いて分生子濃度を 1.8×10^5 個/ml に調整して供試した。

- (4) 試験方法：各新梢先端部の葉にラベルをつけ、ハンドスプレーを用いて供試薬剤を散布・風乾後、同日に分生子懸濁液を噴霧接種した。接種後、接種箱（18℃・多湿条件）に2日間静置し、以降は野外で管理した。
- (5) 調査方法：散布時につけたラベルを基準に下位7葉について、下記の発病指数別に発病の有無を調査し、発病葉率、発病度および防除価を求めた。防除価は発病度から算出した。

発病指数 0：発病なし、 1：病斑面積が葉面積の1/4未満、
2：同1/4～1/2、 3：同1/2以上

3. 調査結果

1) 薬剤感受性検定（寒天平板希釈法）

- (1) ルビゲン水和剤では最小値0.364ppm、最大値2.776ppm、平均値1.513ppmとなった。
- (2) スコア顆粒水和剤では最小値0.010ppm、最大値2.170ppm、平均値0.621ppmとなった。

2) 生物検定

- (1) 無散布が発病葉率76.8%、発病度47.6の多発生となった。その中で対照のジマンダイセン水和剤600倍が発病葉率8.8%、発病度2.9、防除価93.8と高い防除効果を示した。
- (2) DMI剤6剤では発病葉率40.0～60.4%、発病度17.9～38.5、防除価19.2～62.3と、いずれも低い防除効果を示した。

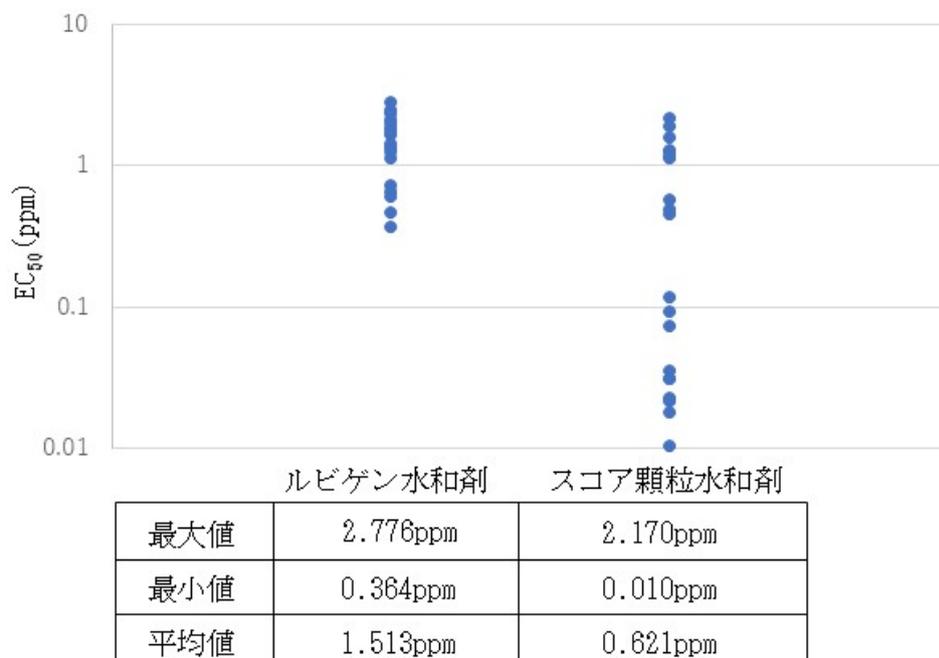


図1 県南地域におけるリンゴ黒星病菌のDMI剤感受性

表1 リンゴ黒星病に対する各種DMI剤の防除効果

供試薬剤	希釈倍数	調査 葉数	指数別発病葉数				発病葉率	発病度	防除価
			0	1	2	3			
ルビゲン水和剤	3,000倍	56	31	17	3	5	44.6%	22.6	52.5
スコア顆粒水和剤	3,000倍	91	53	29	7	2	41.8	17.9	62.3
インダーフロアブル	5,000倍	91	36	30	8	17	60.4	35.5	25.4
アンビルフロアブル	1,000倍	70	42	18	2	8	40.0	21.9	54.0
オンリーワンフロアブル	2,000倍	84	36	17	13	18	57.1	38.5	19.2
ラリー水和剤	2,000倍	56	31	17	3	4	44.6	20.8	56.3
ジマンダイセン水和剤	600倍	91	83	8	0	0	8.8	2.9	93.8
無散布		56	13	21	7	15	76.8	47.6	

4. 考察

りんご研究所県南果樹部の殺菌剤無散布圃場のリンゴ黒星病個体群において、EC₅₀ がルビゲン水和剤で0.364~2.776ppm（平均1.513ppm）、スコア顆粒水和剤で0.010~2.170ppm（平均0.621ppm）となり、両剤のベースライン感受性が0.04ppmおよび0.002ppmであることから、両剤に対する感受性が低下しているものと考えられた。また、同個体群を用いた生物検定から、供試したDMI剤6剤はいずれも防除効果が低く、効力が低下していることが明らかとなった。これらの結果から、県南地域においてもDMI剤耐性リンゴ黒星病菌の発生が確認された。

5. 今後の課題

なし

6. 要約

りんご研究所県南果樹部の殺菌剤無散布圃場のリンゴ黒星病個体群を用いて、薬剤感受性検定および生物検定を実施した。薬剤感受性検定では、ルビゲン水和剤で0.364~2.776ppm（平均1.513ppm）、スコア顆粒水和剤で0.010~2.170ppm（平均0.621ppm）となり、感受性低下が示唆された。生物検定では、供試したDMI剤6剤で防除価19.2~62.3と、いずれの薬剤においても効力低下が示唆された。以上の結果から、県南地域においてもDMI剤耐性リンゴ黒星病菌が発生しているものと考えられた。

7. 成果の公表及び特許

1) 平成31年度日本植物病理学会大会（発表）

(5) 新規 SDHI 剤の実用化試験

氏名 平山和幸・十川聡子・赤平知也

所属 りんご研究所

〒036-0332

青森県黒石市大字牡丹平字福民24

1. 調査背景と目的

黒星病に対して有効な新規 SDHI 剤の普及を目指し、一般のリンゴ栽培園において実証試験を実施し、実用性を明らかにする。

2. 調査方法

- 1) 供試薬剤：ネクスターフロアブル 1,500 倍、オルフィンフロアブル 4,000 倍
- 2) 試験園地：各薬剤 2 園地
- 3) 散布時期：‘ふじ’の「開花直前」または「落花直後」
- 4) 散布方法：スピードスプレーヤーで 10a 当たり 320～3500 散布
- 5) 対象病害：黒星病、モニリア病、うどんこ病
- 6) 調査方法
 - (1) モニリア病：5月25日に1区3樹、1樹当たり100果を対象に発生状況を調査した。
 - (2) 黒星病、うどんこ病：6月18日に1区3樹、1樹当たり10新梢の全葉及び1樹当たり100果を対象に発生状況を調査した。
 - (3) 薬害：随時、肉眼で観察した。

表1 ネクスターフロアブル試験園地の薬剤散布経過

散布時期	A園（弘前市）			B園（黒石市）		
	散布月日	実験区	対照区	散布月日	実験区	対照区
展葉1週間後頃	4月23日	ベフラン 1,000倍 アブロード 1,000倍 ダーズバン 3,000倍 トモノール 200倍	同左	4月22日	ベフラン 1,000倍 アブロード 1,000倍 ダーズバン 3,000倍 トモノール 200倍	同左
開花直前	5月1日	ネクスター 1,500倍 バイオマックス 2,000倍	フルーツセイバー 2,000倍 バイオマックス 2,000倍	5月2日	ユニックス 1,000倍 インダー 10,000倍	同左
落花直後	5月10日	ユニックス 2,000倍 ジマンダイセン 600倍 バイオマックス 2,000倍	同左	5月12日	ネクスター 1,500倍	フルーツセイバー 2,000倍
落花10日後頃	5月16日	チオノック 500倍	同左	5月22日	チオノック 500倍	同左

表2 オルフィンフロアブル試験園地の薬剤散布経過

散布時期	C園（弘前市）				D園（鶴田町）		
	散布月日	実験区	対照区		散布月日	実験区	対照区
展葉1週間後頃	4月22日	ベフラン 1,000倍 ダズバン 3,000倍 ノーマルト 4,000倍 ハーベストオイル 200倍	同左		4月23日	ベフラン 1,000倍 アブロード 1,000倍 ダズバン 3,000倍 トモノール 200倍	同左
開花直前	5月1日	オルフィン 4,000倍 カスケード 4,000倍	フルーツセイバー 2,000倍 カスケード 4,000倍		5月1日	ユニックス 1,000倍 アタブロン 4,000倍	同左
落花直後	5月11日	ユニックス 2,000倍 ジマンダイセン 600倍 カスケード 4,000倍	同左		5月11日	オルフィン 4,000倍 アタブロン 4,000倍	フルーツセイバー 2,000倍 アタブロン 4,000倍
落花10日後頃	5月16日	チオノック 500倍	同左		5月21日	ジマンダイセン 600倍	同左

3. 調査結果

- 1) ネクスターフロアブルを「開花直前」に散布したA園において、黒星病の発生は新梢葉では実験区で1.7%、対照区で4.0%であり、果実では両区ともに発生は認められなかった。他病害の発生は認められず、薬害も認められなかった。
- 2) ネクスターフロアブルを「落花直後」に散布したB園において、黒星病の発生は新梢葉では実験区で1.8%、対照区3.4%であり、果実では両区ともに発生は認められなかった。他病害の発生は認められず、薬害も認められなかった。
- 3) オルフィンフロアブルを「開花直前」に散布したC園において、黒星病の発生は新梢葉では実験区、対照区ともに16.0%であった。果実では実験区で2.3%、対照区で4.7%であった。他病害の発生は認められず、薬害も認められなかった。
- 4) オルフィンフロアブルを「落花直後」に散布したD園において、黒星病の発生は新梢葉では実験区で2.5%、対照区で4.9%であった。果実では実験区で0.7%、対照区で2.3%であった。他病害の発生は認められず、薬害も認められなかった。

表3 新梢葉における各種病害の発病状況

試験園地	区	調査葉数	発病葉率 (%)		薬害
			黒星病	うどんこ病	
A園	実験区	531	1.7	0	なし
	対照区	506	4.0	0	なし
B園	実験区	501	1.8	0	なし
	対照区	522	3.4	0	なし
C園	実験区	470	16.0	0	なし
	対照区	486	16.0	0	なし
D園	実験区	486	2.5	0	なし
	対照区	487	4.9	0	なし

表4 果実における各種病害の発病状況

試験園地	区	調査果数	発病果率 (%)			薬害
			モニリア病	黒星病	うどんこ病	
A園	実験区	300	0	0	0	なし
	対照区	300	0	0	0	なし
B園	実験区	300	0	0	0	なし
	対照区	300	0	0	0	なし
C園	実験区	300	0	2.3	0	なし
	対照区	300	0	4.7	0	なし
D園	実験区	300	0	0.7	0	なし
	対照区	300	0	2.3	0	なし

4. 考察

ネクスターフロアブル 1,500 倍およびオルフィンフロアブル 4,000 倍は黒星病に対して対照薬剤と同等の効果を示した。モニリア病およびうどんこ病は発生が認められず、防除効果は評価できなかった。薬害は認められず、両剤ともに実用性はあると考えられた。

5. 今後の課題

なし

6. 要約

ネクスターフロアブル 1,500 倍およびオルフィンフロアブル 4,000 倍は黒星病に対して防除効果を示し、薬害も認められないことから、「開花直前」または「落花直後」に使用する防除剤として実用性があると考えられた。

7. 成果の公表及び特許

- 1) 平成 30 年度農薬展示圃場設置事業（公益財団法人 青森県りんご協会）
- 2) 平成 31 年りんご病虫害防除暦（青森県りんご病虫害防除暦編成部会編）
- 3) 平成 31 年度農作物病虫害防除指針（青森県農作物病虫害防除指針編成会議編）

(6) 開花期前後に使用される殺菌剤の着果率に及ぼす影響

赤平知也

青森県産業技術センターりんご研究所

[〒036-0332 青森県黒石市牡丹平字福民24]

1. 調査背景と目的

2016年に青森県でDMI 剤耐性リンゴ黒星病菌の発生が確認されたことを受けて、2017年よりDMI 剤を使用しない防除体系を実施しているが、これまで開花期前後に使用する殺菌剤の授粉に対する影響については不明であった。そこで、開花期前後に使用される殺菌剤の授粉への影響について調査する。

2. 調査方法

1) 供試樹

りんご研究所内のC2-2号圃に植栽の12年生‘王林’／マルバカイドウを供試した。

2) 方法

2018年5月2日（王林開花日：5月1日）に供試樹の中心花が風船状（雌しべが覆われている）のものを任意に約20花そう抽出し、中心花以外は切除した。中心花の花弁をすべて切除した後、‘つがる’の貯蔵花粉を梵天で人工授粉した直後に展着剤（マイリノー10,000倍）を加用して所定濃度に調製した表1の供試薬剤をハンドスプレーで十分量散布した。これらはすぐにパラフィン紙袋で被覆し、調査までそのままにした。また、授粉3時間後にも同様の試験を行った。

3) 調査方法

授粉して約1か月後の5月30日に供試花そうにおける着果状況を調べた。また、6月22日には肥大状況を調査した。

3. 調査結果

- 授粉直後の散布：無処理区では着果率100%で、対照としたマイリノー散布区では着果率が76.5%とやや低かった。一方、フルーツセイバー、ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル散布区は着果率81.3~100%と対照区よりも高かった。これに対し、ユニックス顆粒水和剤散布区は着果率47.3%と低かった。肥大状況はいずれの試験区も概ね良好であった。
- 授粉3時間後の散布：無処理区では着果率100%で、対照としたマイリノー散布区では着果率が94.1%と高かった。また、供試した薬剤は着果率がいずれも80.0~100%と高かった。肥大状況はいずれの試験区も概ね良好であった。

表1 各種薬剤の授粉直後の散布による影響

供試薬剤	希釈倍数	調査果数	着果数	着果率	肥大状況		
					良好	不良	正常果率
フルーツセイバー	2,000	16	13	81.3	11	2	84.6
ユニックス顆粒水和剤	1,000	19	9	47.3	8	1	88.9
ジマンダイセン水和剤	600	19	19	100.0	19	0	100.0
チオノックフロアブル	500	19	18	94.7	15	3	83.3
展着剤(マイリノー)	10,000	17	13	76.5	13	0	100.0
無処理	—	20	20	100.0	20	0	100.0

表2 各種薬剤の授粉3間後の散布による影響

供試薬剤	希釈倍数	調査果数	着果数	着果率	肥大状況		
					良好	不良	正常果率
フルーツセイバー	2,000	20	18	90.0	15	3	83.3
ユニックス顆粒水和剤	1,000	17	14	82.4	12	2	85.7
ジマンダイセン水和剤	600	17	16	94.1	16	0	100.0
チオノックフロアブル	500	20	16	80.0	15	1	93.8
展着剤(マイリノー)	10000	17	16	94.1	16	0	100.0
無処理	—	20	20	100.0	20	0	100.0

4. 考察

本年度はほとんどの園地で「落花直後」にユニックス顆粒水和剤を散布しているにも関わらず、県内の着果率は概ね良好であったことから、実用的に問題はないと考えられた。

5. 今後の課題

今後、開花期に採用予定の薬剤については同様の試験を実施して、授粉への影響を調べる必要がある。

6. 要約

開花期前後に使用するフルーツセイバー、ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、ユニックス顆粒水和剤の中で、授粉直後の散布でユニックス顆粒水和剤は着果率が低かったが、それ以外の薬剤は実用的に問題はないと考えられた。

7. 成果の公表及び特許

なし

(7) 苗木における黒星病の発病状況

十川聡子、赤平知也、平山和幸

青森県産業技術センターりんご研究所

[〒036-0332 青森県黒石市大字牡丹平字福民24]

1. 調査背景と目的

秋田県及び長野県の生産者から、青森県の種苗業者から購入したりんごの苗木にリンゴ黒星病の発生が見られるとの報告があり、りんご苗木上における黒星病の越冬が疑われた。そこで青森県内の種苗業者から購入したりんご苗木を植え付け、リンゴ黒星病の発病状況を調査した。

2. 調査方法

1) 発病状況

平成30年2月に青森県内のA種苗会社及びB種苗会社から購入したりんごの1年生の苗木を冷蔵庫内で越冬させ、平成30年5月29日に黒石B9号圃に先刈りせずに植え付けた。植え付けた苗木はA種苗業者から購入した‘コスモふじ’40本及び‘三島ふじ’42本、B種苗業者から購入した‘三島ふじ’57本である。さらに周辺圃場から飛来する黒星病胞子による感染を防ぐために、ビニール製の雨よけを苗木の上部に設置した。平成30年6月21～26日に苗木の芽の位置別に黒星病の発病を調査した。

2) 分離

発病のあった苗木上に残っていた芽鱗片を回収し、70%エタノール、2%次亜塩素酸ナトリウム、滅菌水の順に浸漬させ、PDA培地及びベノミルを添加したPDA培地(ベノミル:167ppm)上に置き、黒星病菌の分離を試みた。

3. 調査結果

1) 発病状況

調査の結果、植え付けた苗木において黒星病の発病が認められた。発病樹率はA種苗業者から購入した‘コスモふじ’が25.0%、‘三島ふじ’が2.4%、B種苗業者から購入した‘三島ふじ’が8.8%であった。発病は全て葉裏で観察され、葉の中心の葉脈上で多く見られた。また、葉柄上にも発病が見られた。発病葉はいずれも先端1～7番目の芽で観察され、各葉そのの展葉1～3枚目であった。

2) 分離

発病のあった苗木上に残っていた芽鱗片からは黒星病菌は分離できなかった。



図1 苗木における黒星病の発病葉

表1 苗木における黒星病の発病状況

種苗業者	品種	調査樹数	芽数/樹	発病樹数	発病葉のあった芽の数	発病葉/発病芽	発病樹率
A	コスモふじ	40本	33.8個	10本	13個	1.2枚	25%
	三島ふじ	42本	34.4個	1本	1個	1.1枚	2.4%
B	三島ふじ	57本	19.8個	5本	10個	1.1枚	8.8%

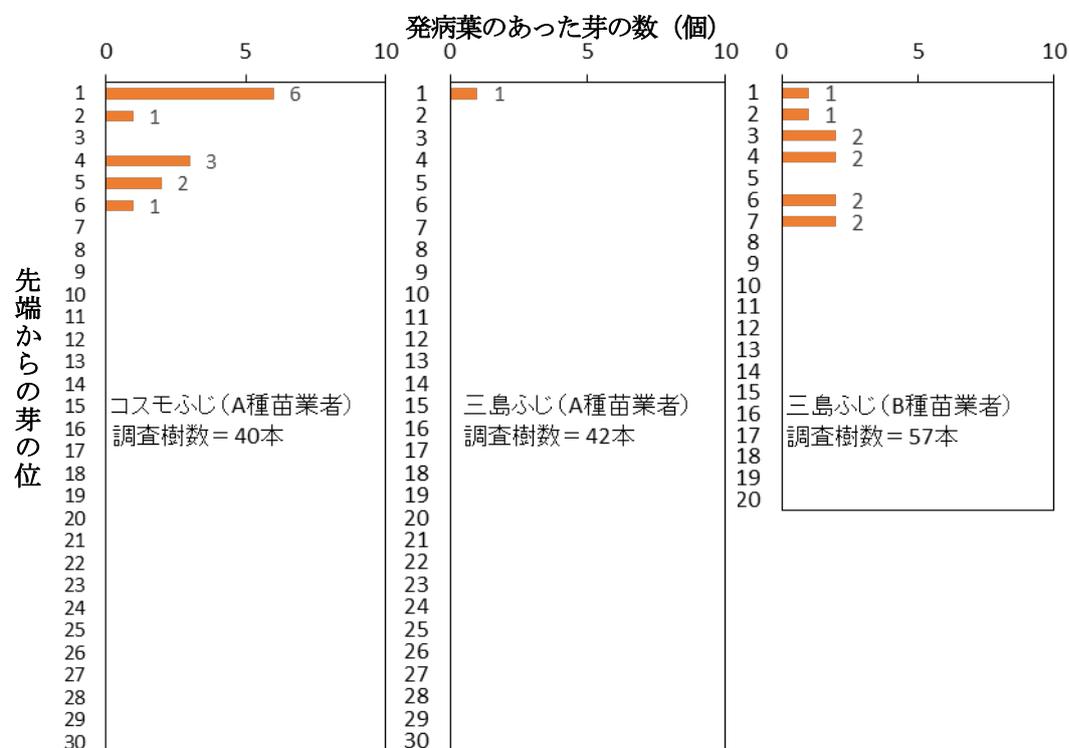


図2 苗木における発病葉のあった芽の位置

4. 考察

苗木上に残っていた芽鱗片から黒星病菌を分離することはできなかったが、苗木における黒星病の発病状況から、苗木上で黒星病菌が越冬している可能性が考えられた。

5. 今後の課題

苗木上の組織における黒星病菌の分離、及び越冬形態の解明。
苗木育成中における効果的な防除法。

6. 要約

青森県内の種苗会社から購入したりんごの1年生の苗木を、雨よけ設置下で圃場に植え付けたところ、苗木の葉の裏側において黒星病の発病が確認された。

7. 成果の公表及び特許

なし

病害虫の効率的防除体制の再編委託事業

東北ブロック：「DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立」

1. DMI剤感受性検定

氏名 佐藤 裕

所属 秋田県果樹試験場 生産技術部

[〒013-0102 秋田県横手市平鹿町醍醐字街道下 65]

1. 調査背景と目的

リンゴ黒星病は秋田県南部では 10 数年にわたり生産現場でも発生が認められなかったが、2016 年ころから、徐々に発生園が増加し、2017 年、2018 年は発生地点、発生面積ともに急増し、果実被害も認められた。県外ではリンゴ黒星病菌に対し DMI 剤の効力低下が確認されており、本県でのリンゴ黒星病菌の DMI 剤感受性を明らかにし、今後の防除対策の資とする。

2. 調査方法

1) フェナリモル感受性検定

標本採集場所：県内各地域の黒星病発生ほ場

感受性検定法：PDA培地にフェナリモル（ルビゲン）を0および0.01、0.05、0.1、0.5、1、5、10、50、100ppmになるよう添加した薬剤感受性検定培地を作製した。次に、前培養菌叢をφ4mmのコルクボーラーで打ち抜き、菌そう面が培地に接するように置床し、20℃、暗黒下、3週間培養後、菌そう直径（長径、短径）を計測した。それぞれの平均菌そう伸長量を基にEC50値を算出し、1.0ppmを超えた菌株を耐性菌とした。

2) CYP51遺伝子解析

リンゴ黒星病菌のCYP51遺伝子について塩基配列解析を行い、塩基配列の変異株（以下、変異株）の検出を行った。なお、遺伝子解析は農研機構果樹茶業研究部門リンゴ研究領域にすべて依頼した。

3. 調査結果

1) 多発した2園地についてフェナリモル感受性検定を行った。湯沢市高村の分離株ではEC50値が高い3菌株を耐性菌と判断した。また、低感受性菌も多く検出された(表1)。

2) 県南部の36園地、275菌株について遺伝子解析を行い、11園地（内2圃場は苗木）で変異株が検出された(表2)。野生株のみが検出された圃場の多くが少発生で局所に分布していたが、変異株の検出率の高い圃場では園全体に蔓延している傾向がみられた(表3、4)。また、培地検定により耐性菌が検出された試験1の湯沢市高村ではCYP遺伝子解析を10株で行った結果、10株いずれも変異株であった(表4のNO.1ほ場)。

表1 多発園地由来黒星病菌のフェナリモル感受性検定結果

採集地	供試菌株数	耐性菌	EC50値	
			感受性菌	耐性菌
湯沢市高村	23	3	0.27-0.67	1.26-4.78
横手市金沢	13	0	0.12-0.99	

表2 CYP51遺伝子の解析結果

調査市名	調査 ほ場数	変異株 検出ほ場数
大仙市	1	0
湯沢市	10	4
横手市	25	7
合計	36	11

表3 CYP変異株が検出された園の状況

ほ場NO.*	状況、防除自体等
1	圃場全体に蔓延。苗の持ち込みは無く自然発生とみられる。園主は機関誌に掲載された病徴写真を見て、初めて黒星病の発生を確認し、指導に機関に連絡した。個人散布で、散布量は周辺農家より少ない。
5	圃場全体に蔓延。機関誌に掲載された病徴写真を見て、初めて黒星病の発生を確認した。開花期前後の防除実績は開花直前DMI剤単用、落花直後、保護殺菌剤加用オンリーワンFL 4,000倍を散布(H28,29,30年)
9	局所発生(SSの方向転換地点付近)

※ ほ場NO.は表4を参照

表4 CYP遺伝子解析の結果

NO.	採集地	CYP51遺伝子解析			参考 cyp-b遺伝子解析	
		調査株数	陽性株		調査株数	陽性株
1	湯沢市 高村T	10	10	多発生		
2	湯沢市 高村W	10	8	散見	5	3
3	湯沢市 高村G	7	2	散見	5	1
4	湯沢市 高村K	8	5	1樹		
5	横手市 平鹿町	4	4	多発生		
6	横手市 平鹿町	7	7	局所		
7	横手市 平鹿町	6	4	局所		
8	横手市 平鹿町	8	8	局所		
9	横手市 雄物川町	8	7	局所	8	7
10	横手市 雄物川町	6	0	局所		
11	横手市 雄物川町	3	0	局所		
12	横手市 雄物川町	7	0	局所		
13	大仙市 花館	10	0	局所		
14	横手市 醍醐	11	0	散見		
15	横手市 醍醐	5	0			
16	横手市 醍醐	12	0			
17	横手市 醍醐	10	0			
18	横手市 増田	2	0	局所		
19	横手市 栄	9	0	局所		
20	横手市 平鹿町	8	0	局所		
21	横手市 十文字	14	0	局所		
22	横手市 金沢	17	0	散見	5	0
23	横手市 外目	5	0	多発生		
24	横手市 中山	4	0	局所		
25	横手市 平鹿	6	0	局所		
26	横手市 旭	4	0	局所		
27	横手市 醍醐	4	0	局所		
28	湯沢市 三関	8	0	局所		
29	湯沢市 桜沢	2	0	局所		
30	湯沢市 東福寺	10	0	多発生	7	0
31	湯沢市 東福寺	10	0	局所		
32	湯沢市 東福寺	6	0	局所		
33	湯沢市 秋の宮	12	0	局所		
34	横手市 増田	2	0	県外産1年生苗		
35	横手市 平鹿	10	10	県外産2年生苗		
36	横手市 増田	10	10	県外産1年生苗		

4. 考察

県南部でも広範囲に黒星病の発生が確認され、特に変異株が検出され 11 園地中 2 園地では耐性菌が園内に蔓延した状態であり、今後は DMI 剤を用いない防除体系を適用する必要がある。なお、耐性菌の検出した圃場では、昨年まで黒星病の発生が多かった圃場はなかったとみられることや、1 園地を除き苗木の持ち込みがない（周辺園地を含め）ことから、それぞれ園内で耐性が発達したオリジナル耐性菌の可能性が高い。

5. 今後の課題

耐性菌検出圃場での次年度以降の防除体系構築と実証試験の実施

6. 要約

県南部で多発生した 2 園地について、黒星病のフェナリモル感受性を検定した結果、1 園地で耐性菌が検出された。また、36 園地から発病葉を採集し、CYP51 遺伝子解析を行い塩基配列変異について検討した結果、11 園地から変異株が検出された。

7. 成果の公表及び特許

秋田県リンゴ黒星病緊急対策連絡協議会において試験結果を情報提供した。

病害虫の効率的防除体制の再編委託事業

東北ブロック：「DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立」

2. 新防除体系の実用性の検討

氏名 佐藤 裕

所属 秋田県果樹試験場 生産技術部

[〒013-0102 秋田県横手市平鹿町醍醐字街道下 65]

1. 調査背景と目的

リンゴ黒星病防除の中心的な殺菌剤である DMI 剤は、秋田県内に広く普及し、既に 20 年以上が経過している。耐性菌管理の観点から、DMI 剤を使わない黒星病防除体系の構築を急ぐ必要がある。また、新たな体系のもとでも、他の病害に対して現行防除体系並みの防除圧を維持することが求められる。本試験では、新防除体系の黒点病や褐斑病など他の病害に対する防除効果についても検討する。

2. 試験方法

1) 試験場所および供試樹

場内 25 号圃 ふじ/M.26/マルバカイドウ、38 年生樹、1 区 1 樹、2 反復

試験区の構成および散布日は下表の通り

	現行防除体系	A体系	B体系
芽出し10日後 4/17	-	ベフラン1000	ベフラン1000
開花直前 4/28	オンリーワン2000 チオノック500	フルーツセイバー1500 チオノック500	ネクスター1500 チオノック500
落花直後 5/11	アンビル2000 ジマンダイセン600	ユニックス2000 ジマンダイセン600	ユニックス2000 ジマンダイセン600

以降の防除は全区一律(現行防除体系区、A区、B区)

5/22 ジマンダイセン600、6/6 デラン1000、6/22 アントラコール500、7/6 パスポート1000、7/19 オキシラン600、8/7 アリエッティC800、8/21 ダイパワー1000、9/6 ストライド1500

2) 調査方法及び調査日

黒星病：6月18日(叢葉)、6月25日(新梢葉)、8月29日(叢葉)

褐斑病：8月2日(叢葉)、10月9日(叢葉)

果実調査：11月28日(黒星病、褐斑病、黒点病)

3. 調査結果

1) 黒星病は少発生条件での試験となった。葉、果実での発生量に防除体系間の差は認められなかった(表1、3)。また、褐斑病は散布期間中は発生が認められなかったが、秋季になり体系AおよびBでわずかに発病が認められた(表2)。

2) 果実の発病調査では無散布区で褐斑病が発病果率が60.0%と多発したが、いずれの防除体系でも発生がほとんど認められず、十分な防除効果が得られた。黒点病についても、主な感染期が落

花期以降にあったことから、いずれの体系でも十分な防除効果が得られた（表3）。

表1 各試験での黒星病の発生状況

試験区	区	6月18日調査		6月25日調査		8月29日調査			
		調査 叢数	発病 叢率(%)	調査 新梢数	発病 新梢率(%)	調査 叢数	発病 叢率(%)	調査 葉数	発病 葉率(%)
体系A	I	50	0	100	4	40	0	279	0
	II	50	0	100	0	40	0	260	0
		50.0	0.0	100.0	2.0	40.0	0.0	269.5	0.0
体系B	I	50	0	100	0	40	0	248	0
	II	50	0	100	0	40	0	239	0
		50.0	0.0	100.0	0.0	40.0	0.0	243.5	0.0
慣行体系	I	50	0	100	8	40	0	252	0
	II	50	0	100	0	40	0	252	0
		50.0	0.0	100.0	4.0	40.0	0.0	252.0	0.0
無防除	I	50	10	100	17	40	7.5	269	1.9
	II	50	2	100	6	40	0	228	0
	III	50	6	100	7	40	0	220	0
		50.0	6.0	100.0	10.0	40.0	2.5	239.0	0.6

表2 褐斑病の発生状況

	区	8月2日調査				10月9日調査	
		調査 叢数	発病 叢率(%)	調査葉数	発病 葉率(%)	調査 叢数	発病 叢率(%)
体系A	I	40	0	288	0.0	100	5
	II	40	0	271	0.0	100	4
		40.0	0.0	279.5	0.0	100.0	4.5
体系B	I	40	0	235	0.0	100	9
	II	40	0	253	0.0	100	6
		40.0	0.0	244.0	0.0	100.0	7.5
慣行	I	40	0	258	0.0	100	0
	II	40	0	253	0.0	100	0
		40.0	0.0	255.5	0.0	100.0	0.0
落花期まで無散布	I	40	0	254	0.0	100	7
	II	40	2.5	246	0.4	100	13
		40.0	1.3	250.0	0.2	100.0	10.0
無防除	I	40	47.5	290	17.2	100	100
	II	40	7.5	268	10.8	100	100
		40.0	27.5	279.0	14.0	100.0	100.0

表3 各試験区の果実病害発生状況

	区	調査果数	発病果率(%)		
			黒星病	褐斑病	黒点病
体系A	I	68	0	0	0
	II	64	0	0	0
		66.0	0.0	0.0	0.0
体系B	I	118	0	0	0
	II	105	0	1.0	0
		111.5	0.0	0.5	0.0
慣行体系	I	67	0	0	0
	II	59	0	0	1.7
		63.0	0.0	0.0	0.8
落花期まで無散布	I	68	0	0	0
	II	139	0	0	0.7
		103.5	0.0	0.0	0.4
無防除	I	261	0.8	49.0	39.8
	II	82	1.2	64.6	15.9
	III	184	3.3	66.3	28.8
		175.7	1.7	60.0	28.2

4. 考察

以上の結果から、DMI 剤を使用しない防除体系 A, B いずれも黒星病少発生の条件下では十分な防除効果が得られ、褐斑病、黒点病についても防除上の差は生じないと考えられた。なお、うどんこ病は発生量が極少、赤星病は発生が無かったため調査ができなかった。

5. 今後の課題

多発条件下での防除効果

うどんこ病、赤星病など開花期前後に主要感染期をもつ病害に対する防除効果

6. 要約

黒星病に対し、DMI 剤を用いず SDHI 剤とアニリノピリミジン系剤を開花期前後に使用する防除体系の実用性を検討した。黒星病少発生の条件下では十分な防除効果が得られた。また、開花期前後が主な感染時期となる褐斑病、黒点病についても防除体系による差は認められず、いずれの防除体系でも高い効果が認められた。

7. 成果の公表及び特許

秋田県リンゴ黒星病緊急対策連絡協議会において試験結果を情報提供した。

子のう胞子飛散消長調査

氏 名 中村佐之

所 属 秋田県果樹試験場総務企画班（かづの果樹センター）

[〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字小坂野 3-12]

1. 調査背景と目的

平成 24 年以降、鹿角地域を主体にリンゴ黒星病の多発園が見られるようになり、DMI 剤の感受性も、耐性方向へシフトしていることが確認されている。リンゴ黒星病の防除で重要なのは、子のう胞子による初期の感染をいかに防ぐかにある。そこで、重点防除時期を見極めるために子のう胞子の飛散時期を明らかにする。

2. 調査方法

1) 調査場所：かづの果樹センター内ほ場 1 号圃（予察圃）

2) 調査方法：

- ・2017年秋に被害葉を採集しネットに入れ屋外に静置した。
- ・2018年4月14日に胞子収集器を被害葉上に設置した。スライドガラス（76×26mm）上に、18×18mmに切った透明両面テープ（スリーエムジャパン社 スコッチ665-3-18）を貼り、胞子収集器内に約24時間静置した。
- ・スライドガラス回収後、メチレンブルーで染色しカバーガラス（18×18mm）をかぶせ、顕微鏡下でその範囲内にある子のう胞子数を計数した。

3. 調査結果

- 1) 本年の消雪日は平年並の3月30日であった。
- 2) 4月15日に9個の子のう胞子飛散を確認した。4月24日は午後1時頃から雨が降り始め、夕方の調査では大量の子のう胞子の飛散を確認した（図1）。この日の雨はその後断続的に翌25日未明まで降り続いた。
- 3) 5月中旬以降、子のう胞子の飛散数は徐々に減少しながら6月1日まで続いた。以降、降雨があっても子のう胞子が確認できなかったため、6月8日に調査を終了した。

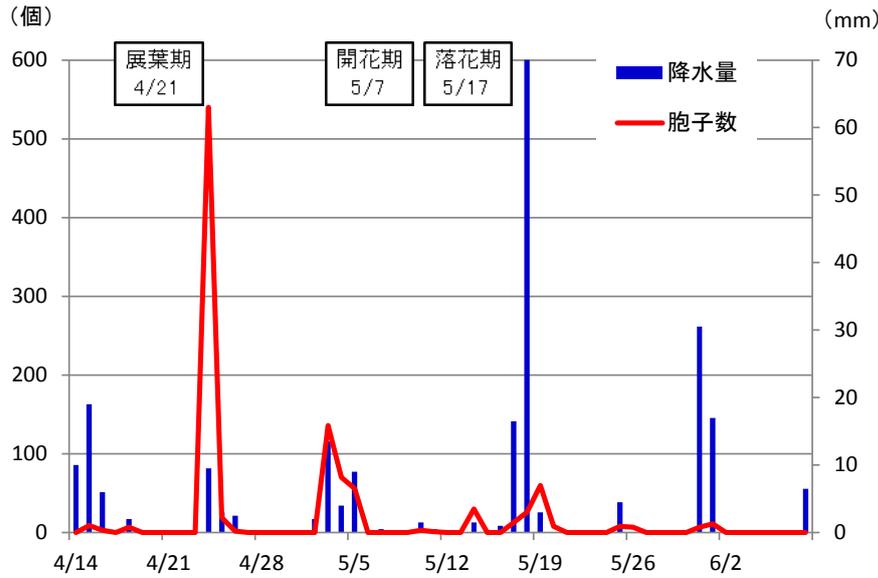


図1 黒星病子のう胞子の飛散消長と降水量

4. 考察

2017年の調査では、開花期前後に胞子飛散ピークを迎えており、この時と比べると2018年は早い時期に大量の子のう胞子を飛散したことになる。この時期が初感染と推測されるが、展葉期の防除が疎かになった園地では、5月中旬から多発した園地も見られた。

浅利の報告(2008年 北日本病害虫研報)では、消雪日以降の日平均気温の積算温度が180日度に達した後の降雨で胞子が飛散するとあるが、本年の場合、3月30日を起点とすると180日度に達したのが4月26日であった。4月24日時点の積算温度は約167度であったが、消雪日前の3月下旬も数日、落葉を入れたネットが露出していたこと等から、浅利の報告にほぼ合致すると考えられた。

5. 今後の課題

2019年もの同様の調査を実施する。

6. 要約

本年の子のう胞子の飛散は4月15日に開始し6月1日に終息した。4月24日の降雨に伴い大量の子のう胞子が飛散しこの時がピークとなった。この日が本年の初感染と推定された。

7. 成果の公表及び特許

講習会への活用

培地上における薬剤感受性検定

氏 名 中村佐之

所 属 秋田県果樹試験場総務企画班（かづの果樹センター）

[〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字小坂野 3-12]

1. 調査背景と目的

県内各地から採取されたリンゴ黒星病菌の薬剤感受性検定を行い、県内のDMI 剤耐性菌の有無、耐性程度などを明らかにする。

2. 調査方法

- 1) 採取場所：鹿角市内リンゴ園：2カ所、大館市内リンゴ園地：1カ所
- 2) 分離方法：葉の病斑を、70%エタノール次いで50%エタノールに約30秒浸漬した後、滅菌水で2回洗浄し2%素寒天平板培地に置床、20℃暗黒化で約2週間培養した。鹿角市内園地2カ所からはそれぞれ15菌株（SN園）と3菌株（SG園）、大館市内園地からは4菌株（TK園）を得た。
- 3) 感受性検定：得られた菌株はPDA培地で前培養した。PDA培地にフェナリモル（ルビゲン水和剤）を0および0.01、0.05、0.1、0.5、1、5、10、50、100ppmになるよう添加し、前培養菌叢をφ4mmのコルクローラーで打ち抜き菌叢が培地に接するように置床し、20℃暗黒化で21日間培養した後、菌叢直径（長径、短径）を計測し、それぞれの平均菌叢伸長量を基にEC50値を算出し、1.0ppmを超えた菌株を耐性菌とした。

3. 調査結果

- 1) 例年、黒星病の発生が多い鹿角市内2園地、と本年、特異的に発生が見られたあ大館市1園地のフェナリモル感受性検定を行った。そのうち、鹿角市のSG園の2菌株および大館市TK園の4菌株がEC50値で1.0ppmを超え耐性菌と判断した。SN園では耐性菌と判断された菌株はなかったが、EC50値がやや高い菌が検出され、感受性の低下が示唆された（表1）。

4. 考察

変異菌株が検出された園地はここ数年、苗木の導入実績がなかったことから、変異菌株は、園外から持ち込まれたものではなく、園地の中で時間の経過とともに変異してきたと考えられた。

果樹研究所リンゴ研究領域で行ったCYP51遺伝子解析による耐性菌の出現率は、SN園0%、SG園10%、TK園100%であった。

表1 フェナリモル感受性検定結果

採取地	園地名	供試菌株数	耐性菌株数	EC50値	
				感受性菌	耐性菌
鹿角市	S N園	15	0	0.45-0.91	
〃	S G園	3	2	0.56	1.15-1.47
大館市	T K園	4	4	1.16-1.80	

5. 今後の課題

本年度調査した地点以外の黒星病菌の感受性検定を行う。耐性菌の頻度が高い園地ではDMI剤を使用しない防除体系を指導していく必要がある。しかしながら、必ずしも耐性菌発生園＝多発園ではないため、発生に関わる要因の検索が必要である。

6. 要約

鹿角市内で黒星病の発生が多い地区の2園地18菌株、本年、特異的に多かった大館市1園地4菌株についてフェナリモル感受性検定を行った。その結果、鹿角市の1園地2菌株、大館市の4菌株で耐性菌が検出された。

7. 成果の公表及び特許

講習会への活用

植物体上における薬剤感受性検定

氏 名 中村佐之

所 属 秋田県果樹試験場総務企画班（かづの果樹センター）

[〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字小坂野 3-12]

1. 調査背景と目的

鹿角市内で発生しているリンゴ黒星病菌を用いた生物検定を行い、DMI 剤およびその他の薬剤に対する防除効果について明らかにする。

2. 調査方法

- 1) 供試樹および区の設定：ポット植え‘ふじ’/マルバ台1年生、1区3樹
接種前散布区（予防効果）、接種後散布区（治療効果）
- 2) 供試薬剤：アンビルフロアブル2000倍 ベフラン液剤25 1000倍
フルーツセイバー1500倍 オルフィンフロアブル4000倍
ストロビードライフロアブル2000倍
- 3) 供試樹の管理：7月30日にポット植え1年生苗木の新梢を基部まで切り戻し、新しい枝の発生を促した。適宜、かん水を行い、またアブラムシ対策の防除を行った。
- 4) 接種源の調整：9月上旬に、センター内ほ場と現地ほ場（寺坂）から、黒星病のり病葉を採集し、ビニール袋に入れ冷蔵庫に保存した。接種当日（9月11日）に、病斑部に形成された分生子をブラシでかき取り滅菌水に懸濁し、孢子濃度を約 3×10^4 個/mlに調整した。なお、センターほ場および現地ほ場由来の菌は、CYP51遺伝子解析の結果、いずれからも変異株は検出されなかった。
- 5) 試験方法：新梢先端の展開葉と未展開葉の間に紐でラベルをつけ、接種前散布の区にハンドスプレーで薬剤を散布、風乾させた。その後、全樹に孢子懸濁液をハンドスプレーで噴霧接種し、ビニール袋をかぶせ、48時間車庫内に置いた。ビニール袋除去後、接種後散布の区に薬剤を散布した。接種後散布から26日後に、ラベルをつけた部分を基準に下位葉と上位葉について発病の有無を調査し発病葉率を求めた。

3. 調査結果

- 1) センター内ほ場由来の菌を接種した試験では、ベフラン液剤25 1000倍、オルフィンフロアブル4000倍、ストロビードライフロアブル2000倍が高い防除効果を示した。アンビルフロアブル2000倍は接種前散布で1葉、接種後散布で2葉に発病が確認された（表1）。
- 2) 現地ほ場（寺坂）由来の菌を接種した試験では、ベフラン液剤 25 1000 倍、フルーツセイバー1500 倍、ストロビードライフロアブル 2000 倍で高い防除効果を示した。アンビルフロアブル 2000 倍、

オルフィンフロアブル 4000 倍では、接種前散布の試験で 1～2 葉に発病が確認された（表 2）。

表 1 各種薬剤のリンゴ黒星病に対する効果（センター内ほ場菌）

供試薬剤	希釈倍数	接種前散布		接種後散布	
		調査葉数 (3樹計)	発病葉率 (%)	調査葉数 (3樹計)	発病葉率 (%)
アンビルフロアブル	2000倍	31	3.2	36	5.6
ベフラン液剤25	1000倍	43	0	33	0
フルーツセイバー	1500倍	34	0	35	8.6
オルフィンフロアブル	4000倍	34	0	31	0
ストロビードライフロアブル	2000倍	31	0	32	0
無散布		39	2.6		

表 2 各種薬剤のリンゴ黒星病に対する効果（現地ほ場菌）

供試薬剤	希釈倍数	接種前散布		接種後散布	
		調査葉数 (3樹計)	発病葉率 (%)	調査葉数 (3樹計)	発病葉率 (%)
アンビルフロアブル	2000倍	43	4.7	36	0
ベフラン液剤25	1000倍	44	0	33	0
フルーツセイバー	1500倍	31	0	35	0
オルフィンフロアブル	4000倍	40	2.5	31	0
ストロビードライフロアブル	2000倍	36	0	32	0
無散布		36	2.8		

4. 考察

センター内ほ場由来および現地ほ場由来の菌を接種した試験の結果、いずれの試験においてもベフラン液剤 25 1000 倍、ストロビードライフロアブル 2000 倍は高い防除効果を示した。

アンビルフロアブル 2000 倍は、現地ほ場由来の接種後散布以外の試験で、1～2 葉に発病が見られた。全く効果はないとは言い難いが、効力の低下が懸念される結果であった。

5. 今後の課題

本年度調査した地点以外の黒星病菌の感受性検定を行う。本年の遺伝子解析および感受性検定により耐性菌と判定された菌と感受性菌との比較も必要と考えられる。

6. 要約

5 種類の殺菌剤について、センター内ほ場由来および現地ほ場由来の菌を接種源とした防除試験を行った。アンビルフロアブル 2000 倍はひとつの試験区を除き発病が見られ、効力低下が考えられた。

7. 成果の公表及び特許

講習会への活用

効果的な薬剤の検索

氏 名 中村佐之

所 属 秋田県果樹試験場総務企画班（かづの果樹センター）

[〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字小坂野 3-12]

1. 調査背景と目的

各種殺菌剤のリンゴ黒星病に対する防除効果を明らかにする。

2. 調査方法

1) 調査場所：かづの果樹センター内ほ場 1 号圃（予察圃）

2) 試験方法

①供試樹 ふじ/CG80台 樹齢23年生 1区1樹 2～3反復

②供試薬剤

ベフラン液剤25	1000倍	アリエッティ水和剤	800倍
フルーツセイバー	1500倍	アンビルフロアブル	2000倍
ジマンダイセン水和剤	600倍	無散布	

③処理月日 平成30年4月26日（展葉期）、5月8日、20日、6月2日 の計4回

④処理方法 1樹当たり約5Lを背負式動力噴霧器で散布した。展着剤は加用しなかった。

⑤調査方法 6月14日（最終散布12日後）に1樹あたり20新梢の全葉について、下記の指数別に発病状況を調査し発病葉率と発病度を求めた。また果実についても全果について発病状況を調査した。サビの発生状況、薬害については肉眼で観察した。

なお、ベフラン液剤25試験区については、7月2日に果実へ袋かけを行い、11月2日にサビ果の発生状況について調査を行った。

発病指数 0：発病なし 1：病斑面積が葉面積の1/4以下

2：病斑面積が葉面積の1/4以上～1/2以下 3：病斑面積が葉面積の1/2以

上

発病度 = Σ （指数値 × 程度別発病葉数） / （3 × 調査葉数） × 100

3. 調査結果

1) 試験期間中の降水量は、展葉期（4月21日）から1回目散布までが12.5mm、1回目から2回目の間
が31.5mm、2回目から3回目の間が126mm、3回目から4回目までの間が52mmであった。黒星病の
子のう胞子は、試験前の4月24日に大量の飛散が確認され、以後、5月3～5日、14日、17～20
日、25～26日、5月31日～6月1日に確認された（図1）。

2) 調査時における新梢葉無散布区の発病葉率が27.4%、発病度13.6と中程度の発生であった。ベフラ

ン液剤25 1000倍、フルーツセイバー1500倍、アンビルフロアブル2000倍、ジマンダイセン水和剤600倍の防除価は97.8~99.0と効果が高く、アリエッティ水和剤800倍は他の薬剤に比べ効果が劣った(表1)。

- 3) 果実では調査時の発病果率が24.5%と中程度の発生であった。ベフラン液剤25 1000倍、フルーツセイバー1500倍、ジマンダイセン水和剤600倍で効果が高かった。アンビルフロアブル2000倍、アリエッティ水和剤800倍でも防除価が90を超えており効果は認められるが、わずかに発病果が確認された(表2)。
- 4) ベフラン液剤 25 1000 倍では5月中下旬に葉がやや湾曲する症状が見られたが、その後の生育に大きな影響はなかった。果実ではサビ果の発生が確認され、収穫時の発生率は約43%であった。

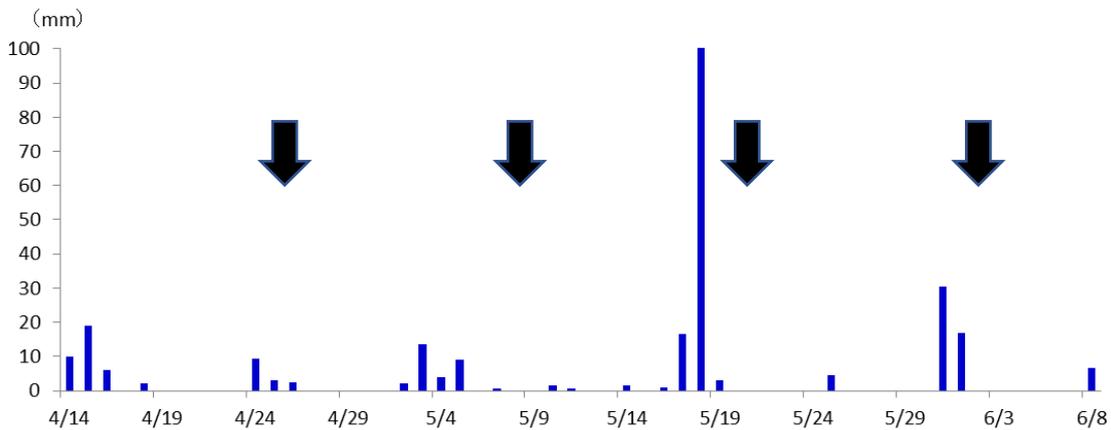


図1 試験期間中の降水状況 (矢印は散布日)

表1 リンゴ黒星病に対する各種殺菌剤の防除効果

(1) 新梢葉

供試薬剤 (希釈倍数)	調査樹数	調査葉数 (平均)	指数別葉数				発病葉率 (%)	発病度	防除価	葉害
			0	1	2	3				
ベフラン液剤25 (1000倍)	2	253.0	252.0	1.0	0.0	0.0	0.4	0.1	99.0	±
フルーツセイバー(1500倍)	2	224.5	223.0	1.0	0.0	0.0	0.7	0.2	98.3	—
ジマンダイセンWP(600倍)	2	237.0	235.0	2.0	0.0	0.0	0.9	0.3	97.9	—
アンビルF (2000倍)	2	227.0	225.0	2.0	0.0	0.0	0.6	0.3	97.8	—
アリエッティWP(800倍)	2	235.5	220.0	13.0	2.0	0.5	6.9	2.8	79.7	—
無散布	3	226.7	164.3	41.3	12.0	9.0	27.4	13.6		

(2) 果実

供試薬剤 (希釈倍数)	調査樹数	調査果数 (平均)	発病果数 (平均)	発病果率 (%)	防除価	葉害
ベフラン液剤25 (1000倍)	2	78.5	0	0.0	100	+
フルーツセイバー(1500倍)	2	18.5	0	0.0	100	—
ジマンダイセンWP(600倍)	2	86.5	0	0.0	100	—
アリエッティWP(800倍)	2	48.0	0.5	0.8	96.6	—
アンビルF (2000倍)	2	62.0	1.5	1.9	92.0	—
無散布	3	83.0	20.3	24.5		

4. 考察

今回の試験では、展葉期から散布を行った。子のう胞子の飛散量が増える時期と重なったが、

丁寧な散布を行うことで、予防効果主体の SDHI 剤や保護殺菌剤でも十分な防除効果が得られたと思われる。

センター内ほ場の黒星病菌は、遺伝子解析の結果では全て感受性菌との診断であったが、DMI 剤のアンビルフロアブルは完全に抑え込むことが出来ておらず、薬剤の効果が低下していることが考えられる。

ベフラン液剤 25 のサビ果は落花期以降の散布が影響したと考えられるが、果面の 30%以上にサビを発生した果実が 10%以上あったことから、品質面への影響はかなり大きいと思われる。

5. 今後の課題

各種の SDHI 剤を含め、新規に登録された殺菌剤の、予防、治療効果の評価が必要と思われる。

6. 要約

殺菌剤 5 剤の防除効果について試験を行った。アリエッティ水和剤以外の薬剤は高い防除効果を示した。ベフラン液剤 25 の効果は高いものの、収穫果でサビ果が見られるため、使用時期には十分注意が必要である。

7. 成果の公表及び特許

講習会への活用

新防除体系の実用性の検討

氏 名 中村佐之

所 属 秋田県果樹試験場総務企画班（かづの果樹センター）

[〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字小坂野 3-12]

1. 調査背景と目的

DMI 剤の使用回数を 1 回ないしは全く使用せずにリンゴ黒星病を防除できる体系構築し、その実用性について検討する。

2. 調査方法

1) 調査場所：かづの果樹センター内ほ場 8 号圃

2) 試験方法

①供試樹 ふじ/M9. マルバ付き 樹齢21年生 1 区 3 樹

②試験区および処理月日

時期	散布日	1区	2区	3区(慣行)	4区(無散布)
芽出し 後10日	4/27	ベフラン(1000)	ベフラン(1000)	ベフラン(1000)	—
開花直前	5/8	オンリーワン(2000) フルーツセイバー(1500)	チオノック(500) フルーツセイバー(1500)	チオノック(500) オンリーワン(2000)	—
落果直後	5/21	ユニックス顆粒(2000) ジマンダイセン(600)	ユニックス顆粒(2000) ジマンダイセン(600)	チオノック(500) オンリーワン(2000)	—
落花後 10日	6/4	ジマンダイセン(600)	ジマンダイセン(600)	ユニックス顆粒(2000) ジマンダイセン(600)	—

以降は全区で慣行と同様に防除を実施

・薬剤名 ベフラン…ベフラン液剤25、オンリーワン…オンリーワンフロアブル、チオノック…チオノックフロアブル、
ユニックス顆粒…ユニックス顆粒水和剤47、ジマンダイセン…ジマンダイセン水和剤

・6月中旬以降の防除薬剤（殺菌剤のみ）

6/18…テランフロアブル2000倍、6/26…アントラコール顆粒水和剤500倍

7/10、25…ハースト顆粒水和剤1000倍、8/9…ダィワワー水和剤1000倍

8/21…カリアWDG2000倍、9/11…ストライド顆粒水和剤1500倍

③初期生態 発芽期…4月12日、展葉期…4月21日、開花始期…5月7日、満開期…5月12日、
落花期…5月17日

④処理方法 1 樹当たり約 10～15 L を動力噴霧器で散布した。展着剤（マイリノー10000 倍）を加用した。4 月 27 日にはハーベストオイル 100 倍、5 月 21 日にはサムコルフロアブル 5000 倍を加用した。

⑤調査方法

- ・黒星病：初発確認以降、10日おきに6月末まで、1樹50本の果そうおよび新梢を任意に選択し、発病の有無を調査し発病果そう率、発病新梢率を求めた。防除価は6月下旬の発病新梢率から求めた。果実は6月の中旬、下旬は1樹につき50果、収穫時は全果について発病の有無を調査し発病果率を求めた。
- ・モニリア病：5月10日に1樹50果そうについて葉腐れの有無を調査し、発病果そう率を求めた。
- ・斑点落葉病、褐斑病：9月11日に1樹10新梢の全葉について発病葉数調査した。
- ・黒点病：9月11日に1樹につき全果および50果について発病の有無を調査した。
- ・赤星病：6月に発生が確認され6月25日に1樹50新梢について発病の有無を調査した。

3. 結果の概要

- 1) 黒星病の葉での初発を5月15日に確認した。果そうおよび新梢での発生状況は、無散布区で5月25日に20.7%、6月25日に100%となった。6月25日の発病新梢率は、1区で6.0%、防除価94と2区および慣行区よりやや効果が優った(表1)。
- 2) 果実では6月初旬に発病を確認し、6月下旬には無散布区で54%に被害が見られた。その後、被害果は摘果したものの収穫果でも22.4%の発病が認められた(表2)。
- 3) 斑点落葉病は、試験区1区、2区が慣行区より防除効果が高かった(表3)。
- 4) モニリア病、褐斑病(表3)、黒点病の発生は見られなかった。
- 5) 6月下旬に赤星病の発生が見られ、試験区、慣行区ともほぼ同程度の発病状況であった(表4)。

表1 果そうおよび新梢における黒星病の発生状況

区	調査本数	発病果そう率(%)		発病新梢率(%)			防除価
		5/10	5/25	6/5	6/15	6/26	
1区	150	0.0	0.0	0.7	6.7	6.0	94.0
2区	150	0.0	0.7	2.0	13.3	10.7	89.3
3区(慣行)	150	0.0	0.7	1.3	10.7	12.0	88.0
無散布	150	0.0	20.7	70.0	96.0	100	

表2 果実における発生状況

区	6/15		6/26		11/14(収穫果)	
	調査果数(個)	発病果率(%)	調査果数(個)	発病果率(%)	調査果数(個)	発病果率(%)
1区	150	0.7	150	0.7	264	0
2区	150	0.0	150	0.0	366	0.3
3区(慣行)	150	0.0	150	0.7	369	0.8
無散布	150	35.3	150	54.0	49	22.4

表3 斑点落葉病、褐斑病の発生状況 (9/11)

区	調査葉数 (枚)	発病葉率 (%)	
		斑点落葉病	褐斑病
1区	502	1.8	0.0
2区	550	3.6	0.0
3区(慣行)	599	5.8	0.0
無散布	399	8.5	0.0

表4 赤星病の発生状況 (6/25)

区	調査新梢数 (本)	発病枝率 (%)
2区	150	25.3
3区(慣行)	150	21.3
無散布	150	76.0

4. 考察

開花前にDMI剤とSDHI剤を使用した1区で最も防除効果が優れた。センター内ほ場の黒星病菌は、DMI剤に対して感受性であることから、SDHI剤の予防効果と併せ十分な防除効果が発揮されたと思われる。モニリア病、黒点病等についてはいずれの散布区も発生は少なく防除効果は高いと考えられた。

5. 今後の課題

DMI剤を使用しない体系について薬剤を変え試験事例を増やすこと、また耐性菌が存在する園地における防除効果の検証が必要である。

6. 要約

DMI剤に出来るだけ頼らない防除体系について散布試験を行った。開花前をDMI剤+SDHI剤にした区で最も防除効果が高かった。また、全くDMI剤を使用しなかった試験区は慣行区並の防除効果であった。

7. 成果の公表及び特許

講習会への活用

病害虫の効率的防除体制の再編委託事業

東北ブロック：「DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立」

DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立（１）

氏 名 三須朱夏・佐藤健治

所 属 山形県農業総合研究センター園芸試験場

[〒991-0043 山形県寒河江市大字島字島南 423]

1. 調査背景と目的

県下全域で多発しているリンゴ黒星病被害低減のために、DMI 剤に頼り過ぎない防除体系を構築する。ここでは、本県におけるリンゴ黒星病菌の CYP51A1 遺伝子変異状況を調査する。

2. 調査方法

1) 罹病葉の遺伝子検定

県内12地点から採取した県外産苗木と隣接園の罹病葉を生検トレパン(8mm径)で打ち抜き、DNA抽出キット(MagExtractor -Plant Genome -, TOYOBO)を用いてゲノムDNAを抽出し、これを鋳型としたアレル特異的PCRによりCYP51A1遺伝子のA398T変異の有無を検査した。

2) 分離株の遺伝子検定

県内17地点から組織分離法により菌株を作製し、後日単孢子分離を行なった。この分離菌株の培養菌体を少量掻き取り、前項と同じ手法でCYP51A1遺伝子のA398T変異の有無を検査した。

3) 生物検定

前項の検査により遺伝子変異型もしくは野生型と判定された各4菌株を麦芽エキス寒天培地上に麦芽エキスに含浸した不織布ガーゼを敷き、そこに菌体磨砕液を流し込んで培養し、 $1.0-1.5 \times 10^6$ 個/mlの分生子懸濁液を作製した。これをジフェノコナゾール水和剤 3,000倍液 散布1日後のリンゴポット苗(‘ふじ’/実生台、1年生)の葉表に4ポット当たり約20mlを噴霧接種し、16.5-22.5℃・高湿条件下で42時間保持した。接種終了後は、軽量鉄骨ハウス内(昼温約20℃/夜温約20℃)で管理し、発病状況を調査中。

3. 調査結果

1) 罹病葉を供試し、県外産苗木のCYP51A1遺伝子A398T変異を検査したところ、35検体中4検体で変異型が検出された。苗木植栽園地の隣接樹の検体からも同等の頻度で変異型が検出されており、この変異型が県外産苗木由来によるものかどうかは保留する(表1)。

2) 単孢子分離株を供試し、CYP51A1 遺伝子 A398T 変異を検査したところ、17 地点中 9 地点で遺伝子変異型の菌株が検出された。一部菌株分離率が 20%を超える園地が認められるが、大多数の園地では1割前後であった(表2)。

3) 生物検定は調査未了。

表1 罹病葉における CYP51A1 遺伝子の A398T 遺伝子変異状況

罹病葉採取園地名	検体数	苗木			検体数	隣接園			(参考) 検体採取月日
		変異型	野生型	不明		変異型	野生型	不明	
天童市A1	5	0	4	1	5	1	3	1	7月12日
天童市A2	5	2	3	0	5	2	3	0	7月13日
東根市A1	-	-	-	-	5	0	1	4	8月24日
東根市A2	-	-	-	-	5	0	3	2	8月24日
東根市A3	-	-	-	-	5	0	3	2	8月24日
寒河江市A1	5	1	4	0	5	1	4	0	7月11日
寒河江市A2	-	-	-	-	5	0	5	0	8月1日
寒河江市A3	5	1	1	3	5	1	2	2	8月1日
大江町A1	5	0	4	1	5	0	5	0	7月20日
大江町A2	5	0	5	0	5	0	5	0	7月20日
鶴岡市A1	5	0	1	4	5	0	3	2	8月10日
計	35	4	22	9	55	5	37	13	

表2 分離菌株における CYP51A1 遺伝子の A398T 遺伝子変異状況 (2019年1月24日現在)

菌株採取園地名	供試菌株数	CYP51A1遺伝子A398T変異		
		変異型	野生型	不明
天童市B1	9	0	9	0
天童市B2	18	2	8	0
天童市B3	9	0	9	0
天童市B4	18	1	17	0
天童市B5	12	0	12	0
東根市B1	9	0	9	0
東根市B2	18	2	16	0
東根市B3	9	0	9	0
東根市B4	9	0	9	0
東根市B5	18	6	12	0
寒河江市B1	9	1	8	0
寒河江市B2	9	1	8	0
朝日町B1	9	0	9	0
朝日和B2	18	2	7	0
朝日町B3	18	4	15	0
朝日町B4	11	2	9	0
山形園芸試験場	9	0	9	0
計	212	21 (9.9%)	175	0

4. 考察

本県りんご主産地域の11園地から90枚の罹病葉を採取しCYP51A1遺伝子A398T変異を検査するとともに、それとは異なる17園地の罹病葉から単孢子分離を行い、212菌株を供試して(2018年1月24日現在)、りんご黒星病菌の遺伝子検査を実施したところ、本県においても遺伝変異型の罹病葉及び単孢子分離株が確認された。検出状況については、遺伝子変異型単孢子分離株の園地分離率は52.9%と高かったが、一部で菌株率の高い園地がみられたものの県下全体の遺伝子変異型菌株分離率は9.9%と低率であった。この10%前後の遺伝子変異型菌株の菌株分離率が効力低下をもたらすものであるかどうかは今後の課題である。

地域的な傾向としては、2-3年前より開花期前後(開花直前、落花直後の雨前散布)のDMI混合剤使用に切り替えた園地での遺伝子変異型の園地分離率は40.0%、DMI単剤使用を継続してきた園地では83.3%と高く、当該期間の混合剤2回散布が遺伝子変異型の蔓延防止に対して有効に機能している可能性が示唆される。

また、仮に遺伝子変異型の分布がポアソン分布に近似するものとした場合、95%の確率で10%の遺伝子変異株を検出するためのサンプルサイズは1地点当たり30菌株前後となる。今後、持続的にモニタリング検査を実施するためには経費的に現実な値ではないため、モニタリング地点の設置方針を園地単位とすべきか面的な地域単位とすべきか検討が必要である。

なお、罹病葉の遺伝子検定については、7月中旬以降(最高気温、 $>30^{\circ}\text{C}$)に採取したものでは変異型、野生型いずれのバンドも検出されない罹病葉が増加する傾向がみられた。原因は不明である。

5. 今後の課題

- 1) 2018年分離株のCYAP51A1遺伝子検査の継続。
- 2) CYAP51A1遺伝子変異型菌株の生物検定の継続。
- 3) CYAP51A1遺伝子変異型菌株のEC50算出。
- 4) リンゴ黒星病菌のDMI剤耐性菌(CYAP51A1遺伝子変異型菌)のモニタリング体制の構築。
- 5) DMI剤混合剤使用時における耐性菌比率と防除効果の検討。
- 6) 病斑形成の場面におけるDMI剤耐性菌と感性菌の競合の検討。

6. 要約

2018年度採取罹病葉と分離菌株のCYP51A1遺伝子A398T変異を検査したところ、本県においても遺伝変異型の罹病葉及び単孢子分離株が確認された。検出状況については、園地分離率は52.9%と高かったが、一部では菌株率の高い園地がみられたものの県下全体の菌株分離率は9.9%と低率であった。

7. 成果の公表及び特許

なし

DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立（２）

氏 名 佐藤健治・三須朱夏

所 属 山形県農業総合研究センター園芸試験場

[〒991-0043 山形県寒河江市大字島字島南 423]

1. 調査背景と目的

県下全域で多発しているリンゴ黒星病被害低減のために、DMI 剤に頼り過ぎない防除体系を構築する。ここでは、子のう孢子飛散低減効果が期待できる各種資材を検索する。

2. 調査方法

1) 休眠期防除資材の検索

供試資材：石灰硫黄合剤 10 倍（350ℓ/10a 換算）、ベフラン液剤 1,000 倍（350ℓ/10a 換算）、尿素水溶液（現物 4.5kg/10a、水量 200ℓ/10a、N:2.1kg/10a 換算）、石灰窒素（現物 20kg/10a、N:4.0kg/10a 換算）、もみ殻完熟堆肥（2t/10a、現物当たり全窒素含有率 0.75%、窒素肥効率 10%として N:1.5kg/10a 換算）。

調査方法：休眠期間中に採取した被害落葉（前年秋季発病葉率 59.4%）を 180cm 角の木枠内に敷き詰めて供試資材を施用した。その木枠内に一次感染期間中、‘ふじ’/実生台（1 年生）ポット苗を 12 本（1 区 3 本 4 連制）設置して概ね 1 ヶ月間隔で 2 回暴露試験を行い、暴露終了後は感染防止のため雨よけハウス内で管理し、所定期間経過後に発病状況を調査した。

なお、子のう孢子飛散量は、木枠内に自作静置式孢子回収装置内を設置してグリセリンゼリーを塗布したスライドガラスの塗布面を上にして固定し、子のう孢子を回収して計測した。

3. 調査結果

- 1) 供試資材区は、いずれの区も無処理区と比較して子のう孢子飛散抑制効果が認められた（表 1）。
- 2) 供試資材区は、いずれの区も無処理区と比較して発病抑制効果が認められ、石灰硫黄合剤区で顕著であり、次いでベフラン区、堆肥区であった（表 2）。
- 3) もみがら完熟堆肥施用は、被害落葉の被覆による子のう孢子飛散低減効果を狙ったものであるが、殺菌剤や窒素資材と同等の効果が認められた。

表1 各種資材の子のう胞子飛散抑制効果

試験区	4月13日-5月7日	5月7日-5月30日
尿素区	1.5	23.0
石灰窒素	2.0	10.5
堆肥区	0	16.0
ペフラン区	1.0	8.5
石灰硫黄合剤	0	22.0
無処理区	24.5	288.0

1) 値はスライドガラス2枚のカバーガラス内(18mm×18mm)の子のう胞子数を計数し平均値を示す。

表2 各種資材の発病抑制効果

試験区	調査葉数	発病葉率	発病度 ¹⁾
尿素区	180	25.6	15.9
石灰窒素	181	28.7	12.6
堆肥区	200	19.0	6.2
ペフラン区	173	20.2	6.1
石灰硫黄合剤	195	11.3	2.6
無処理区	182	57.1	41.7

1) 発病度 = Σ (発病程度別葉数×発病指数)×100/(調査葉数×5)。発病指数 0:発病なし、1:1葉当たり病斑数1個、3:1葉当たり病斑数2-3個、5:1葉当たり病斑数4個以上。

2) 暴露期間:4月13日-5月7日(24日間)

試験区	調査葉数	発病葉率	発病度
尿素区	163	9.8	4.5
石灰窒素	170	6.5	1.7
堆肥区	135	10.4	3.9
ペフラン区	153	3.3	0.7
石灰硫黄合剤	148	4.7	1.0
無処理区	181	19.9	10.8

1) 暴露期間:5月7日-5月30日(23日間)

4. 考察

石灰硫黄合剤の春季散布による子のう胞子形成阻止効果は高橋(1)の報告と、窒素資材施用の効果も海外の実験結果と一致した。次年度以降再現性の検証が必要である。併せて今回供試した資材の10a 当たり窒素施用量は尿素でN:2.1kg、石灰窒素で4.0kg、もみ殻完熟堆肥で1.5kgであり、元肥の減肥が必要な水準なのかを検討する必要がある。

なお、Cook は尿素 2.00%、炭酸アンモニウム 3.48%、硝酸ナトリウム 4.68%、硝酸アンモニウム 4.40%および高アルカリ性資材 (>pH7.0) の秋冬期処理での子のう殻形成抑制効果を認めており、これら資材の検討も必要である。

5. 今後の課題

新たな資材検索と現地実証（樹勢、果実品質への影響を含む）

6. 要約

今回供試した資材は、いずれも子のう胞子飛散抑制による発病抑制効果が認められた。

7. 成果の公表及び特許

なし

参考文献

- (1) 高橋俊作(1986) 東北農業 38: 41-51
- (2) MachaHardy W.E. Apple Scab pp.231-232

DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立（3）

氏 名 佐藤健治・三須朱夏

所 属 山形県農業総合研究センター園芸試験場

[〒991-0043 山形県寒河江市大字島字島南 423]

1. 調査背景と目的

県下全域で多発しているリンゴ黒星病被害低減のために、DMI 剤に頼り過ぎない防除体系を構築する。ここでは、現地慣行防除体系の本病に対する防除効果を検証する。

2. 調査方法

1) 現地慣行防除体系の検証

休眠期間中に採取した被害落葉（前年秋季発病葉率59.4%）を被度100%となるよう敷き詰めた圃場において、‘ふじ’/JM7 2年生樹を各区3樹供試して、4月10日（展葉直後）から7月4日まで各地域の現地防除体系の本年度当初計画に基づいて、動力噴霧器を用いて薬液を十分量散布した。防除実績は表1のとおりである。調査は各樹10新梢を予めラベリングし、6月12日と7月10日に病斑数を調査し、発病葉率、発病度および防除価を算出した。

3. 調査結果

1) 一次感染期間（展葉期から5月末まで）の防除圧は、いずれの検証区も対照（ジマンダイセン連用区）と比較して同等の高い防除効果を示した。同様に二次感染期間（5月末から6月末まで）も対照と同等の高い防除効果を示した。

2) 本試験は、日本植物防疫協会の新農薬実用化試験に即して薬液が滴り落ちるよう十分量を散布したものである。このことから、現地における本病の多発は薬剤選定の不備によるものではなく、薬液量不足や散布ムラの関与が強く示唆される。

4. 考察

多発地域における現地防除体系（防除暦）の検証のために、薬液を十分量散布する条件で場内試験を実施したところ、一次感染期間、二次感染期間の防除体系ともに防除値が94.7以上の高い防除効果が認められた。本県の現地慣行防除における散布量は300-350リットル/10aであり、本病の多発は薬剤選定の不備によるものではなく、薬液量不足や散布ムラの関与が強く示唆された。

表1 各検証区の防除実績

散布月日	A農協検証区	B農協検証区	B-1共同防除組織検証区
4月10日	デランフロアブル 1,000倍	ジマンダイセン水和剤 600倍	ストライド顆粒水和剤 1,500倍
4月17日	-	-	-
4月23日	アビオンE 2000倍加用 オンリーワンフロアブル2000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍	トリフミン水和剤 2,000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍	インダーフロアブル 5,000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍
5月7日	スコアMZ水和剤 500倍	オンリーワンフロアブル 2,000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍	オンリーワンフロアブル 2,000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍
5月16日	アビオンE 1,000倍 トレノックスフロアブル 500倍	トレノックスフロアブル 500倍	ファンタジスタ顆粒水和剤 3,000倍 ベンレート水和剤 3,000倍
5月27日	アビオンE 1,000倍 ファンタジスタ顆粒水和剤 3,000倍	ファンタジスタ顆粒水和剤 3,000倍 トップジンM水和剤 1,500倍	スコア顆粒水和剤 3,000倍
6月2日	-	-	-
6月10日	アビオンE 1,000倍 オンリーワンフロアブル 2,000倍	スコア顆粒水和剤 3,000倍	ナリアWDG 2,000倍
6月16日	-	-	-
6月23日	アビオンE 1,000倍 ナリアWDG 2,000倍	ナリアWDG 2,000倍	スクレアフロアブル 2,000倍
6月30日	-	-	-
7月4日	アビオンE 1,000倍 オキシンドー水和剤 1,200倍	オキシラン水和剤 600倍	オキシラン水和剤 600倍

散布月日	B-2共同防除組織検証区	C共同防除組織検証区	対照(ジマンダイセン連用区)
4月10日	ジマンダイセン水和剤 600倍	-	ジマンダイセン水和剤 600倍
4月17日	-	ストライド顆粒水和剤 1,500倍	-
4月23日	トリフミン水和剤 2,000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍	オンリーワンフロアブル 2,000倍 トップジンM水和剤 1,000倍	ジマンダイセン水和剤600倍
5月7日	オンリーワンフロアブル 2,000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍	スコア水和剤 2,000倍 トレノックスフロアブル 500倍	ジマンダイセン水和剤600倍
5月16日	トレノックスフロアブル 500倍	アントラコール顆粒水和剤 500倍	ジマンダイセン水和剤600倍
5月27日	ファンタジスタ顆粒水和剤 3,000倍	-	ジマンダイセン水和剤600倍
6月2日	-	アントラコール顆粒水和剤 500倍 ポリオキシシラン水和剤 1,000倍	-
6月10日	スコア顆粒水和剤 3,000倍	-	ジマンダイセン水和剤600倍
6月16日	-	アビオンE 2,000倍 ナリアWDG 2,000倍	-
6月23日	ナリアWDG 2,000倍	-	ジマンダイセン水和剤600倍
6月30日	-	アビオンE 2,000倍 オキシンドー水和剤 1,200倍	-
7月4日	オキシラン水和剤 600倍	-	ジマンダイセン水和剤600倍

表2 各検証区のりんご黒星病に対する防除効果

検証区	平均調査				7月10日			
	葉数	発病葉率	発病度 ¹⁾	防除価 ²⁾	葉数	発病葉率	発病度	防除価
A農協検証区	167.7	0.4	0.1	99.4	169.7	1.4	0.4	96.5
B農協検証区	174.0	0.8	0.2	98.8	144.7	1.6	0.3	97.5
B-1共同防除組織検証区	158.3	0.9	0.2	98.7	163.3	1.7	0.5	96.1
B-2共同防除組織検証区	158.0	1.7	0.5	96.2	142.7	1.6	0.7	94.7
C共同防除組織検証区	158.7	1.2	0.2	98.1	154.0	0.6	0.1	99.0
対照(ジマンダイセン連用区)	159.0	0.4	0.1	99.4	161.7	1.6	0.4	96.8
無散布区	145.3	17.3	12.7	-	123.3	34.2	25.5	-

1) 発病度 = Σ (発病程度別葉数 × 発病指数) × 100 / (調査葉数 × 5)。発病指数 0: 発病なし、1: 1葉当たり病斑数1個、3: 1葉当たり病斑数2-3個、5: 1葉当たり病斑数4個以上または落葉。

2) 発病度から算出した。

5. 今後の課題

- 1) 現地防除体系検証の継続
- 2) 梅雨期間中および8月中旬以降の隣接樹種（オウトウ、モモ）に配慮した防除体系の検証

6. 要約

多発地域における現地防除体系（防除暦）の検証のために、薬液を十分量散布する条件で場内試験を実施したところ、いずれの現地防除体系も高い防除効果が認められた。現地における散布量は300-350 リットル/10a であり、本病の多発発生は薬剤選定の不備によるものではなく、薬液量不足や散布ムラの関与が強く示唆された。

7. 成果の公表及び特許

平成 31 年山形県農作物防除基準・植物調整剤使用基準策定に活用した。

DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立（４）

氏名 佐藤健治・三須朱夏

所属 山形県農業総合研究センター園芸試験場

[〒991-0043 山形県寒河江市大字島字島南 423]

1. 調査背景と目的

県下全域で多発しているリンゴ黒星病被害低減のために、DMI 剤に頼り過ぎない防除体系を構築する。ここでは、DMI 剤や QoI 剤の使用回数を減じた新しい防除体系の本病に対する防除効果を検証する。

2. 調査方法

1) DMI 剤に依存しない防除体系の検証

休眠期間中に採取した被害落葉（前年秋季発病葉率59.4%）を被度100%となるよう敷き詰めた圃場において、‘ふじ’/JM72年生樹を各区3樹供試して、4月10日（展葉直後）から7月4日まで動力噴霧器を用いて薬液を十分量散布した。防除実績は表1のとおりである。

調査は各樹10新梢を予めラベリングし、6月12日と7月10日に病斑数を調査し、発病葉率、発病度および防除価を算出した。

表1 防除実績

供試薬剤	新防除体系区	ICボルドー412連用区	対照(ジマンダイセン連用区)
4月10日	ストライド顆粒水和剤 1,500倍	ストライド顆粒水和剤 1,500倍	ジマンダイセン水和剤 600倍
4月23日	ユニックス顆粒水和剤47 2,000倍 ジマンダイセン水和剤 600倍	ICボルドー412 30倍	ジマンダイセン水和剤600倍
5月7日	スコアMZ水和剤 500倍	ICボルドー412 30倍	ジマンダイセン水和剤600倍
5月16日	ジマンダイセン水和剤 600倍	ICボルドー412 30倍	ジマンダイセン水和剤600倍
5月27日	ベルコートフロアブル 1,000倍	ICボルドー412 30倍	ジマンダイセン水和剤600倍
6月10日	ファンタジスタ顆粒水和剤 3,000倍	ICボルドー412 30倍	ジマンダイセン水和剤600倍
6月23日	ナリアWDG 2,000倍	ICボルドー412 30倍	ジマンダイセン水和剤600倍
7月4日	オキシラン水和剤 600倍	ICボルドー412 30倍	ジマンダイセン水和剤600倍

3. 調査結果

1) DMI 剤と QoI 剤の散布回数を減じた新防除体系区は、対照区と同等の高い防除効果を示した。薬害は認められなかった（表2）。

2) IC ボルドー412 連用区は対照区と同等の高い防除効果を示した。ただし、開花期以降の散布は幼果にケロイド状のサビを生じる（データ省略）。

3) ポット試験において、IC ボルドー412 散布9日後にジチオカルバメート剤（マンゼブ、チウラム、プロピネブ）を散布したところ、葉面薬滴の褐色化が認められた。チウラム、マンゼブで顕著であり、プロ

ビネブでは認められなかった。生育に対する影響はなかった。

表2 新防除体系区のりんご黒星病に対する防除効果

検証区	6月12日			7月10日				
	平均調査 葉数	発病葉率	発病度 ¹⁾ 防除価 ²⁾	平均調査 葉数	発病葉率	発病度	防除価	
新防除体系区	160.7	0.2	0	99.7	147.5	1.1	0.3	97.5
ICボルドー412連用区	159.7	0.2	0	99.7	151.7	1.5	0.4	97.0
対照(ジマンダイセン連用区)	159.0	0.4	0.1	99.4	161.7	1.6	0.4	96.8
無散布区	145.3	17.3	12.7		123.3	34.2	25.5	

1) 発病度 = Σ (発病程度別葉数 × 発病指数) × 100 / (調査葉数 × 5)。発病指数 0: 発病なし、1: 1葉当たり病斑数1個、3: 1葉当たり病斑数2-3個、5: 1葉当たり病斑数4個以上または落葉。

2) 発病度から算出した。

4. 考察

5月2-3日に出現した重度感染に対して、DMI剤とQoI剤の散布回数を減じた新防除体系区は、対照区と同等の高い防除効果を示した。葉害は認められなかった。このことから、本県においてもシプロニジル水和剤2,000倍は適用性が高いものと考えられた。

ただし、ユニックス顆粒水和剤47は、現時点ではおうとうに作物適用がない。また品種によってはおうとうに葉害を生じる恐れがあり、おうとう近接園での使用は難しいことから本成分の早期登録と品種別葉害の解明が必要である。

ICボルドー412連用区は、対照区と同等の高い防除効果を示した。ただし、開花期以降の散布は幼果にケロイド状のサビが生じること、梅雨期以降のボルドー体系は普及性が低い。Zacharyらは休眠期の無機銅剤散布によるDMI剤の薬剤感受性回復効果を報告しており、今後、休眠期もしくは展葉期の使用を検討する。また、無機銅剤とジチオカーバメート剤との近接散布は、亜鉛が銅と置換されてジメチルジチオカルバミン酸銅を生じることから、立木での生育および防除効果に及ぼす影響を検討する必要がある。

5. 今後の課題

1) 二次感染期間中(落花20日後以降7月上旬まで)の防除体系の検討

6. 要約

DMI剤やQoI剤の使用回数を減じた新しい防除体系とICボルドー412は、本病に対し高い防除効果が認められた。

7. 成果の公表及び特許

平成31年山形県農作物防除基準・植物調整剤使用基準策定に活用した。

参考文献

(1) Zachary A. Frederick et. al, (2015) Plant Disease p.1751-1756

DMI 剤感受性低下菌対策を主眼としたリンゴ黒星病防除体系の確立（５）

氏 名 佐藤健治・三須朱夏

所 属 山形県農業総合研究センター園芸試験場

[〒991-0043 山形県寒河江市大字島字島南 423]

1. 調査背景と目的

県下全域で多発しているリンゴ黒星病被害低減のために、DMI 剤に頼り過ぎない防除体系を構築する。ここでは、開花期間中のマンゼブ剤散布が結実と薬害に及ぼす影響を検討する。

2. 調査方法

1) マンゼブ剤が結実率に及ぼす影響

各品種2-3樹、各樹20-30花そう葉を供試し、開花直前の中心花柱頭をマンゼブ水和剤600倍液(展着剤無加用)に浸漬処理した後にハンドスプレーを用いて花そう葉全体に薬液を散布した。受粉は、人工受粉を行わず訪花昆虫のみで行なった。供試品種および処理時期は次のとおりである。ふじ(4月28日)、王林(4月27日)、つがる(4月28日)、シナノスイート(4月29日)、秋陽(4月30日)、スターキングデリシャス(4月30日)、ファーストレディ(4月30日)。

調査は、6月6日に結実率と薬害(サビ)の発生状況と収穫時に各品種の種子数を計数した。

3. 調査結果

1) 前年の調査では、ふじ、シナノスイート、ファーストレディおよびスターキングデリシャスにおいて、開花当日のマンゼブ剤による結実率低下、薬害とサビの発生は認められなかった(データ省略)。

2) 本年の調査では、供試品種いずれにおいても結実率低下、薬害とサビの発生は認められなかった(表1)。

3) 種子数は品種によるばらつきはあるが、各品種とも変形果を生じる程の大幅な種子数減少は認められなかった。このことから、開花期間中のマンゼブ剤散布の訪花昆虫に対する影響は低いと考えられた(表1)。

表1 開花期間中のマンゼブ剤が結実等に及ぼす影響

供試品種	処理区				無処理区			
	結実率	葉害	サビ	種子数	結実率	葉害	サビ	種子数
ふじ	90.0	—	—	6.9	84.3	—	—	9.7
王林	92.6	—	—	12.9	89.8	—	—	10.4
つがる	100	—	—	10.8	96.6	—	—	12.0
シナノスイート	81.7	—	—	5.2	75.5	—	—	5.5
秋陽	88.3	—	—	5.0	87.8	—	—	4.3
スターキング	86.7	—	—	4.0	81.7	—	—	6.6
ファーストレディ	91.7	—	—	7.9	86.3	—	—	8.4

4. 考察

2ヶ年間の調査において、本県主要品種では開花当日にマンゼブ剤を散布しても葉害やサビは生じないこと、結実率に差異が認められないこと、変形果を生じる程の大幅な種子数減少が認められず、訪花昆虫に対する影響は低いと考えられた。このことから、マンゼブ剤は開花期全期間を通じて散布可能と判断した。

なお、金子ら(1)は、ニホンナシにおいて受粉当日のチウラム剤散布による結実率低下を報告しており、他保護殺菌剤の開花期間散布の影響を検討する必要がある。

5. 今後の課題

1) 開花期間中のチウラム剤散布の検討。

6. 要約

開花期間中のマンゼブ剤散布は、結実率や果実品質に影響を与えない。

7. 成果の公表及び特許

平成31年山形県農作物防除基準・植物調整剤使用基準策定に活用した。

参考文献

(1) 金子洋平・牛尾進吾(2013), 千葉県農林総研研報(CAFRCRes.Bul.)5:47-51

氏 名 江口直樹

所 属 長野県果樹試験場

[〒382-0072 長野県須坂市小河原 492]

1. 調査背景と目的

DMI 剤耐性菌の発生・蔓延が懸念されるため、DMI 剤に替る有効薬剤を探索し、DMI 剤を使用しない、あるいは DMI 剤に頼り過ぎない新防除体系を構築する。また、長野県内で発生している黒星病菌の DMI 剤感受性を検討する。

2. 調査方法

(1) DMI 剤を使用しない防除体系の実証

耕種概要：長野県須坂市小河原（長野県果樹試験場）で試験を実施。普通樹の「ふじ」を供試した。

区制・面積：1 区 1 樹、3～4 反復。

試験区(防除体系)：試験結果の表 1 参照。

調査方法：黒星病の花（果）そう葉調査は 5/22 と 6/6 に 30 花（果）そうの全葉を調査し、発病そう率と発病葉率を算出した。黒星病の新梢葉調査は 6/6、6/25、7/10、7/28 に 30 新梢の全葉について発病程度別に葉数を調査し、発病葉率と発病度を算出した。

うどんこ病の発病調査は 5/22 に 50 果そうの全果について発病の有無を調査し、発病そう率と発病果率を算出した。また、30 新梢の全葉について発病の有無を調査し、発病新梢率と発病葉率を算出した。

褐斑病の花（果）そう葉に対する調査は 5/22 と 6/6 に 30 花（果）そうの全葉について発病の有無を調査し、発病葉率を算出した。新梢葉に対する調査は 6/25、7/10、7/28 に 30 新梢の全葉を程度別に調査し、発病葉率と発病度を算出した。

その他病害の発生状況を随時観察した。

(2) DMI 剤代替剤（SDHI 剤）の効果検討

試験場所：長野県須坂市小河原（長野県果樹試験場）で試験を実施。わい性の 3～4 年生「ふじ」を供試した。

区制・面積：1 区 2～3 樹 3 反復。

処理方法：2018 年 4/27（落花期）、5/11、5/25、6/7 の計 4 回、約 2 週間間隔で動力噴霧器を用いて十分量（1 樹当たり約 3L）を均一に散布した。降雨の影響はなかった。殺虫剤は慣行防除とし、別途、全区に均一散布した。

調査方法：7/2（最終散布の 30 日後）に試験区の全葉を程度別に調査し、発病葉率と発病度を算出した。

(3) 既存剤の胞子形成阻害効果

試験場所：長野県須坂市小河原（長野県果樹試験場）で試験を実施、わい性の16年生「ふじ」を供試した。

試験規模：1区10～12葉（病斑）。

処理方法：2018年/6/11に直径1cm程度の病斑をマークし、葉液あるいは蒸留水をハンドスプレーで噴霧し、表面上の胞子を洗い流した。

調査方法：6/21、7/13、7/25、8/9、8/22、9/4、9/21、10/9日にマークした病斑上における胞子形成量を調査した。方法はスライドガラス状に滴下・固化させたグリセリンゼリーに病斑表面を押し付け、胞子をゼリーに転写した。顕微鏡下で胞子形成の有無と量を以下の基準で調査し、胞子形成率と形成度を算出した。

指数0：なし 1:1～10個/病斑 2:11～100個/病斑 3:101～1000個/病斑 4:1001個以上/病斑

胞子形成病斑率＝ $\Sigma(\text{指数} \times \text{指数別病斑数}) / \text{調査病斑数} \times 100$

胞子形成度＝ $\Sigma(\text{指数} \times \text{指数別病斑数}) / (\text{調査病斑数} \times 4) \times 100$

(4) 長野県内の一般栽培圃場で発生する黒星病菌のDMI剤感受性（EC50）

検定菌株：2015年、2016年、2018年の6～7月に一般栽培圃場の黒星病罹病葉を採取し、単胞子分離した菌株を供試した。

感受性検定：2015年と2016年の分離菌株は2016年に、2018年の分離菌株は2018年に検定した。供試菌株をPDA培地で20℃・暗黒条件で1ヵ月間前培養し、直径4mmのコルクボーラーで菌そうを打ち抜き、菌そう面が下になるように検定培地に置床した。20℃・暗黒条件で3週間培養し、菌そうの直径を測定してJA全農が作成したエクセルファイルを用いて50%効果濃度（EC50値）を算出した。

3. 調査結果

(1) DMI 剤を使用しない防除体系の実証

1) 試験の概要

DMI 剤耐性菌が存在しない圃場において表 1 の防除体系間の主要病害の発生を比較した。試験を行った 2018 年は展葉前から子のう胞子の飛散が認められ、4/11 に感染好適条件が現れた。初発確認は 5 月第 1 半旬で、初期感染は 4 月第 4 半旬 (4/15 あるいは 18) と考えられた。

2) 黒星病に対する防除効果

果 (花) そう葉では 6/6 時点で無防除区の発病そう率 6.6% の発生が認められたが、いずれの試験区も発生がみられなかった (データ省略)。

新梢葉では 7/28 時点で無防除区の発病葉率が 25.1% の中発生となった。①DMI 剤 0 回区は、慣行の④DMI 剤 2 回区と比較して発生が同等～やや少ない傾向が認められた (表 2)。

3) その他病害に対する防除効果

うどんこ病は無防除区の発病果梗率 18.6% の条件で④DMI 剤 2 回区が 1.2% に対し、①DMI 剤 0 回区は発生がみられず、高い効果が認められた。褐斑病に対しては多発生となったが、各試験区で差は見られなかった。その他の病害の発生は見られなかった (データ省略)。

表 1 リンゴ黒星病 (感受性菌) に対する効果を実証した防除体系

試験区	散布時期				
	発芽 10 日後 4/7	開花直前 4/20	落花直後 4/29	落花 14 日後 5/11	5 月下旬 ¹⁾ 以降
①DMI 剤 0 回	ベフリン×1,000	フルツイバー×2,000	エックス×2,000 チラム×500	ジマンガイ ×500	共通 欄外に記載
②DMI 剤 1 回開花前	ベフリン×1,000	スコア×3,000	エックス×2,000 チラム×500	フルツイバー ×2,000	
③DMI 剤 1 回落花後	ベフリン×1,000	エックス×2,000	スコア×3,000		
④DMI 剤 2 回	エックス×2,000	オンリーワン×2,000	スコア×3,000		
⑤無防除	—	—	—	—	—

2018 年の開花日は 4/20 (平年より 8 日早い)

1) 落花 14 日後以降は以下の薬剤を、無防除を除いて全試験区に散布した。

5/25(前回より 14 日後)アントラコール×500、 6/7(前回より 13 日後)オキシラン水和剤×500
6/19(前回より 12 日後)フロントフロアブル×3,000、 7/2(前回より 13 日後)オキシラン水和剤×500
7/16(前回より 14 日後)キノンドー水和剤×1,200

表 2 リンゴ黒星病 (新梢葉) に対する各防除体系の効果

試験区	発病葉率(%)				発病度				防除価			
	6/6	6/25	7/10	7/28	6/6	6/25	7/10	7/28	6/6	6/25	7/10	7/28
①DMI0回	0	0.5	0.3	0.5	0	0.2	0.1	0.2	100	91.3	96.8	98.2
②DMI1回前	0.1	0.2	0.3	0.7	0	0.1	0.1	0.2	100	95.7	96.8	98.2
③DMI1回後	0	0.6	0.4	0.7	0	0.2	0.2	0.3	100	91.3	93.5	97.3
④DMI2回	0.4	1.3	1.0	1.7	0.1	0.5	0.3	0.6	96.2	78.0	90.3	94.6
⑤無防除	5.4	5.5	7.7	25.1	2.6	2.3	3.1	11.2	—	—	—	—

調査方法：30 新梢の全葉を以下の程度別に調査し、発病葉率と発病度を算出した。

程度別指数 0：病斑なし 1：病斑面積が葉の 1/4 未満 2：1/4～1/2 未満 3：1/2 以上

発病度 = $\sum(\text{指数} \times \text{指数別葉数}) / (\text{調査葉数} \times 3) \times 100$

防除価 = $(\text{無防除区の発病度} - \text{試験区の発病度}) / \text{無防除区の発病度} \times 100$

(2) DMI 剤代替剤 (SDHI 剤) の効果検討

1) 試験の概要

黒星病の発生は全般に少なかったが、調査葉数が多く一定数の発病が認められたこと、反復間で同様の傾向を示したことから薬剤間の差は十分評価できると考えられた。発病は果そう葉、新梢葉ともに認められたが、新梢葉では基部から 7~10 枚目の特定の葉位に発生が多かった。なお、本試験は落花期から散布を開始し、散布間隔を 2 週間に設定したため、通常の効果試験よりもやや厳しい条件であったと考えられる。

2) 黒星病に対する各 SDHI 剤の防除効果

オルフィンフロアブルの 4,000 倍散布は、対象のフルーツセイバーの 2,000 倍散布、オンリーワンフロアブルの 2,000 倍散布と比較して高い効果が認められた (表 3)。

パレード 15 フロアブルの 3,000 倍散布、ネクスターフロアブルの 1,500 倍散布は対象のフルーツセイバーの 2,000 倍散布より優り、オンリーワンフロアブルの 2,000 倍散布と同等であった。

以上の結果から、SDHI 剤でも薬剤により黒星病に対する効果に差があり、オルフィンフロアブルの効果が最も高かった。

表 3 リンゴ黒星病に対する各種薬剤の防除効果

供試薬剤 希釈倍数	反復	調査葉数	程度別発病葉数				発病葉率 (%)	発病度	防除価	葉害
			0	1	2	3				
1) オルフィンフロアブル フルピラム 41.7% ×4,000	I	797	797	0	0	0	0.0	0.0	100	—
	II	529	529	0	0	0	0.0	0.0		—
	III	854	853	1	0	0	0.1	0.0		—
	平均	726.7					0.0	0.0		
2) パレード 15 フロアブル ピラジフルミド 15.0% ×3,000	I	859	856	3	0	0	0.3	0.1	87.2	—
	II	906	900	6	0	0	0.7	0.2		—
	III	1163	1158	5	0	0	0.4	0.1		—
	平均	976.0					0.5	0.2		
3) ネクスターフロアブル イピラザム 18.7% ×1,500	I	799	795	4	0	0	0.5	0.2	82.1	—
	II	765	760	5	0	0	0.7	0.2		—
	III	714	708	5	1	0	0.8	0.3		—
	平均	759.3					0.7	0.2		
4) フルーツセイバー ベンチオピラト 15.0% ×2,000	I	783	780	3	0	0	0.4	0.1	59.0	—
	II	893	868	23	2	0	2.8	1.0		—
	III	1073	1056	17	0	0	1.6	0.5		—
	平均	916.3					1.6	0.6		
5) オンリーワンフロアブル テフコナゾール 20.0% ×2,000	I	786	781	5	0	0	0.6	0.2	84.6	—
	II	881	872	9	0	0	1.0	0.3		—
	III	791	791	0	0	0	0.0	0.0		—
	平均	819.3					0.6	0.2		
6) 無処理	I	510	495	15	0	0	2.9	1.0		—
	II	862	828	32	1	1	3.9	1.4		—
	III	879	837	39	2	1	4.8	1.7		—
	平均	750.3					3.9	1.4		

調査方法：試験区の全葉を以下の程度別に調査した。発病度、防除価の算出方法は表 1 と同じ。

(3) 既存剤の孢子形成阻害効果

1) 試験の概要

試験開始時の6/11に病斑をマークし、病斑上の孢子を葉液あるいは蒸留水で洗い流し、以降調査毎に形成された孢子を除去した。このため、各調査時には前回調査後から新たに形成された孢子形成量を評価している。

2) 葉病斑上の孢子形成量の推移 (蒸留水区)

6/21には100%の病斑で孢子を形成し、その量も多かった。7/13には孢子形成病斑率は6/21と同様に100%であったが、その量は減少した。以降8/22まで孢子形成率・量ともに順次低下し、高温により孢子形成が抑制されたと考えられた。

9/4には再び孢子形成率・量ともに増加に転じた。9/21には一旦減少したが、9月上～中旬が多雨であったため、自然流亡した可能性がある。

以上のことから6月に発病した葉病斑は盛夏期には孢子形成量が一旦減少するが、秋季には再び増加し、秋季感染の伝染源になると考えられた。

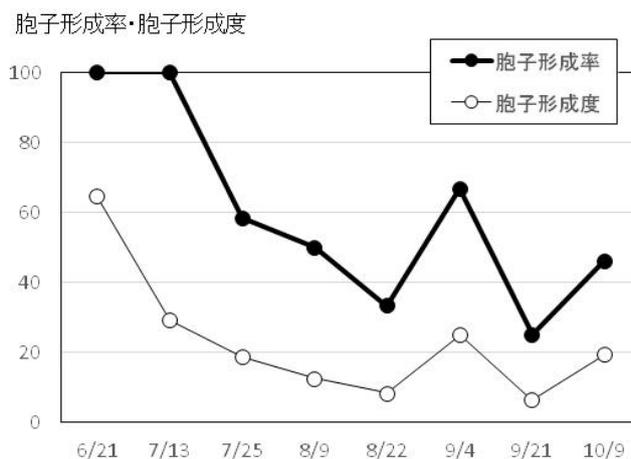


図1 葉病斑上の孢子形成量の推移 (蒸留水区)

3) 各薬剤の孢子形成阻害効果

孢子形成量が多かった6/21(処理10日後)、秋季に再び増加した9/4の調査結果を抜粋して図2に示した。他の調査日も概ね図2と同様の傾向を示した。

一般に病斑形成に対して治療効果を有するとされるスコア、ユニックス、オルフィン、オーソサイドの孢子形成阻害効果は低かった。一方、ジマンダイセンは最盛期の6/21と秋季の9/4ともに高い孢子形成阻害効果を示した。

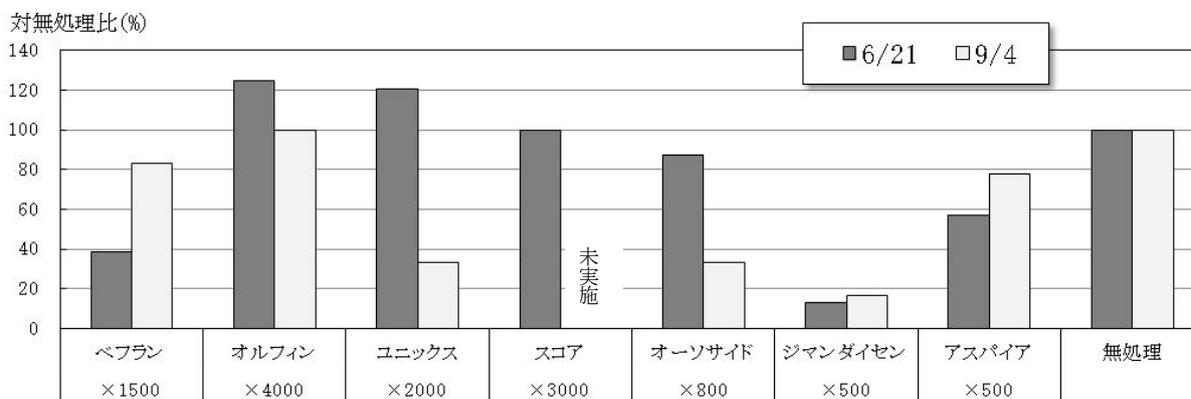


図2 黒星病病斑(葉)に処理した場合の各薬剤の孢子形成阻害効果

注) 孢子形成度の無処理に対する比率で図示。薬剤は6/11の1回処理。

(4) 長野県内の一般栽培圃場で発生する黒星病菌の DMI 剤感受性 (EC50)

1) 試験の概要

長野県の一般栽培圃場から採取した黒星病菌の DMI 剤感受性を薬剤添加培地の菌糸伸長量 (EC50) で評価した。いずれの菌株も *CYP51A1* 遺伝子の A398T 塩基置換は認められていない。

2) DMI 剤感受性の変化

過去 2015 年と 2016 年の検定菌株数が少ないが、フェナリモルに対しては大きな差がなく、ジフェノコナゾールに対しては、感受性がやや低下する傾向が認められた。全菌株の平均で 2015～2016 年に対し 2018 年は約 6 倍の値となった。

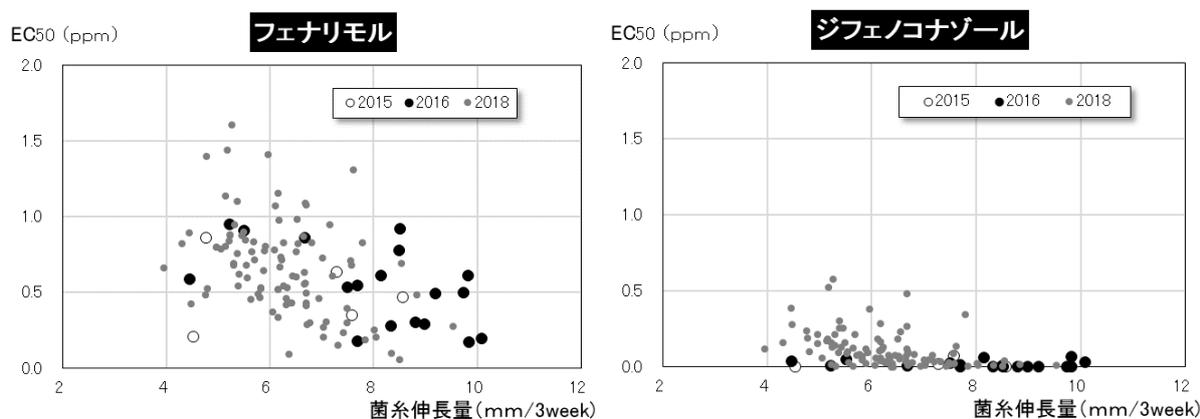


図3 長野県内の一般栽培圃場で採取した黒星病菌の DMI 剤に対する薬剤感受性 (EC50)

表4 長野県内の一般栽培圃場で採取した黒星病菌の DMI 剤に対する薬剤感受性 (EC50)

調査年 ¹⁾	検定圃場数	検定菌株数	フェナリモルに対する EC50 (ppm)			ジフェノコナゾールに対する EC50 (ppm)		
			最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値
2018	20	100	0.000	1.604	0.661	0.000	0.577	0.112
2016	4	18	0.000	0.951	0.540	0.000	0.066	0.017
2015	4	5	0.206	0.860	0.504	0.000	0.071	0.022

1) 2018 年分は 2018 年に、2016 年と 2015 年分は 2016 年に検定した。

4. 考察

長野県では DMI 剤耐性菌が発生していない条件で薬剤や防除体系の効果を検討している。耐性菌に対する効果は評価できないが、供試した薬剤は国内において黒星病に対する効果低下が報告されていないため、DMI 剤耐性菌に対しても効果が期待できる。

DMI 剤を使用しない防除体系における黒星病の発生は、2018 年の気象条件では DMI 剤を 2 回使用する慣行体系と比較してほぼ同等であった。薬剤散布のタイミングと感染好適条件の出現状況によっては、治療効果の程度によって防除効果の変動する可能性があるため、継続的な検討が必要である。

有望な代替剤については、効果の程度と作用性を評価し、体系の中での位置づけを明確にする必要がある。この点についても単年度の試験ではなく、複数年や他の研究機関の評価が必要である。

CYP51A1 遺伝子の変異は伴わないが、ジフェノコナゾールに対する感受性が低下傾向にあった。

5. 今後の課題

DMI 剤剤を使用しない防除体系、有望な代替剤の効果・作用性検討について継続的に検討する。

6. 要約

DMI 剤を使用しない防除体系は 2018 年の気象条件では慣行の DMI 剤を 2 回使用した体系と比較し、黒星病を含む主要病害に対してほぼ同等の効果が認められた。黒星病に対する DMI 剤の代替として有望な SDHI 剤の中でオルフィンフロアブルの防除効果が最も高かった。DMI 剤や SDHI 剤は病斑上の胞子形成阻害効果は低い～認められなかったが、マンゼブ水和剤で高い胞子形成阻害効果が認められた。*CYP51A1* 遺伝子の変異は伴わないものの DMI 剤に対する感受性が低下する傾向が認められた。

7. 成果の公表及び特許

生産現場への防除指導に活用。

DMI 剤感受性低下リンゴ黒星病菌の遺伝子診断技術の確立

氏名 八重樫 元、伊藤 伝

所属 農研機構・果樹茶業研究部門・リンゴ研究領域・病害虫ユニット

[〒020-0123 岩手県盛岡市下厨川字鍋屋敷 92-24]

1. 調査背景と目的

近年、日本のリンゴ生産量1位を誇る青森県で、DMI 剤に対する感受性が低下したリンゴ黒星病菌（耐性菌）が広域発生し、他のリンゴ生産地域でも耐性菌発達リスクの高まりが懸念されている。リンゴ黒星病菌の薬剤感受性検定にはリンゴ苗木を用いる生物検定、ならびに薬剤添加培地による培地検定が必要で、多大な労力と時間を要する。一方、DMI 剤感受性の異なるリンゴ黒星病菌株を用いて DMI 剤の標的遺伝子であるステロール脱メチル化酵素遺伝子(CYP51A1)の遺伝子変異を解析したところ、133 番目のアミノ酸変異を伴う A398T 塩基置換が DMI 剤感受性の低下に関わることが明らかになり、上記変異の有無を識別するアレル特異的 PCR による遺伝子診断が耐性菌発生状況を迅速に把握するのに有効である。本実施課題では、A398T 変異の遺伝子診断技術を効率化するとともに、リンゴ生産地域における変異株の発生状況を調査した。

2. 調査方法

1) 遺伝子診断法の効率化

多大な労力を要する菌の分離を経ず、罹病葉を用いて直接診断する手法を検討した。罹病葉から市販の核酸抽出キット (Mag Extractor Plant genome; TOYOBO) を用いて核酸を抽出し、アレル特異的 PCR によってリンゴ黒星病菌を特異的に検出できるか検討した。また、より安価で簡易な手法として、市販キットや有機溶媒を用いた核酸抽出を行わず、罹病葉抽出液を調整し、直接 PCR する手法を検討した。リンゴ葉にはポリフェノールなどの PCR 阻害物質が多く含まれているため、これらを除くためのポリビニルピロリドンや亜硫酸ナトリウムの添加により PCR 反応が改善するか試験した。

2) 遺伝子診断によるリンゴ生産地域での A398T 変異株の発生調査

1)の核酸抽出法あるいは簡易調整法を利用し、罹病葉を用いたアレル特異的 PCR により A398T 変異の遺伝子診断を実施した

3. 調査結果

1) 遺伝子診断法の効率化

罹病葉の病斑から抽出した DNA あるいは粗汁液を用いてアリル特異的 PCR を行ったところ、粗汁液では結果が安定しなかったが、DNA 溶液を用いた場合にはアリル特異的 PCR が可能であった (図 1)。



図 1. 罹病葉から直接抽出した DNA を用いたアリル特異的 PCR

2) 遺伝子診断によるリンゴ生産地域での A398T 変異株の発生調査

青森、秋田、山形、長野の 4 県の黒星病菌の遺伝子診断の結果を表 1 に示す。全ての地域で A398T 変異株の発生が確認された。長野では、A398T 変異株は苗木のみで発生が認められた。一方、他地域(山形や秋田など)では、苗木と成木の両方で A398T 変異株の発生が認められる場合、成木で発生しているが、隣接する苗木には発生していない場合が認められた。

表 1. リンゴ生産地域における黒星病菌 A398T 変異株の遺伝子診断結果

都道府県	青森	秋田		山形		長野	
地域	三八	中央	鹿角	村山		全域	
				成木	苗木	成木	苗木
圃場	6	39	13	8	8	5	59
検定数	70	305	132	45	50	42	322
野生型	31	199	89	32	37	42	158
変異型	22	61	32	7	9	0	141
混在	12	8	5	0	0	0	0
不明	5	27	6	6	4	0	23

4. 考察

従来、菌の分離を経て、判定までにおよそ 3~4 週間の期間を要していたが、罹病葉からの核酸抽出法を利用することで判定までに要する期間を 1-2 日に短縮でき、青森県以外のリンゴ生産地域においても A398T 変異株が発生していることを明らかにできた。A398T 変異株の発生は、苗木の流通などにより外部から持ち込まれる場合と地域内で顕在化する場合があると推測された。

5. 今後の課題

- ・今後も変異株の遺伝子診断を継続し、発生をモニタリングする必要がある。
- ・アレル特異的 PCR では、サンプルによって結果が安定しないことがある。より簡便で確実性が高いと考えられる LAMP 法を検討する。
- ・DMI 剤に加えて QOI 剤耐性の問題も顕在化しつつあるので、QOI 剤耐性の遺伝子診断法の効率化を検討する。

6. 要約

リンゴ黒星病菌の DMI 剤感受性低下に関わる CYP51A1 遺伝子 A398T 変異の遺伝子診断技術を効率化し、リンゴ生産地域において A398T 変異株が発生していることを明らかにした。

7. 成果の公表及び特許

減農薬栽培に対応した水稻の種子伝染性病害に対する防除体系の確立（1）

鈴木文彦・芦澤武人

農研機構中央農業研究センター

[〒305-8666 茨城県つくば市観音台 2-1-18]

1. 調査背景と目的

近年、水稻の温湯処理などを用いた減農薬栽培の普及に伴い、ばか苗病、もみ枯細菌病、いもち病などの種子伝染性病害の被害が全国的に問題になっている。これらの種子伝染性病害の防除技術を確立するには、種子や本田での病原菌の汚染実態や発病リスクを把握することが重要となる。そこで、文献等を参考に PCR 法や選択培地を用いた原因菌の検出・診断技術の実用性を調査し、本田での病害診断や種子での検出を行う際の作業手順を取りまとめる。なお、参画機関間では情報の共有や試験材料を融通するなど連携して試験を実施する。

2. 調査方法

- 1) ばか苗病菌の簡易診断法について、Translation Elongation Factor 1 α (TEF-1 α) 遺伝子を標的に設計したプライマーを用いて検討した。海外で報告されている 2 組のプライマーセット、FfujiFq/FfujiRq (Carneiro et al. 2017) および Fuji1F/TEF1R (Amatulli et al. 2012) に加え、新たに 2 組のプライマー (BknF2/BknR4、BknF3/BknR4) を設計し、ジーンバンクに登録のある国内分離株を対象として種特異的な検出が可能かどうかを調査した。プライマーの特異性の評価には、10 菌株のばか苗病菌を含む 44 菌株 (21 属 32 種) を供試した (表 1)。供試菌株は PDB 培地で培養後、DNeasy UltraClean Microbial Kit (QIAGEN) を用いて菌体 DNA を抽出した。PCR の反応液組成と増幅条件は、Hayashi ら (2017) の 1 秒 PCR に準じた。
- 2) 水稻種子を駒田培地 (*Fusarium* 菌用選択培地) 上に置床し、約 1 週間後に生育菌叢を切り出して、DNeasy UltraClean Microbial Kit (QIAGEN) を用いて DNA 抽出を行った。次に、ばか苗病菌に特異的なプライマー (BknF2/BknR4) と糸状菌共通プライマー (NS1/NS2 primers; White et al. 1990) を組み合わせ、種子由来菌を対象として遺伝子診断を実施した。PCR の反応液組成と増幅条件は、上述の文献に基づくが、伸長反応を改変し 1 分とした。
- 3) プロッター法によっていもち病菌の孢子形成を確認した水稻種子を供試して、1 粒ごとに DNA を調製した。次に、Hayashi ら (2017) の耐性菌診断マーカー (MDQ) を用い、いもち病菌の耐性菌診断 (QoI 剤耐性および MBI-D 耐性) を実施した。DNA 抽出は DNeasy UltraClean Microbial Kit (QIAGEN) を使用し、PCR は上述の文献の条件を一部改変し、サイクル数を 50 とした。

3. 調査結果

- 1) TEF-1 α 遺伝子内に新たに設計した 2 組のプライマー、BknF3/BknR4 および BknF2/BknR4 を用いて調査した結果、それぞれ 184bp および 332bp のばか苗病菌に特異的な増幅産物が得られた (図 1)。いずれも、ばか苗病菌以外の種では増幅が認められず、ジーンバンク登録の培養菌を用いた試験に限定されるが、ばか苗病菌の遺伝子診断が可能であることが確認できた (表 1)。既報のプライマーセット、FfujiFq/FfujiRq および Fuji1F/TEF1R を用いた場合、それぞれ 116bp および 179bp の特異的な増幅産物が得られ、国内分離のばか苗病菌を診断可能であった。しかし、これらの既報のプライマーセットでは、ばか苗病菌以外の種でわずかに非特異的な増幅断片が認められた。
- 2) 駒田培地上の菌叢から調製した DNA を用いて遺伝子診断した結果、種子由来の 8 検体のうち 6 検体がばか苗病菌と判定された (図 2、3)。すべての検体で共通バンドが増幅しており、DNA 抽出から PCR までの一連の操作に問題がないことが確認できた。なお、DNA 抽出は、DNeasy UltraClean Microbial Kit (QIAGEN) を使用すれば確実に判定できた。
- 3) ブロッター法でいもち病菌の保菌を確認した種子を対象に、MDQ マーカーを用いて耐性菌検定を実施した結果、20 粒のうち 2 粒から QoI 剤耐性菌が検出された (図 4)。DNA 抽出は、簡易なキットや熱処理では安定せず、DNeasy UltraClean Microbial Kit (QIAGEN) を使用した場合に良好な結果が得られた。また、1 秒 PCR のサイクル数を 50 回まで増やすことで確実な判定が可能となった。

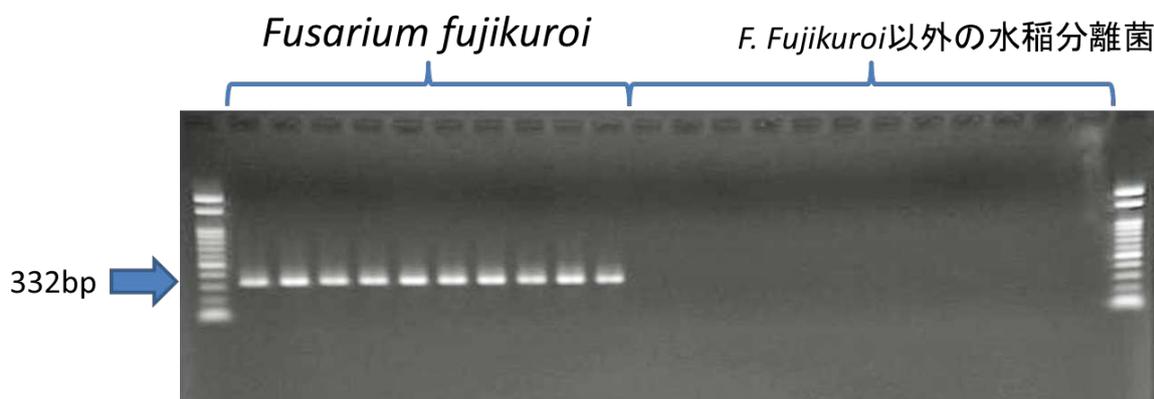


図 1 ばか苗病菌 (*Fusarium fujikuroi*) の PCR 診断法

水稻分離菌 44 菌株 (21 属 32 種) を対象に、TEF-1 α 遺伝子内に設計したプライマー (BknF2/BknR4) を用い、ばか苗病菌に特異的な 332bp のバンドを増幅した。

表1 供試菌株とプライマーの特異性

MAFF番号	学名	株名	採集地	プライマー	
				BknF2, BknR4	BknF3, BknR4
235949	<i>Fusarium fujikuroi</i>	39479	茨城	○	○
235953	<i>Fusarium fujikuroi</i>	No.3-6	福島	○	○
235964	<i>Fusarium fujikuroi</i>	No.27-2	福島	○	○
238531	<i>Fusarium fujikuroi</i>	T.Aoki BK18-1	茨城	○	○
241741	<i>Fusarium fujikuroi</i>	DPK-03	北海道	○	○
244851	<i>Fusarium fujikuroi</i>	Ka52	山形	○	○
306876	<i>Fusarium fujikuroi</i>	90416	岡山	○	○
306890	<i>Fusarium fujikuroi</i>	61-14-1	島根	○	○
306892	<i>Fusarium fujikuroi</i>	4-112	神奈川	○	○
511578	<i>Fusarium fujikuroi</i>	Mo1796	栃木	○	○
511584	<i>Fusarium andiyazi</i>	Mo1867	栃木	-	-
235996	<i>Fusarium asiaticum</i>	K92-6	茨城	-	-
240562	<i>Fusarium graminearum</i>	RT66-1	兵庫	-	-
236660	<i>Fusarium incarnatum</i>	RIE 5	茨城	-	-
240364	<i>Fusarium incarnatum</i>	T. Aoki AR0494	茨城	-	-
511573	<i>Fusarium oxysporum</i>	Mo1773	北海道	-	-
236460	<i>Fusarium proliferatum</i>	TA AR0145	沖縄	-	-
511571	<i>Fusarium sporotrichioides</i>	Mo1683	栃木	-	-
235991	<i>Alternaria alternata</i>	K92-1	茨城	-	-
238113	<i>Aspergillus flavus</i>	T. Aoki APF9-1	茨城	-	-
235499	<i>Bipolaris oryzae</i>	T. AOKI AR0126	沖縄	-	-
245177	<i>Bipolaris oryzae</i>	Iga-2	三重	-	-
235507	<i>Bipolaris setariae</i>	T. AOKI AR0128	沖縄	-	-
237410	<i>Ceratobasidium setariae</i>	C-666	新潟	-	-
235120	<i>Cladosporium cladosporioides</i>	T. Aoki AR0006	茨城	-	-
306680	<i>Colletotrichum karstii</i> (CBSC)	S0503	茨城	-	-
235530	<i>Curvularia inaequalis</i>	T. AOKI AR0083	茨城	-	-
235534	<i>Curvularia lunata</i>	T. AOKI AR0030	茨城	-	-
235525	<i>Curvularia senegalensis</i>	T. AOKI AR0115	沖縄	-	-
235995	<i>Epicoccum nigrum</i>	K92-5	茨城	-	-
111239	<i>Nigrospora oryzae</i>	MS-5	茨城	-	-
111768	<i>Penicillium verrucosum</i>	TTC-4	茨城	-	-
240462	<i>Phoma sp.</i>	28157	沖縄	-	-
238432	<i>Pythium sp.</i>	OPU480	埼玉	-	-
237699	<i>Rhizoctonia solani</i>	TAC95上市3	富山	-	-
305006	<i>Sarocladium oryzae</i>		神奈川	-	-
237402	<i>Sclerotium fumigatum</i>	C-144	佐賀	-	-
305958	<i>Tilletia barclayana</i>	すみク口ホ ss1	茨城	-	-
235994	<i>Trichoconiella padwickii</i>	K92-4	茨城	-	-
236576	<i>Ustilaginoidea virens</i>	MIYASHITA-1	茨城	-	-
237360	<i>Waitea circinata</i>	C-340	福岡	-	-
	<i>Pyricularia oryzae</i>	L02-3	佐賀	-	-
	<i>Pyricularia oryzae</i>	03FR16-3	熊本	-	-
	<i>Pyricularia oryzae</i>	034419-1	大分	-	-

○は特異的増幅を確認、-は増幅なし。

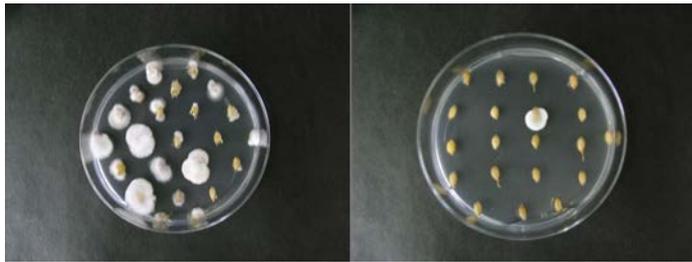


図2 選択培地上で種子から分離された糸状菌の菌叢

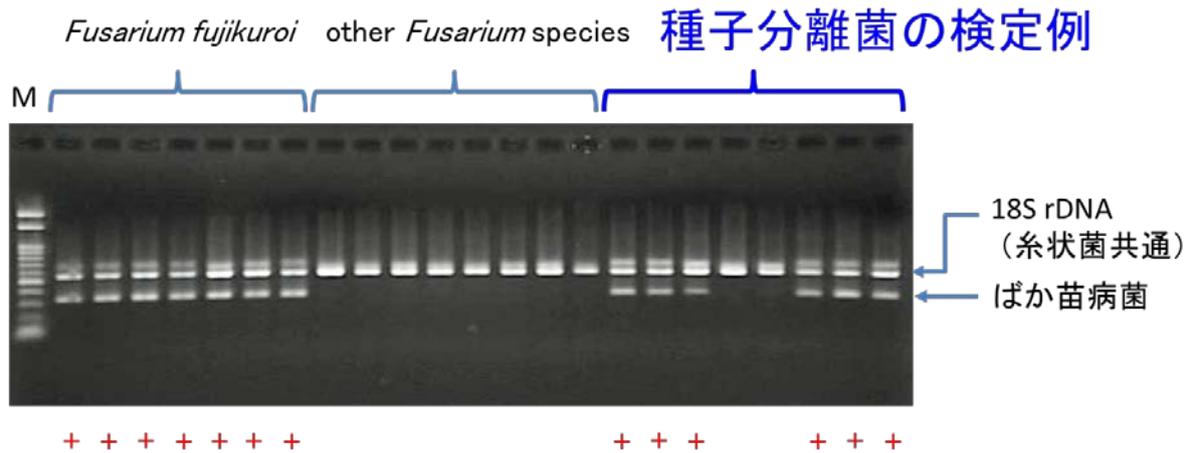


図3 種子由来菌を対象としたばか苗病菌の PCR 診断

駒田培地上の種子由来菌から調製した DNA を用い、ばか苗病菌特異的プライマー (BknF2/BknR4) と糸状菌共通プライマー (NS1/NS2) を組み合わせた PCR を行った。糸状菌では共通バンドが増幅され、ばか苗病菌では 332bp の特異的なバンドが増幅される。+ はばか苗病菌と判定。

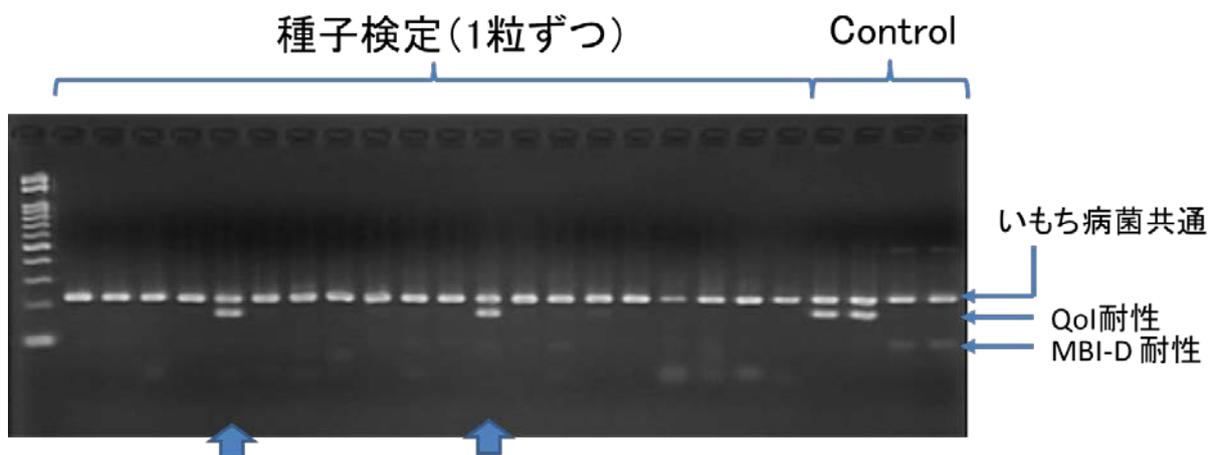


図4 いもち病保菌種子を対象とした耐性菌検定

ブロッター法でいもち病菌の保菌を確認した種子を対象に、MDQ マーカーを用いた耐性菌検定を実施した。矢印は QoI 剤耐性菌と判定。

4. 考察

- 1) TEF-1 α 遺伝子を標的にした PCR 法を検討した結果、ばか苗病菌に特異的な増幅断片を検出できたことから、遺伝子診断による種判別が可能であることが確認できた。海外で報告された既存のプライマーは国内菌でも有効であったが、非特異反応が少ない点において今回新たに設計したプライマーが優れていると思われる。一方、ばか苗病菌にはジベレリンやフモニシンの産生能が異なる複数のグループが存在するという報告がある。今後、フモニシン生合成遺伝子など、調査する遺伝子マーカーを追加するとともに、苗での病原性の評価を合わせて調査する必要があるかもしれない。
- 2) 選択培地に種子を置床後、生育した菌を遺伝子診断することで、簡便かつ確実に種子でのばか苗病菌の汚染程度を評価できる可能性が示された。この遺伝子診断法による評価とバイオアッセイ法（種子に分離菌を接種して徒長を調査する）の評価との関係については、さらに検証が必要となる。
- 3) いもち病菌の保菌を確認した種子を対象に、MDQ マーカーを用いて耐性菌検定を実施した結果、市販の DNA 抽出キットを使用すれば確実に耐性菌診断できることを確認した。保菌を確認した種子のみを耐性菌検定することは、モニタリング調査法として効率的で正確なリスク評価に繋がるものと考えられる。

5. 今後の課題

TEF-1 α 遺伝子を標的にした PCR 法の有効性を検証するため、ジーンバンク登録株以外に多数の分離株を供試して調査する必要がある。また、ばか苗病菌の種判別と病原性の関係を確認することを検討する。いもち病菌の孢子からの DNA 抽出効率が低かった点は、今後改善策を検討する必要がある。

6. 要約

TEF-1 α 遺伝子を標的にした PCR 法を検討した結果、ばか苗病菌に特異的な増幅断片を検出できたことから、遺伝子診断による種判別が可能であることが確認できた。また、選択培地に種子を置床後、生育した菌を遺伝子診断することで、簡便かつ確実に種子でのばか苗病菌の汚染程度を評価できる可能性が示された。さらに、いもち病菌の保菌を確認した種子を対象に、MDQ マーカーを用いて耐性菌検定を実施した結果、市販の DNA 抽出キットを使用すれば耐性菌の遺伝子診断が可能であった。

7. 成果の公表及び特許

予定はない。

減農薬栽培に対応した水稻の種子伝染性病害に対する防除体系の確立（２） ～飼料用水稻における温湯種子消毒技術の実証～

島田峻、西宮智美

茨城県農業総合センター農業研究所

[〒311-4203 茨城県水戸市上国井町 3402]

1. 調査背景と目的

近年、水稻栽培においては、温湯処理による種子消毒の普及に伴い、ばか苗病をはじめとした種子伝染性病害の被害が各地で問題となっている。温湯処理は、化学合成剤に比べて種子伝染性病害に対する防除効果がやや劣るが、減農薬栽培を推進する上では不可欠な技術に位置づけられる。そこで、温湯処理を含む既存の種子消毒技術を組み合わせた体系防除技術の有効性を実証するとともに、新たに効果の高い防除資材を活用し、減農薬栽培に対応した種子伝染性病害の防除技術を開発する。実証試験で効果が確認できた防除技術については、当該地域（県）が制作する防除指針へ掲載する。

2. 調査方法

1) 県内の主要な飼料用稲品種における温湯処理条件の解明

(1) 試験場所：農業研究所内（水戸市上国井町）

(2) 供試品種：「月の光（H29年産）」、「あさひの夢（H30年産）」、「夢あおぼ（H29年産）」
「コシヒカリ（H29年産）」

(3) 試験区： $\left(\begin{array}{c} \text{事前乾燥} \\ \text{なし、あり} \end{array} \right) \times \left(\begin{array}{c} \text{温湯処理の温度} \\ 60、63、65、67、70^{\circ}\text{C} \end{array} \right) \times \left(\begin{array}{c} \text{温湯処理の時間} \\ 10 \text{分} \end{array} \right)$

(4) 試験方法：事前乾燥は、温湯処理前の種子を恒温器の中に静置して40℃で乾燥させ、種子水分を10%以下に調製した。温湯処理は、ウォーターバスを用いて所定の温度に10分間浸漬後、ただちに流水で急冷し、風乾させた。

(5) 発芽率調査：素寒天（0.6%）を流し込んだシャーレに種子を置床して（100粒×3反復/区）30℃で静置し、7日後に芽と根が1cm以上正常に伸長した種子の割合を調査した。なお、「あさひの夢」は休眠が深かったため、10日後に調査を実施した。

2) 種子処理ラインにおける汚染防止対策の検討

①イネばか苗病菌に対する消毒資材による生育抑制効果の検討

- (1) 試験場所：農業研究所内（水戸市上国井町）
- (2) 供試菌株：*Fusarium fujikuroi*
- (3) 供試薬剤：イチバン（ベンチアゾール）、ケミクロンG（カルシウムハイポクロライト）
- (4) 供試濃度：500倍、1000倍
- (5) 試験方法：PDA培地を滅菌して60℃程度まで冷却後、供試濃度になるよう薬液を添加して平板培地を作製し、供試菌株の菌叢ディスクを置床し、25℃の恒温器内で培養した。
- (6) 調査方法：培養6日後および12日後に、菌叢の直径を測定した。

②育苗箱消毒による殺菌効果の検討

- (1) 試験場所：農業研究所内（水戸市上国井町）および自然光グロースキャビネット
- (2) 供試品種：「コシヒカリ」
- (3) 試験区：①水洗い＋イチバン 500倍希釈液 瞬時浸漬
②水洗い＋温湯消毒 60℃5分
③水洗いのみ
④無処理
- (4) 試験方法：ばか苗病菌保菌種子（健全種子：保菌種子＝4：1）を育苗箱に播種し、20℃に設定したグロースキャビネットで2018年10月25日～11月15日（21日間）まで育苗した。その苗を取り除いた使用後の育苗箱を供試し、上記の試験区のとおり処理を行い、15℃で7日間浸種した健全種子（温湯消毒済み）を播種し、30℃で2日間出芽させたのち、20℃に設定したグロースキャビネットで11月22日～12月20日（28日間）まで育苗した。なお、各区3連制で実施した。
- (5) 調査方法：各区任意の苗500本について、発病の有無を調査し、発病苗率を算出した。

3) イネばか苗病菌保菌種子の作製

- (1) 試験場所：農業研究所内（水戸市上国井町）
- (2) 供試菌株：*Fusarium fujikuroi*
- (3) 供試品種：「月の光」、「あさひの夢」、「夢あおば」および「コシヒカリ」
- (4) 試験方法：コンテナで供試品種を栽培し、 1×10^4 個/ml に調製した孢子懸濁液を開花期に噴霧接種し、収穫した。

3. 調査結果

1) 県内の主要な飼料用稲品種における温湯処理条件の解明

種子水分は、各品種とも事前乾燥前は14%程度、事前乾燥後は8%程度であった（データ省略）。

- (1) 「コシヒカリ」の発芽率は、事前乾燥なし区では63℃までは90%以上であったが、65℃で88%、68℃で27%と低下した。一方、事前乾燥あり区では65℃まで90%以上であり、68℃でも74%と事前乾燥による高温耐性の向上が認められた（図1）。
- (2) 「月の光」の発芽率は、事前乾燥なし区では65℃までは90%以上であったが、68℃では25%と低下した。一方、事前乾燥あり区では65℃までは90%以上であり、68℃でも86%と事前乾燥による高温耐性の向上が認められた（図2）。
- (3) 「あさひの夢」の発芽率は、事前乾燥なし区では60℃および63℃で80%程度、65℃で90%以上であったが、68℃では79%と再び低下した。一方、事前乾燥あり区では68℃までは90%以上であり、事前乾燥による高温耐性の向上が認められた（図3）。
- (4) 「夢あおば」の発芽率は、事前乾燥なし区では65℃までは90%以上であったが、68℃では73%と低下した。一方、事前乾燥あり区では68℃までは90%以上であり、事前乾燥による高温耐性の向上が認められた（図4）。

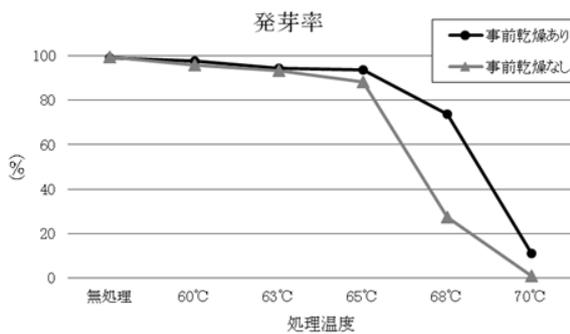


図1 「コシヒカリ」における種子の事前乾燥が温湯処理後の発芽率に及ぼす影響

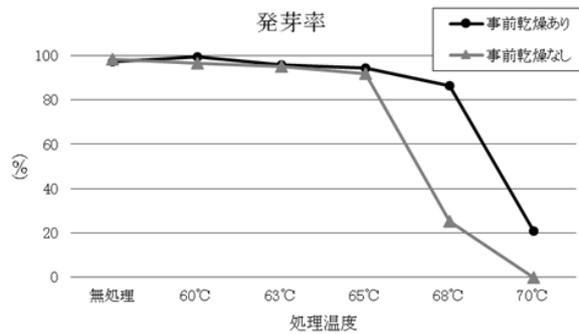


図2 「月の光」における種子の事前乾燥が温湯処理後の発芽率に及ぼす影響

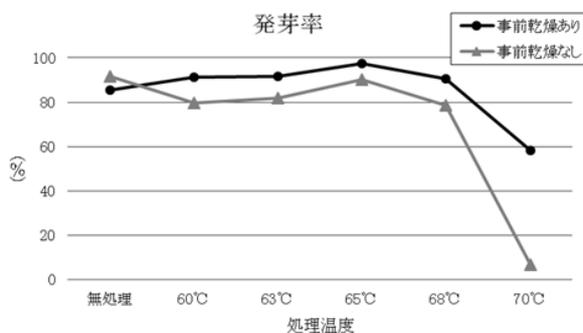


図3 「あさひの夢」における種子の事前乾燥が温湯処理後の発芽率に及ぼす影響

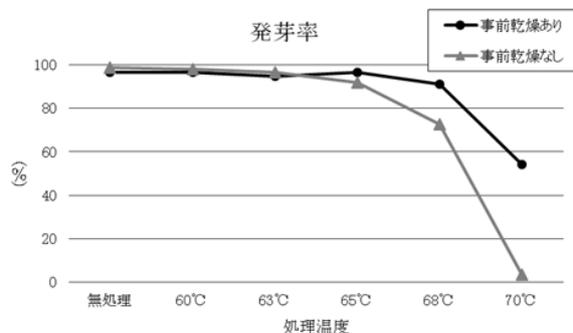


図4 「夢あおば」における種子の事前乾燥が温湯処理後の発芽率に及ぼす影響

2) 種子処理ラインにおける汚染防止対策の検討

①イネばか苗病菌に対する消毒資材による生育抑制効果

(1) 消毒資材無添加培地上における菌叢直径は、培養6日後で3.9cm、12日後で6.3cmであった(図5)。

(2) イチバン添加培地上では、500倍および1000倍希釈ともに菌叢の生育は認められなかった。一方、ケミクロンG添加培地上において、500倍希釈では、培養6日後で1.4cm、12日後で4.4cmと無添加と比較して生育抑制効果がわずかに認められた。また、1000倍希釈の場合、培養6日後で3.1cm、12日後で6.4cmと生育抑制効果は認められなかった(図5)。

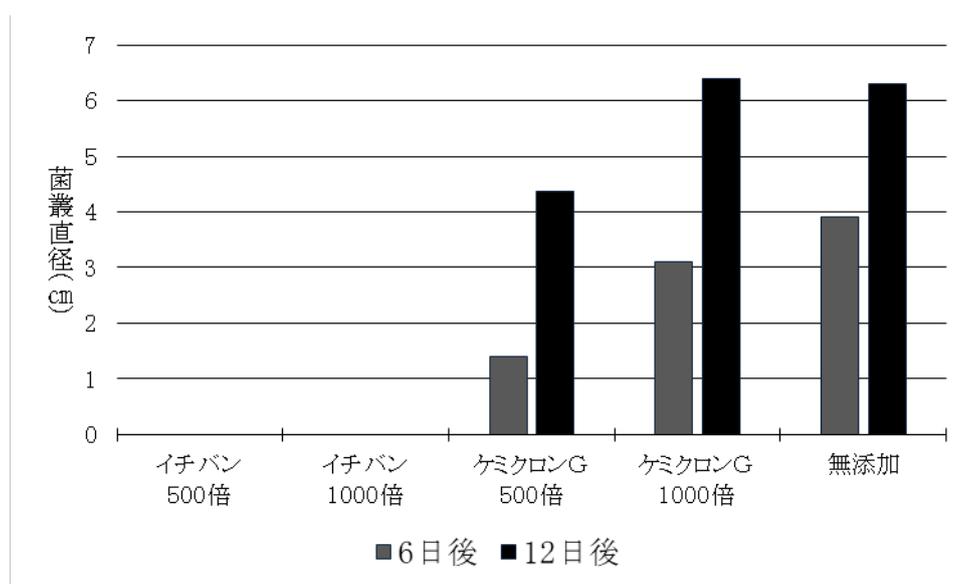


図5 イネばか苗病菌に対する消毒資材による生育抑制効果

②イネばか苗病に対する育苗箱消毒による発病抑制効果

(1) 無処理区の発病苗率は26.9%であった(表1)。

(2) 水洗い+イチバン500倍希釈液瞬時浸漬区、水洗い+温湯消毒60°C5分区および水洗いのみ区のいずれの処理においても発病抑制効果が認められたが、処理区間の差は認められなかった(表1)。ただし、日照不足により苗が徒長気味に生育し、発病の判定が難しかったため、再検討が必要である。

表1 イネばか苗病に対する育苗箱消毒による発病抑制効果

試験区	発病苗率(%)	防除価
水洗い + イチバン 500倍希釈液 瞬時浸漬	6.3	76.7
水洗い + 温湯消毒 60°C5分	7.8	71.0
水洗い	7.6	71.8
無処理	26.9	

注) 防除価 = (無処理区の発病苗率 - 処理区の発病苗率) ÷ 無処理区の発病苗率 × 100

3) イネばか苗病菌保菌種子の作製

「月の光」、「あさひの夢」、「夢あおば」および「コシヒカリ」のイネばか苗病菌開花期接種もみを収穫した。

4. 考察

茨城県内の主要な飼料用稲3品種のうち、温湯処理温度65℃までは「月の光」および「夢あおば」の発芽率は90%以上確保できたが、「あさひの夢」は80~90%とやや不安定であった。このことについて、「あさひの夢」はH30年産種子を使用したため、休眠が深く、発芽率に影響を及ぼしたと考えられた。また、処理温度68℃および70℃ではいずれの品種も発芽率が低下したため、処理温度は65℃が上限と考えられた。さらに、事前乾燥処理により種子水分を10%以下にすることで、いずれの品種においても高温耐性が向上すると考えられた。

消毒資材については、「イチバン」または「ケミクロンG」が一般的に使用されているが、消毒資材添加PDA培地上での試験の結果から、イネばか苗病菌に対しては「イチバン」による生育抑制効果が高いと考えられた。また、「イチバン」は消毒後に水洗いなどの必要がないため、作業の手間がかからずに済み、生産現場に導入しやすいと考えられる。なお、本試験において、消毒後すぐに播種作業を行ったが、育苗中の葉害は認められなかった。

育苗箱消毒によるイネばか苗病に対する発病抑制効果は認められたが、水洗いのみでも同程度の発病抑制効果が認められた。これは、水洗いにより育苗箱に付着していた培土が取り除かれ、菌密度が低下したことによるものと考えられる。また、今年度は冬季(11~12月)に試験を実施したため、日照不足により苗が徒長気味に生育し、発病苗の判定が難しかったことから、次年度に再試験を行い、発病抑制効果を明らかにする。

5. 今後の課題

- 1) 温湯処理温度を65℃とし、処理時間を10分以上にした場合の種子への影響について調査する必要がある。次年度はイネばか苗病菌開花期接種籾を用いて、温湯処理によるイネばか苗病に対する防除効果を明らかにする。
- 2) 育苗試験を冬季に実施した結果、日照不足により苗が徒長気味に生育し、防除効果の判定が難しかったため、矮化剤を利用する等の工夫が必要であった。次年度は育苗箱消毒試験について、同様の処理条件で日照時間を十分に確保できる期間(4~6月ごろ)に再試験を行う。

6. 要約

- 1) 「月の光」および「夢あおば」の温湯処理条件は65℃10分までであれば発芽率90%以上、あさひの夢」も発芽率80~90%程度を確保できることが明らかとなった。また、いずれの品種も事前乾燥により種子水分10%以下にすることで、高温耐性の向上が認められた。
- 2) イチバン添加培地上において、菌叢の生育は認められなかった。また、育苗箱消毒により発病抑制効果が認められたが、再検討が必要である。
- 3) 県内の主要な飼料用稲3品種のイネばか苗病菌保菌種子を作製した。

7. 成果の公表及び特許 特になし

減農薬栽培に対応した水稻の種子伝染性病害に対する防除体系の確立（3）

（1）採種年次の異なる種子に対する温湯処理による影響評価

氏名：酒井和彦・植竹恒夫

所属：埼玉県農業技術研究センター

[〒360-0102 埼玉県熊谷市須賀広 784]

1. 調査背景と目的

近年は、甚大な被害を及ぼす病害虫の発生頻度が増加していること、また、都道府県では病害虫防除所の職員が減少していることから、各都道府県単独で防除体系等を確立し、効果的に防除することは困難になってきている。そこで、現在、地域で問題となっている、またはなりつつある病害虫を対象として、モデル的に地域ブロック単位で都道府県が課題を共有し、試験等を分担して防除体系等を確立する体制の構築を実証する。

本事業において、関東・東山ブロックでは減農薬栽培に対応した水稻種子伝染性病害に対する防除技術確立のための調査研究を行い、いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病を対象とする。埼玉県では「もみ枯細菌病」に対する、減農薬栽培技術に対応した防除体系の確立のための調査研究を行い、種子生産における防除労力および環境負荷の低減を目的とする。

ここでは、採種後の経過年数が異なる種子における温湯処理および催芽時の食酢処理による影響を明らかにする。催芽時の食酢浸漬は、既往の知見に基づき、もみ枯細菌病などの細菌病による苗腐敗症の防除を目的とするものである。

2. 調査方法

1) 供試材料

「彩のきずな」および「彩のかがやき」の2品種を対象とした。夏作試験用に埼玉県種苗センターより分譲を受けた種子と、2018年産種子として、後述の調査（2）における坪刈試料を用いた。なお、2017年産以前の種子は、試験に用いた播種残りを廃棄せずに5～9℃の冷蔵庫で保管しておいたものである。

彩のきずな：2018年産（坪刈試料）、2017年産、2014年産、2013年産

彩のかがやき：2018年産（坪刈試料）、2015年産、2014年産

2) 方法

種子消毒法として、次の2種の処理を検討した。

①60℃15分間温湯浸漬＋催芽時の食酢浸漬（酸度0.1%に蒸留水で希釈）

②60℃15分間温湯浸漬

用いた食酢は酸度 4.2%の市販品（M社）である。

発芽検査は定法（100粒×4反復、25℃）に準じて行った。径 90mm ガラスシャーレに濾紙を敷き、催芽した種子粕を入れ、蒸留水で濾紙を湿らせて 25℃の定温器で管理した。なお、検定は 2 回に分けて行い、各品種・各採種年次について 100 粒×2 反復を 2 回実施した。工程は表 1 のとおりである。

播種 4 日後、7 日後、10 日後および 14 日後に発芽調査を行い、完全に幼芽・幼根が伸長した粕を発芽粕として拾い出して計数し、発芽率を求めた。

表1 今回の調査における工程

	温湯浸漬	浸種	催芽	播種	発芽調査			
	60℃15分 ▽	15-22℃	28℃ ▽	25℃ ▽	4日後 ▽	7日後 ▽	10日後 ▽	14日後 ▽
1回目	12/25		12/27	12/28	1/1	1/4	1/7	1/14
2回目	1/1		1/3	1/4	1/8	1/11	1/14	1/18

3. 調査結果

1) 「彩のきずな」における結果

表 2 のとおりである。2018 年産種子では温湯浸漬なし区において 4 日後の発芽率が低い。登熟期の高温により休眠が深かったためと考えられる。7 日後において、発芽しうる粕は全て発芽した。

2017 年産種子では温湯処理の有無で発芽率に明確な差はなかった。2014 年産種子では温湯浸漬により発芽率がわずかに低下する傾向が認められた。採種後 5 年を経過した 2013 年産種子では温湯浸漬により発芽率の低下が明確に認められ、5 年以上経過した種子における消毒法として温湯浸漬法は実用上の問題となる可能性が示唆された。

表2 「彩のきずな」における発芽率

採種年	処理方法	発芽率(%)			
		4日後	7日後	10日後	14日後
2018年	温湯浸漬・催芽時食酢浸漬	94.3	97.8	98.0	98.0
	温湯浸漬のみ	86.5	97.8	98.3	98.5
	温湯浸漬なし	87.0	99.0	99.0	99.0
2017年	温湯浸漬・催芽時食酢浸漬	96.0	98.8	98.8	98.8
	温湯浸漬のみ	97.5	98.5	98.8	98.8
	温湯浸漬なし	98.5	99.5	99.8	99.8
2014年	温湯浸漬・催芽時食酢浸漬	97.0	98.8	98.8	98.8
	温湯浸漬のみ	96.3	97.8	98.0	98.0
	温湯浸漬なし	98.0	99.5	99.8	99.8
2013年	温湯浸漬・催芽時食酢浸漬	92.8	95.5	96.3	96.3
	温湯浸漬のみ	91.8	94.0	94.3	94.3
	温湯浸漬なし	99.0	99.3	99.5	99.5

2) 「彩のかがやき」における結果

表 3 のとおりである。2018 年産では 4 日後の発芽率において処理方法ごとの差が認められたが 7

日後には各区とも同等となり、きわめて高かった。

2015年産では4日後において温湯浸漬なし区に比較し他の2処理区での発芽率が低く、7日後でもやや低かった。2014年産においても7日後において同様の傾向が認められた。

表3「彩のかがやき」における発芽率

採種年	種子の処理方法	発芽率(%)			
		4日後	7日後	10日後	14日後
2018年	温湯浸漬・催芽時食酢浸漬	94.5	99.8	99.8	99.8
	温湯浸漬のみ	85.0	98.5	98.8	99.0
	温湯浸漬なし	98.0	100.0	100.0	100.0
2015年	温湯浸漬・催芽時食酢浸漬	94.5	97.0	97.5	97.8
	温湯浸漬のみ	95.0	96.8	97.5	97.8
	温湯浸漬なし	98.3	99.5	99.5	99.5
2014年	温湯浸漬・催芽時食酢浸漬	90.5	96.0	97.3	97.8
	温湯浸漬のみ	97.3	98.5	98.5	98.5
	温湯浸漬なし	99.0	100.0	100.0	100.0

4. 考察

もみ枯細菌病など、育苗時における種子伝染性細菌病対策としての60℃15分間の温湯浸漬と、催芽時の食酢浸漬については、「彩のきずな」においては採種後4年以内であれば発芽勢・発芽率を確保できるものと考えられるが、5年経過した種子では発芽率の低下が生じると考えられた。「彩のかがやき」では採種後3年経過で温湯処理による発芽への影響が生じると考えられた。温湯処理を行った後、催芽時の食酢浸漬処理の有無は発芽率にほとんど影響しないと考えられる。

なお、両品種とも2018年産での4日後の発芽率において処理区間の差が判然としないのは、登熟期の高温により種子の休眠が深かった影響と考えられる。

5. 今後の課題

2018年産種子については、休眠の影響が弱まる時期に今回と同様の処理を行って発芽率の検討をする必要もあると考えられる。

6. 要約

「彩のきずな」および「彩のかがやき」を対象に、温湯浸漬と催芽時の食酢処理が発芽に及ぼす影響と、採種後経過年数との関係を調査した。「彩のきずな」では採種後4年経過で温湯浸漬による発芽への影響が現れ始め、5年経過で明らかに認められた。「彩のかがやき」では採種後3年経過で温湯処理による影響が認められた。温湯処理において、催芽時の食酢浸漬処理の有無は発芽率にほとんど影響しなかった。

7. 成果の公表及び特許

とくになし

減農薬栽培に対応した水稻の種子伝染性病害に対する防除体系の確立（3）

（2）効率的な防除体系の確立

氏名：酒井和彦・植竹恒夫

所属：埼玉県農業技術研究センター

[〒360-0102 埼玉県熊谷市須賀広 784]

1. 調査背景と目的

近年は、甚大な被害を及ぼす病害虫の発生頻度が増加していること、また、都道府県では病害虫防除所の職員が減少していることから、各都道府県単独で防除体系等を確立し、効果的に防除することは困難になってきている。そこで、現在、地域で問題となっている、またはなりつつある病害虫を対象として、モデル的に地域ブロック単位で都道府県が課題を共有し、試験等を分担して防除体系等を確立する体制の構築を実証する。

本事業において、関東・東山ブロックでは減農薬栽培に対応した水稻種子伝染性病害に対する防除技術確立のための調査研究を行い、いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病を対象とする。埼玉県では「もみ枯細菌病」に対する、減農薬栽培技術に対応した防除体系の確立のための調査研究を行い、種子生産における防除労力および環境負荷の低減を目的とする。

ここでは、温湯浸漬による種子消毒、育苗箱施用薬剤と本田防除を組み合わせた防除体系を検討し、減農薬栽培の実効性を明らかにする。

2. 調査方法

1) 供試品種・場所・耕種概要

「彩のきずな」「彩のかがやき」を対象とした。前者は5月17日移植、後者は6月12日移植で、埼玉県農業技術研究センター 玉井試験場 水田ほ場（灰色低地土：宝田統）で検討した。施肥は基肥＋穂肥の分施とし、基肥は10a当たりNPK各5kg、穂肥は「彩のきずな」でNK各3kg、「彩のかがやき」でNK各2kgを幼穂形成初期に施用した。水管理は慣行により行った。

2) 処理区の構成・方法

本県の減農薬栽培の基準である6成分以内に抑えるため、種子は60℃・15分間の温湯浸漬処理による消毒とした。育苗は慣行の育苗箱（60cm×30cm、5L容）でホーネンス培土3号を用いて行った。

箱処理薬剤としてシアントラニリプロール・シメコナゾール・トルプロカルブ粒剤（トリプルキック箱粒剤）を移植当日に箱当たり50g処理した。過去の試験事例から本病に対しトルプロカルブが有効である知見に基づく。本田での追加防除はプロベナゾール粒剤またはオキシリニ

ック酸水和剤とした(表1)。移植は歩行型田植機(I社製2条型)で行い、株間20cm×条間30cmとした。本田除草剤はピリミスルファン・フェントラザミド粒剤(ヤイバジャンボ)を移植数日後に1kg/10aの割合で水田に投入した。

水田面積の関係上反復を設けられないため、試験規模は1区1.3(彩のかがやき)~1.4a(彩のきずな)とし、発病調査および収量調査時に疑似反復3地点を設けた。

表1 防除体系

試験区番	種子消毒 温湯処理	箱粒剤 移植時	本田防除	濃度・量	処理時期
1	○	○	プロベナゾール粒剤	4kg/10a	幼穂形成 初期
2	○	○	オキシリニック酸水和剤	×1,000 110~120L/10a	出穂始~ 出穂期
3	○	—	—	—	—

3) 発病調査

「彩のきずな」では出穂期の24日後、「彩のかがやき」では出穂期の20日後に、各疑似反復の地点につき50株(連続25株×2条)を対象に、各株任意の10穂について発病調査を行った(表2)。調査基準は新農薬実用化試験(日本植物防疫協会)に基づき、発病穂率および発病度を算出し、発病度から防除価を求めた。

$$\text{発病度} = \{ \Sigma (\text{階級値} \times \text{穂数}) \div (\text{調査穂数} \times 4) \} \times 100$$

階級値(調査基準) 0:健全 1:1穂内の発病穂数が10%以下 2:11%以上30%以下
3:31%以上60%以下 4:61%以上

表2 各品種の防除実施日、出穂期、発病調査

移植月日 および 品種	試験区および防除体系	本田防除 実施月日	出穂期	発病調査
5/17 彩のきずな	1. 箱剤+幼穂形成期粒剤	7/10	7/27 顕著な高温で早 まり、株ごとの ばらつき大きい。	8/20
	2. 箱剤+出穂期散布剤	8/3		
	3. 無処理	—		
6/12 彩のかがやき	1. 箱剤+幼穂形成期粒剤	7/26	8/22	9/11
	2. 箱剤+出穂期散布剤	8/22		
	3. 無処理	—		

4) 収量調査

成熟期には刈刈を行った。刈取面積は各反復地点につき3m²(2.5m×4条)とした。

鉄骨造アクリルハウス内で風乾後、脱穀して脱芒機を用いて芒と枝梗を除去、電動唐箕を用いて風選して夾雑物を除き籾の重量測定を行った。その後、電動式穀粒選別機を用い縦目篩(2.2mm)で選別を行い、篩上に残った籾の重量を測定して種子収量とした。

3. 調査結果

1) 防除効果

防除効果は図1のとおりである。

「彩のきずな」では本田無処理区(温湯消毒のみ)における発病穂率は24.8%、発病度は6.5であったのに対し、幼穂形成期の粒剤区で防除価46.6、出穂期の液剤残布区で58.8であった。

「彩のかがやき」では本田無処理区(温湯消毒のみ)における発病穂率は33.5%、発病度は9.4であったのに対し、幼穂形成期の粒剤区で防除価61.7、出穂始の液剤散布区で58.3であった。

両品種とも体系防除により防除効果が得られたが、いずれも発病穂率は10%を上回り、十分ではなかった。

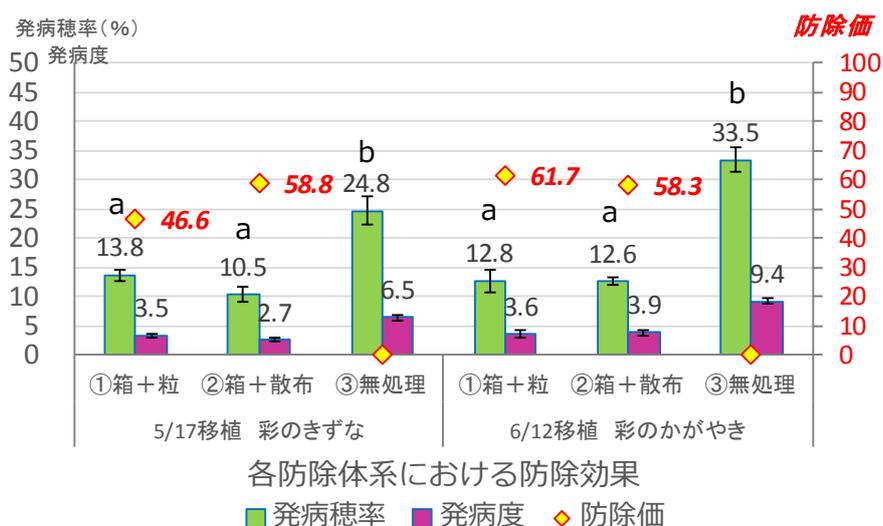


図1 各防除体系における防除効果

図1・2 エラーバーは標準誤差(n=3)、異なる英小文字間に有意差あり(p<0.05、Tukey)

2) 種子籾の収量

各品種・各防除体系における種子籾の収量は図2のとおりである。

「彩のきずな」では全般に低収で、2.2mm上の収量は本田無処理区(温湯消毒のみ)で303kg/10aにとどまった。出穂期液剤散布区で387kg/10aと、本県における基準380kg/10aを上回ったが、幼穂形成期の粒剤処理区では300kg/10aを下回った。

「彩のかがやき」では多収となり2.2mm上の収量は本田無処理区で447kg/10aに達した。「彩のきずな」と同様、出穂期の液剤散布でやや増収し、468kg/10aを確保した。

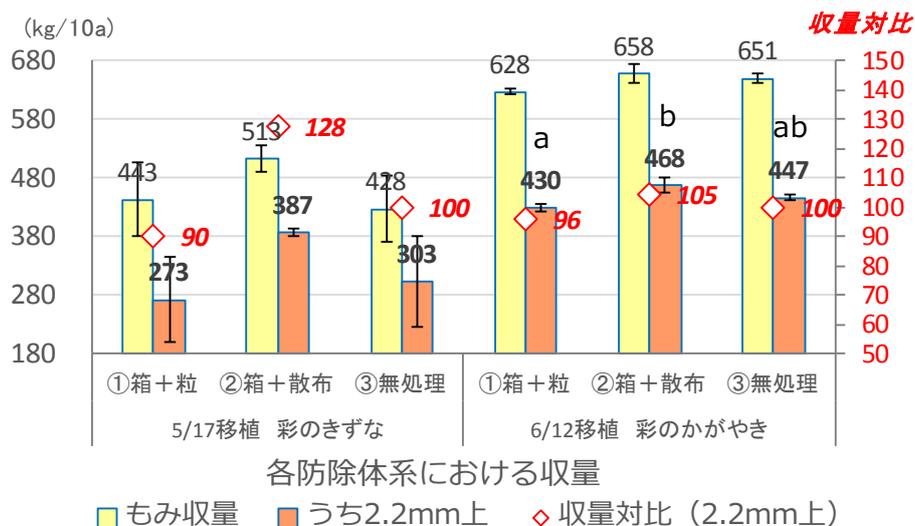


図2 各防除体系における種子粃の収量

4. 考察

減農薬栽培を前提とした体系防除として移植時の箱施肥と本田防除を組み合わせる際、本田処理は抵抗性誘導型のプロベナゾール剤の湛水処理よりも、穂に直接薬液が付着する液剤散布のほうが効果的と考えられる。しかし、1回処理では十分な効果が得られにくいと考えられた。

「彩のきずな」が低収だった要因として、2018年夏季の顕著な高温が考えられる。本品種は登熟期の高温による品質低下（乳白）が起こりにくく高温耐性が高いとされるが、今作では出穂期後に長期間続いた高温により夜間の呼吸消費が大きかったことが考えられる。一方、「彩のかがやき」では十分な収量が確保されたが、出穂期後に顕著な高温に遭遇しなかったためと考えられる。

5. 今後の課題

防除効果を高めるため、箱施用薬剤を1成分減じた2成分銘柄とし、本田で液剤を2回使用できる体系を検討する。

6. 要約

「彩のきずな」「彩のかがやき」を対象に、農薬の使用成分数を6成分とした減農薬栽培による移植時剤処理と本田防除の体系防除の効果を検討した。もみ枯細菌病に対し、トルプロカルブを含む箱施用薬剤を移植当日に処理し、本田防除は出穂始～出穂期にオキシリニック酸水和剤を散布することで防除効果が得られたが、より効果を高めるための防除体系を検討する必要がある。なお、本防除体系により、種子粃の収量は県の基準を上回った。

7. 成果の公表及び特許

関東東海北陸農業試験研究推進会議病害虫部会 病害・虫害研究会 (2018.11.13、つくば市)

関東東山病害虫研究会第66回研究発表会 (2019.2.22、立川市、予定)

減農薬栽培に対応した水稻の種子伝染性病害に対する防除体系の確立（3）

（3）採種種子の収量および品質評価

氏名：酒井和彦・植竹恒夫

所属：埼玉県農業技術研究センター

[〒360-0102 埼玉県熊谷市須賀広 784]

1. 調査背景と目的

近年は、甚大な被害を及ぼす病害虫の発生頻度が増加していること、また、都道府県では病害虫防除所の職員が減少していることから、各都道府県単独で防除体系等を確立し、効果的に防除することは困難になってきている。そこで、現在、地域で問題となっている、またはなりつつある病害虫を対象として、モデル的に地域ブロック単位で都道府県が課題を共有し、試験等を分担して防除体系等を確立する体制の構築を実証する。

本事業において、関東・東山ブロックでは減農薬栽培に対応した水稻種子伝染性病害に対する防除技術確立のための調査研究を行い、いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病を対象とする。埼玉県では「もみ枯細菌病」に対する、減農薬栽培技術に対応した防除体系の確立のための調査研究を行い、種子生産における防除労力および環境負荷の低減を目的とする。

ここでは、減農薬栽培によって得られた種子の収量・品質と、発病抑制程度を調査する。

2. 調査方法

坪刈試料を目合い2.2mmの縦目篩で選別し、篩上に残った粃を供試した。

1) 収穫物の発芽検査

ほ場試験では坪刈時に疑似反復3地点を設けており、それぞれの反復由来の試料について4連制で発芽試験を行った。発芽検査は定法（100粒×4反復、25℃）に準じて行った。径90mmガラスシャーレに濾紙を敷き、催芽した種子粃を入れ、蒸留水で濾紙を湿らせて25℃の定温器で管理した。検定は2回に分けて行い100粒×2反復を2回実施した。工程は表1のとおりである。

播種5日後、7日後、10日後および14日後に発芽調査を行い、完全に幼芽・幼根が伸長した粃を発芽粃として拾い出して計数し、発芽率を求めた。

表1 今回の調査における工程

	予措(浸種) 25℃ ▽	播種 25℃ ▽	発芽調査			
			5日後 ▽	7日後 ▽	10日後 ▽	14日後 ▽
1回目	12/6	12/7	12/12	12/14	12/17	12/21
2回目	12/13	12/14	12/19	12/21	12/24	12/28

2) 育苗試験

採取した種子粒については各反復から 400 粒を対象に育苗試験を行って、苗立ち率と、もみ枯細菌病による苗腐敗症の発生程度を調査した。ポリプロピレン製イチゴ用パック (330 g 用) に粒状育苗培土 (ホーネンス培土 3 号) を充てんし、浸種・催芽後の種子を 1 パックにつき 200 粒播種、覆土した。播種後は 28℃ のグロースキャビネット (明暗各 12 時間) で芽出しと緑化を行い、緑化後は所内ガラス温室で育苗・管理した。工程は表 2 のとおりである。

冬季の育苗試験であるため、育苗ベンチ上に梱包用気泡緩衝材を敷いた上にアルミ蒸着ポリエチレンシート (ポリシャイン) を敷き、電熱式育苗マット (農電マット) を設置し、ステンレス製バット (長さ 40cm×幅 29cm×深さ 6cm) を置いて 1～2 cm の深さに水を張り、そこにイチゴ用パックを 2 個置いて底面給水で管理した。育苗マットの設定温度は 25℃ とした。また、試験温室は温湯管による暖房が設置されているが 10℃ を下回る場合があるため、電熱式オイルヒーター (D 社) を 2 台設置し、12℃ 以上となるようにした。日中の換気温度は 33℃ 設定とした。

播種後 22～23 日後、おおむね 3 葉期に全株を対象に発病調査を行って発病苗率と発病度を求めるとともに、出芽個体数を計数して苗立ち率を求めた。下記の調査基準により発病度も求めたが、防除価の算出は発病苗率によった。

$$\text{発病度} = \{ \Sigma (\text{階級値} \times \text{苗数}) \div (\text{調査苗数} \times 3) \} \times 100$$

階級値 (調査基準)

0 : 健全、1 : 苗の奇形・白化、2 : 葉鞘に病徴発現 3 : 苗全体が腐敗または枯死

表2 育苗試験における工程

供試品種	浸種 15-22℃	水交換	催芽 28℃	播種 28℃	温室へ 移動	発病調査 22・23日後	苗立 調査
		▽	▽	▽		▽	▽
彩のきずな	12/14～	12/15	12/18	12/19	12/24	1/11	1/16
彩のかがやき	12/20～	12/21	12/24	12/25	12/28	1/16	1/16

3. 調査結果

1) 生産物の発芽率

結果は表 3 のとおである。「彩のきずな」「彩のかがやき」とも 5 日後の発芽率 (発芽勢) が低いが、これは登熟期間中の高温による休眠が深く、検定時には覚醒が十分でなかったものと考えられた。7 日後では、「彩のきずな」は発芽率が 80% 以下の処理区もあったが「彩のかがやき」ではおおむね 90% となった。10 日後には各品種・各区とも 97～99% に達した。減農薬栽培によって得られた種子の発芽率は、生産物審査の基準を満たすことが確認された。

表3 栽培期間中の防除方法の違いによる種子粗の発芽率

品種名	栽培期間の防除方法	発芽率(%)			
		5日後	7日後	10日後	14日後
彩のきずな	箱施薬+プロベナゾール粒剤	27.9	69.6	96.9	98.8
	箱施薬+オキシリニック酸wp	60.9	92.9	99.3	99.3
	無処理(種子温湯消毒のみ)	51.0	78.4	97.1	99.3
彩のかがやき	箱施薬+プロベナゾール粒剤	50.0	89.8	99.2	99.8
	箱施薬+オキシリニック酸wp	47.4	93.1	99.6	99.8
	無処理(種子温湯消毒のみ)	59.3	89.6	99.3	99.7

2) 育苗試験の結果

結果は表4および表5のとおりである。

両品種とも苗立率は96%以上で高く、減農薬栽培によって得た種子でも出芽・苗立ちは実用上の問題はないと考えられる。

発病苗率は「彩のきずな」無処理(種子温湯消毒のみ)区で2.85%、「彩のかがやき」の無処理(種子温湯消毒のみ)区で6.82%、後者のほうで高かった。生育期の防除方法の違いによる発病苗率は、両品種とも、箱施薬+オキシリニック酸水和剤区(出穂期散布)において、箱施薬+プロベナゾール粒剤区(幼穂形成初期～前期散布)より低下する傾向であった。

表4 「彩のきずな」における苗立率および発病

生育期の防除方法	苗立率 (%)	病苗率 (%)	枯死苗率 (%)	発病度	防除価 (病苗率)
箱施薬+プロベナゾール粒剤	97.6	2.31	0.00	1.45	18.9
箱施薬+オキシリニック酸wp	97.8	1.21	0.09	0.80	57.7
無処理(種子温湯消毒のみ)	96.7	2.85	0.09	1.81	-

表5 「彩のかがやき」における苗立率および発病

生育期の防除方法	苗立率 (%)	病苗率 (%)	枯死苗率 (%)	発病度	防除価 (病苗率)
箱施薬+プロベナゾール粒剤	97.8	5.31	0.08	3.57	22.2
箱施薬+オキシリニック酸wp	99.0	3.82	0.00	2.35	44.0
無処理(種子温湯消毒のみ)	98.3	6.82	0.17	4.52	-

4. 考察

(1) 減農薬栽培を行って得た種子の発芽率は、発芽勢としてとらえた場合(播種5日後)では高くなかったが、これは登熟期の高温による深い休眠の獲得によるものと考えられる。10日後では96%以上となり、生産物審査の基準(25℃、14日後で90%以上)を満たすことから、実用上の問題は小さいと考えられる。

(2) 減農薬栽培を行って得た種子の苗立率は両品種とも96%以上で高かったことから、前述(1)の結果と併せ、実用上の問題はないと考えられる。育苗期間中の苗腐敗症は、移植時箱施薬+幼穂形成初期のプロベナゾール粒剤処理では不十分で、出穂期のオキシリニック酸水和剤の散布でやや低い効果が得られると考えられた。

5. 今後の課題

年次変動を考慮した複数年のデータの集積と、育苗試験における苗腐敗をより低下させる本田防除体系の検討。

6. 要約

「彩のきずな」「彩のかがやき」を対象に、減農薬栽培を行って得た種子の発芽率、育苗試験における苗立ち率と苗腐敗症の発生を調査した。

両品種とも、得られた種子の発芽率は生産物審査の基準を満たし、育苗試験による苗立ち率も十分に高かった。育苗時における苗腐敗症は、移植時の箱施薬と出穂期のオキシリニック酸水和剤散布で軽減された。

7. 成果の公表及び特許

関東東山病害虫研究会第66回研究発表会（2019.2.22、立川市、予定）

減農薬栽培に対応した水稻の種子伝染性病害に対する防除体系の確立（４）

～イネばか苗病等に対する温湯処理と食酢、生物農薬等を組み合わせた効果の高い体系処理の検証～

氏名 中島 宏和、萬田 等、山田 和義

所属 長野県農業試験場

[〒382-0072 住所 長野県須坂市小河原 492]

1. 調査背景と目的

水稻栽培においては、減農薬栽培に対応した防除方法として温湯処理や微生物農薬が普及しているが、単用では効果が不安定な場合があり、ばか苗病をはじめとした種子伝染性病害の被害が各地で問題となっている。そこで、既存の種子消毒技術を組み合わせた体系防除技術の有効性を実証するとともに、新たに効果の高い防除資材を活用し、減農薬栽培に対応した種子伝染性病害の防除体系を検討する。実証試験で効果が確認できた防除技術については、県防除基準へ掲載する。今年度は、各種防除体系の有効性の調査を進める。

2. 調査方法

1) 試験場所 長野県農業試験場内ガラス室

2) 試験方法

浸種前処理：温湯処理 60℃10分または15分

催芽時処理：エコホープDJ200倍、タフブロック200倍、エコフィット100倍、MO-1液剤300倍の24時間浸漬処理、浴比は1：2（粃：液）とした。

対照処理：テクリードCフロアブル200倍、モミガードC水和剤200倍の浸種前24時間浸漬処理、浴比は1：1（粃：液）とした。なお、浸種前、催芽時に処理しない場合は、蒸留水に浸漬して同一の条件下で浸種または催芽をした。

供試培土：しなの培養土1号

区制・面積：1区育苗箱の1/25～1/12大プラスチックカップ 3～5反復 播種量8～12g/区

育苗環境：ガラスハウス内に設置された水槽内に各育苗箱を静置し、1日2回底面灌水した。

最低気温は15℃、最高気温は30℃に設定した。

なお、試験年月日等の詳細な試験条件は結果表下に記載した。

(1) ばか苗病

供試粃：コシヒカリ（平成28年産自然感染粃30～100%と健全粃を混和）

管理工程：浸種前処理後15℃で5日間程度浸種。催芽・播種後、恒温器内に入れ28℃で2～3日間出芽させ、その後はガラスハウスで管理した。

調査方法：播種3～4週間後に各区全苗について枯死苗数、徒長苗数、健全苗数を調査した。

なお、ばか苗病による奇形苗は徒長苗数に含めて評価した。葉害は随時肉眼で観察した。

(2) もみ枯細菌病

供試籾：あきたこまち（平成 25 年産開花期接種感染籾を 29 年産健全籾に重量比 30%混和）

管理工程：浸種前処理後 15℃で 5～6 日間浸種。催芽・播種後、恒温器内に入れ 32～35℃で 2 日間出芽、(28℃で 1 日間緑化させ)、ガラスハウスで管理した。

区制・面積：1 区育苗箱の 1/25～1/12 大プラスチックカップ 3～5 反復 播種量 8～12g/区

調査方法：各区全苗について、下記の基準に従い発病程度別に発病の有無を調査し、発病苗率および次式により発病度を算出した。枯死苗・萎凋苗；3、重症苗（罹病苗のうち草丈が健全苗の 1/3 未満）；2、軽症苗（罹病苗のうち草丈が健全苗の 1/3 以上）；1、健全；0

$$\text{発病度} = \{ \Sigma (\text{発病程度別苗数} \times \text{指数}) \div (\text{調査苗数} \times 3) \} \times 100$$

(3) 苗いもち

供試籾：コシヒカリ（平成 29 年産自然感染籾）

管理工程：浸種前処理後 15℃で 2 日間浸種。催芽・播種後、恒温器内に入れ 25℃で 3 日間出芽、25℃で 3 日間緑化させ、ガラスハウスで管理した。

区制・面積：育苗箱の 1/10 大育苗箱（育苗箱を 1/10 に仕切り使用）3 反復 播種量 12g/区

供試培土：成型マット（日産ハイマット）、しなの培養土 1 号（覆土のみ）

調査方法：播種 3 週間後頃に各区全苗について枯死苗数、病斑形成苗、健全苗数を調査した。

3. 調査結果

(1) 温湯処理 60℃10 分または 15 分と各剤の単用および体系処理のばか苗病に対する効果

中発生条件（発病苗率 24.0～56.9）において各処理単用の防除価は 80 前半～100 であった（表 1、2、3、4）。温湯処理の 60℃10 分または 15 分と各催芽時処理を体系処理することで効果が高まる傾向であった。対照剤は単用で高い効果が認められた。体系処理することでわずかに出芽数が低下する場合があったが、その他には目立った薬害はなかった。

(2) 温湯処理 60℃10 分と各剤の単用および体系処理のもみ枯細菌病に対する効果

少～中発生条件（発病度 11.8～35.7）において各処理単用の防除価は 59～100 であった（表 5、6）。温湯処理の 60℃10 分と各催芽時処理を体系処理することで効果が高まる傾向であった。対照剤の単用は効果が低かった。一部の処理で無処理または対照剤と比較して明らかな出芽数の減少および苗丈の短い生育不良苗の増加が認められた。

(3) 温湯処理 60℃10 分と各剤の単用および体系処理の苗いもちに対する効果

少発生条件（発病苗率 4.0%）において各処理単用の防除価は 80～90 であった（表 7）。温湯処理の 60℃10 分と各催芽時処理を体系処理することで効果が高まる傾向であった。対照剤は単用で高い効果が認められた。体系処理することでわずかに出芽数が低下する場合があったが、その他には目立った薬害はなかった。

表1 温湯処理60°C10分と各剤の単用および体系処理のばか苗病に対する効果

供試薬剤	処理方法	反復	苗立数 (本)	発病苗率 (%)			防除価	葉害
				枯死苗率	徒長苗率	計		
温湯処理	60°C10分	I	257	0.0	0.0	0.0	99.6	-
		II	266	0.0	0.0	0.0		-
		III	270	0.0	0.4	0.4		-
		平均	264	0.0	0.1	0.1		-
エコフィット	催芽時100倍 24時間浸漬	I	261	0.0	0.4	0.4	95.8	-
		II	260	0.0	2.7	2.7		-
		III	273	0.0	0.0	0.0		-
		平均	265	0.0	1.0	1.0		-
MO-1液剤	催芽時300倍 24時間浸漬	I	263	0.0	1.1	1.1	93.3	-
		II	272	0.4	3.3	3.7		-
		III	268	0.0	0.0	0.0		-
		平均	268	0.1	1.5	1.6		-
タフブロック	催芽時200倍 24時間浸漬	I	268	0.0	2.6	2.6	94.2	-
		II	267	0.0	1.1	1.1		-
		III	274	0.0	0.4	0.4		-
		平均	270	0.0	1.4	1.4		-
エコホープDJ	催芽時200倍 24時間浸漬	I	274	0.0	0.7	0.7	99.2	-
		II	264	0.0	0.0	0.0		-
		III	273	0.0	0.0	0.0		-
		平均	270	0.0	0.2	0.2		-
温湯処理 エコフィット	60°C10分 催芽時100倍 24時間浸漬	I	262	0.0	0.0	0.0	100.0	-
		II	257	0.0	0.0	0.0		-
		III	261	0.0	0.0	0.0		-
		平均	260	0.0	0.0	0.0		-
温湯処理 MO-1液剤	60°C10分 催芽時300倍 24時間浸漬	I	268	0.0	0.0	0.0	100.0	-
		II	261	0.0	0.0	0.0		-
		III	270	0.0	0.0	0.0		-
		平均	266	0.0	0.0	0.0		-
温湯処理 タフブロック	60°C10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	265	0.0	0.0	0.0	100.0	-
		II	267	0.0	0.0	0.0		-
		III	259	0.0	0.0	0.0		-
		平均	264	0.0	0.0	0.0		-
温湯処理 エコホープDJ	60°C10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	258	0.0	0.0	0.0	99.6	-
		II	260	0.0	0.4	0.4		-
		III	252	0.0	0.0	0.0		-
		平均	257	0.0	0.1	0.1		-
テクリードC フロアブル	浸種前200倍 24時間浸漬	I	281	0.0	0.0	0.0	100.0	-
		II	276	0.0	0.0	0.0		-
		III	251	0.0	0.0	0.0		-
		平均	269	0.0	0.0	0.0		-
モミガードC 水和剤	浸種前200倍 24時間浸漬	I	278	0.0	0.0	0.0	100.0	-
		II	272	0.0	0.0	0.0		-
		III	274	0.0	0.0	0.0		-
		平均	275	0.0	0.0	0.0		-
無処理		I	257	2.3	34.6	37.0		-
		II	269	0.7	21.6	22.3		-
		III	267	0.0	12.7	12.7		-
		平均	264	1.0	23.0	24.0		-

対象病害の発生状況：中、自然感染粗混和率：30%、区制・面積：1区育苗箱の1/25大プラスチックカップ3反復、播種量：8g/区、温湯処理および浸種前処理：10月5日15°C24時間、浸種：10月6日～9日15°C、催芽：10月9～10日28°C24時間、播種：10月10日、出芽：10月10～13日28°C、以降はガラスハウスで通常管理、調査：11月7、8日（播種28、29日後）

表2 温湯処理 60℃10分と各剤の単用および体系処理のばか苗病に対する効果

供試薬剤	処理方法	反復	苗立数 (本)	枯死苗率 (%)	徒長苗率 (%)	防除価	薬害
温湯処理	60℃10分	I	274	0.7	0.0	97.7	-
		II	266	1.1	2.3		-
		III	275	0.4	0.0		-
		平均	272	0.7	0.8		-
エコフィット	催芽時100倍 24時間浸漬	I	268	0.7	1.1	98.3	-
		II	261	1.9	0.8		-
		III	269	2.2	0.0		-
		平均	266	1.6	0.6		-
MO-1液剤	催芽時300倍 24時間浸漬	I	268	1.5	0.0	97.4	-
		II	275	0.4	1.5		-
		III	268	1.5	1.1		-
		平均	270	1.1	0.9		-
タフブロック	催芽時200倍 24時間浸漬	I	275	0.0	0.0	99.7	-
		II	280	0.0	0.4		-
		III	270	0.4	0.0		-
		平均	275	0.1	0.1		-
エコホープDJ	催芽時200倍 24時間浸漬	I	276	0.7	0.0	99.4	-
		II	279	0.0	0.0		-
		III	274	0.0	0.7		-
		平均	276	0.2	0.2		-
温湯処理 エコフィット	60℃10分 催芽時100倍 24時間浸漬	I	268	0.4	0.0	100.0	-
		II	270	0.4	0.0		-
		III	274	0.7	0.0		-
		平均	271	0.5	0.0		-
温湯処理 MO-1液剤	60℃10分 催芽時300倍 24時間浸漬	I	269	0.0	0.0	100.0	-
		II	276	0.4	0.0		-
		III	267	0.4	0.0		-
		平均	271	0.2	0.0		-
温湯処理 タフブロック	60℃10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	270	0.0	0.0	99.7	-
		II	276	0.0	0.4		-
		III	273	0.0	0.0		-
		平均	273	0.0	0.1		-
温湯処理 エコホープDJ	60℃10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	262	0.0	0.0	100.0	-
		II	260	0.8	0.0		-
		III	266	0.4	0.0		-
		平均	263	0.4	0.0		-
テクリードC フロアブル	浸種前200倍 24時間浸漬	I	278	0.0	0.0	100.0	-
		II	278	0.0	0.0		-
		III	282	2.5	0.0		-
		平均	279	0.8	0.0		-
モミガードC 水和剤	浸種前200倍 24時間浸漬	I	284	0.0	0.0	100.0	-
		II	274	0.0	0.0		-
		III	277	0.0	0.0		-
		平均	278	0.0	0.0		-
無処理		I	268	1.1	42.5		-
		II	263	1.9	35.0		-
		III	254	2.0	21.7		-
		平均	262	1.7	33.1		-

対象病害の発生状況：中、自然感染初混和率：50%、区制・面積：1区育苗箱の1/25大プラスチックカップ3反復、播種量：8g/区、温湯処理および浸種前処理：10月16日15℃24時間、浸種：10月17日～22日15℃、催芽：10月22～23日28℃24時間、播種：10月23日、出芽：10月23～26日28℃、以降はガラスハウスで通常管理 調査：11月19,20日（播種27、28日後） 防除価は徒長苗率から算出した。枯死は主にもみ枯細菌病または苗立枯病によるものであった。

表3 温湯処理 60°C15分と各剤の単用および体系処理のばか苗病に対する効果

供試薬剤	処理方法	反復	苗立数 (本)	枯死苗率 (%)	発病苗率 (%)	防除価	葉害
温湯処理	60°C15分	I	255	0.8	0.0	100.0	-
		II	254	1.2	0.0		-
		III	243	0.0	0.0		-
		平均	251	0.7	0.0		-
エコフィット	催芽時100倍 24時間浸漬	I	258	0.0	0.8	98.1	-
		II	271	1.8	0.0		-
		III	267	3.0	1.1		-
		平均	265	1.6	0.6		-
MO-1液剤	催芽時300倍 24時間浸漬	I	264	0.4	0.0	96.4	-
		II	270	0.4	0.0		-
		III	275	1.1	3.3		-
		平均	270	0.6	1.1		-
タフブロック	催芽時200倍 24時間浸漬	I	278	0.0	0.4	99.7	-
		II	278	0.4	0.0		-
		III	281	0.0	0.0		-
		平均	279	0.1	0.1		-
エコホープDJ	催芽時200倍 24時間浸漬	I	275	0.0	0.0	100.0	-
		II	273	0.4	0.0		-
		III	279	1.1	0.0		-
		平均	276	0.5	0.0		-
温湯処理 エコフィット	60°C15分 催芽時100倍 24時間浸漬	I	259	0.4	0.0	100.0	-
		II	254	1.6	0.0		-
		III	257	0.8	0.0		-
		平均	257	0.9	0.0		-
温湯処理 MO-1液剤	60°C15分 催芽時300倍 24時間浸漬	I	257	0.4	0.0	100.0	-
		II	256	1.2	0.0		-
		III	253	0.0	0.0		-
		平均	255	0.5	0.0		-
温湯処理 タフブロック	60°C15分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	257	0.4	0.0	100.0	-
		II	263	0.0	0.0		-
		III	263	0.0	0.0		-
		平均	261	0.1	0.0		-
温湯処理 エコホープDJ	60°C15分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	265	0.4	0.0	100.0	-
		II	267	0.0	0.0		-
		III	250	0.8	0.0		-
		平均	261	0.4	0.0		-
テクリードC フロアブル	浸種前200倍 24時間浸漬	I	280	1.8	0.0	100.0	-
		II	278	0.4	0.0		-
		III	275	0.0	0.0		-
		平均	278	0.7	0.0		-
モミガードC 水和剤	浸種前200倍 24時間浸漬	I	275	0.4	0.0	100.0	-
		II	280	0.0	0.0		-
		III	281	0.0	0.0		-
		平均	279	0.1	0.0		-
無処理		I	265	2.3	25.3		-
		II	259	1.5	41.7		-
		III	259	1.9	19.7		-
		平均	261	1.9	28.9		-

対象病害の発生状況：中、処理月日は表2と同様。

防除価は徒長苗率から算出した。枯死は主にもみ枯細菌病または苗立枯病によるものであった。

表4 温湯処理 60°C10分と各剤の単用および体系処理のばか苗病に対する効果

供試薬剤	処理方法	反復	苗立数 (本)	発病苗率(%)			防除価	薬害
				枯死苗率	徒長苗率	計		
温湯処理	60°C10分	I	425	0.0	0.5	0.5	96.8	-
		II	416	0.2	7.2	7.4		-
		III	417	0.0	0.0	0.0		-
		IV	408	0.2	0.5	0.7		-
		V	430	0.0	0.5	0.5		-
		平均	419	0.1	1.7	1.8		-
エコフィット	催芽時100倍 24時間浸漬	I	409	0.7	12.2	12.9	82.6	-
		II	418	1.2	9.6	10.8		-
		III	421	0.0	7.1	7.1		-
		IV	419	0.2	12.9	13.1		-
		V	423	0.2	5.2	5.4		-
		平均	416	0.5	9.4	9.9		-
エコホープDJ	催芽時200倍 24時間浸漬	I	429	1.6	0.5	2.1	97.7	-
		II	417	0.0	1.7	1.7		-
		III	435	0.0	0.9	0.9		-
		IV	420	1.0	0.0	1.0		-
		V	417	0.2	0.5	0.7		-
		平均	427	0.6	0.7	1.3		-
温湯処理 +エコフィット	60°C10分 催芽時100倍 24時間浸漬	I	413	0.0	0.2	0.2	99.1	-
		II	417	0.2	0.2	0.4		-
		III	410	0.5	0.0	0.5		-
		IV	427	0.7	0.0	0.7		-
		V	416	0.7	0.0	0.7		-
		平均	413	0.4	0.1	0.5		-
温湯処理 +エコホープDJ	60°C10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	411	0.0	0.2	0.2	100.0	-
		II	388	0.0	0.0	0.0		-
		III	383	0.0	0.0	0.0		-
		IV	391	0.0	0.0	0.0		-
		V	394	0.0	0.0	0.0		-
		平均	394	0.0	0.0	0.0		-
無処理		I	410	2.7	34.9	37.6		-
		II	409	2.4	46.2	48.6		-
		III	400	3.8	72.3	76.1		-
		IV	404	3.5	66.6	70.1		-
		V	398	3.5	48.7	52.2		-
		平均	406	3.2	53.7	56.9		-

対象病害の発生状況：中～多、自然感染率混和率：100%、区制・面積：1区育苗箱の1/12大プラスチックカップ5反復、播種量：12g/区、温湯処理および浸種前処理：3月23日15°C24時間、浸種：3月23日～29日15°C、催芽：3月29～30日28°C24時間、播種：3月30日、出芽：3月30～4月1日28°C、緑化：28°C、4月1日～2日、以降はガラスハウスで通常管理 調査：4月26,28日（播種26、28日後）防除価は発病苗率から算出した。

表5 温湯処理 60℃10分と各剤の単用および体系処理のもみ枯細菌病に対する効果

供試薬剤	処理方法	反復	苗立数 (本)	発病苗率 (%)				発病度	生育不良 苗率 (%)	防除価	葉害
				枯死苗率	重症苗率	軽症苗率	計				
温湯処理	60℃10分	I	241	0.4	0.0	0.0	0.4	0.4	3.3		-
		II	243	0.8	0.0	0.0	0.8	0.8	5.3		-
		III	245	1.6	0.8	0.0	2.4	2.2	7.8		-
		平均	243	1.0	0.3	0.0	1.2	1.1	5.5	96.9	
エコフィット	催芽時100倍 24時間浸漬	I	216	0.5	0.0	0.0	0.5	0.5	5.1		+
		II	215	0.9	1.9	0.9	3.7	2.5	7.0		+
		III	204	0.0	0.0	1.0	1.0	0.3	5.4		+
		平均	212	0.5	0.6	0.6	1.7	1.1	5.8	96.9	
MO-1液剤	催芽時300倍 24時間浸漬	I	246	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9		-
		II	266	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.1		-
		III	257	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.8		-
		平均	256	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9	100.0	
タフブロック	催芽時200倍 24時間浸漬	I	254	2.4	7.9	0.0	10.2	7.6	4.7		-
		II	260	0.4	0.0	0.0	0.4	0.4	5.4		-
		III	251	1.2	1.6	0.0	2.8	2.3	6.4		-
		平均	255	1.3	3.2	0.0	4.5	3.4	5.5	90.5	
エコホープDJ	催芽時200倍 24時間浸漬	I	254	0.4	0.0	0.0	0.4	0.4	2.0		-
		II	259	0.8	0.0	0.0	0.8	0.8	3.5		-
		III	257	1.6	0.0	0.0	1.6	1.6	1.6		-
		平均	257	0.9	0.0	0.0	0.9	0.9	2.3	97.5	
温湯処理 エコフィット	60℃10分 催芽時100倍 24時間浸漬	I	222	0.0	0.5	0.0	0.5	0.3	8.1		+
		II	217	0.0	0.5	0.0	0.5	0.3	8.3		+
		III	211	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.6		+
		平均	217	0.0	0.3	0.0	0.3	0.2	8.0	99.4	
温湯処理 MO-1液剤	60℃10分 催芽時300倍 24時間浸漬	I	217	0.5	0.0	0.0	0.5	0.5	8.8		+
		II	216	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.6		+
		III	216	0.0	0.5	0.0	0.5	0.3	11.1		+
		平均	216	0.2	0.2	0.0	0.3	0.3	10.2	99.2	
温湯処理 タフブロック	60℃10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	238	0.0	0.0	1.3	1.3	0.4	3.8		-
		II	242	0.0	0.0	0.4	0.4	0.1	3.3		-
		III	244	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.7		-
		平均	241	0.0	0.0	0.6	0.6	0.2	4.3	99.4	
温湯処理 エコホープDJ	60℃10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	234	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.5		-
		II	227	0.4	0.4	0.0	0.9	0.7	8.4		-
		III	234	1.3	0.0	0.0	1.3	1.3	10.3		-
		平均	232	0.6	0.1	0.0	0.7	0.7	9.1	98.0	
テクリードC フロアブル	浸種前200倍 24時間浸漬	I	261	14.9	33.0	23.4	71.3	44.7	1.1		-
		II	257	23.3	16.3	8.6	48.2	37.1	1.9		-
		III	270	0.4	0.0	0.0	0.4	0.4	1.9		-
		平均	263	12.9	16.4	10.6	40.0	27.4	1.6	23.2	
モミガードC 水和剤	浸種前200倍 24時間浸漬	I	269	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3		-
		II	265	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3		-
		III	272	2.2	18.0	1.5	21.7	14.7	3.3		-
		平均	269	0.7	6.0	0.5	7.2	4.9	3.0	86.3	
無処理		I	227	27.8	52.0	4.0	83.7	63.7	2.6		
		II	251	7.2	20.3	0.4	27.9	20.8	4.4		
		III	229	8.3	21.4	0.4	30.1	22.7	2.6		
		平均	236	14.4	31.2	1.6	47.2	35.7	3.2		

対象病害の発生状況：中、区制・面積：1区育苗箱の1/12大プラスチックカップ3反復、播種量：8g/区、温湯処理および浸種前処理：11月1日15℃24時間、浸種：11月2日～6日15℃、催芽：11月6～7日35℃24時間、播種：11月7日、出芽：11月7～9日35℃、以降はガラスハウスで通常管理 調査：12月3,4日(播種26、27日後) 葉害は随時肉眼で観察し、対照剤または無処理と出芽数を比較した。健全苗の内、苗丈が平均より1/3未満の苗を生育不良苗として調査した。

表6 温湯処理 60°C10分と各剤の単用および体系処理のもみ枯細菌病に対する効果

供試薬剤	処理方法	反復	苗立数 (本)	発病苗率(%)				発病度	防除価	葉害
				枯死苗率	重症苗率	軽症苗率	計			
温湯処理	60°C10分	I	417	0.7	0.5	0.2	1.4	1.1	-	
		II	400	0.8	0.5	0.3	1.6	1.2	-	
		III	403	3.0	0.5	2.5	6.0	4.1	-	
		IV	408	0.2	0.0	0.0	0.2	0.2	-	
		V	408	0.7	0.5	0.2	1.4	1.1	-	
		平均	407	1.1	0.4	0.6	2.1	1.5	87.3	
エコフィット	催芽時100倍 24時間浸漬	I	425	2.4	1.2	0.9	4.5	3.5	-	
		II	405	0.0	0.5	0.2	0.7	0.4	-	
		III	407	0.2	0.2	0.0	0.4	0.4	-	
		IV	398	5.5	4.3	19.8	29.6	15.0	-	
		V	412	0.5	3.6	5.3	9.4	4.7	-	
		平均	412	1.7	2.0	5.2	8.9	4.8	59.3	
エコホープDJ	催芽時200倍 24時間浸漬	I	415	0.0	0.2	0.0	0.2	0.2	-	
		II	403	0.2	0.5	0.0	0.7	0.6	-	
		III	405	0.2	0.2	0.2	0.6	0.5	-	
		IV	402	0.2	0.0	0.0	0.2	0.2	-	
		V	418	1.4	0.7	1.0	3.1	2.2	-	
		平均	408	0.4	0.3	0.2	1.0	0.7	94.1	
温湯処理 エコフィット	60°C10分 催芽時100倍 24時間浸漬	I	404	1.2	0.2	0.0	1.4	1.4	-	
		II	380	0.5	0.0	0.3	0.8	0.6	-	
		III	404	0.2	0.5	0.7	1.4	0.8	-	
		IV	399	0.5	0.3	0.3	1.1	0.8	-	
		V	406	0.7	0.2	0.0	0.9	0.9	-	
		平均	396	0.6	0.2	0.3	1.1	0.9	92.4	
温湯処理 エコホープDJ	60°C10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	402	0.0	0.2	0.2	0.4	0.2	-	
		II	410	0.0	1.0	0.0	1.0	0.7	-	
		III	393	0.3	0.5	0.0	0.8	0.6	-	
		IV	396	0.0	0.8	0.0	0.8	0.5	-	
		V	405	0.5	0.2	0.0	0.7	0.7	-	
		平均	402	0.2	0.5	0.0	0.7	0.5	95.8	
無処理		I	401	5.0	7.0	3.0	15.0	10.6	-	
		II	385	9.9	16.1	6.8	32.8	22.9	-	
		III	407	3.4	4.9	3.7	12.0	7.9	-	
		IV	422	4.7	5.0	5.7	15.4	10.0	-	
		V	415	4.6	3.1	3.4	11.1	7.8	-	
		平均	398	5.5	7.2	4.5	17.3	11.8	-	

対象病害の発生状況：少、区制・面積：1区育苗箱の1/12大プラスチックカップ5反復、播種量：12g/区、温湯処理および浸種前処理：4月10日15°C24時間、浸種：4月11日～16日15°C、催芽：4月16～17日32°C24時間、播種：4月17日、出芽：4月17日～19日32°C、緑化4月19～20日28°C、以降はガラスハウスで通常管理 調査：5月8日（播種21日後）調査基準を重症苗（罹病苗のうち草丈が健全苗の1/2未満）、軽症苗（罹病苗のうち草丈が健全苗の1/2以上）とした。

表7 温湯処理 60°C10分と各剤の単用および体系処理の苗いもちに対する効果

供試薬剤	処理方法	反復	苗立数 (本)	発病苗率 (%)			防除価	薬害
				枯死苗率	病斑形成苗率	計		
温湯処理	60°C10分	I	458	0.0	0.0	0.0	80.0	-
		II	455	0.2	1.3	1.5		-
		III	427	0.2	0.7	0.9		-
		平均	447	0.1	0.7	0.8		-
エコフィット	催芽時100倍 24時間浸漬	I	459	0.0	0.2	0.2	85.0	-
		II	450	0.0	0.7	0.7		-
		III	460	0.0	0.9	0.9		-
		平均	456	0.0	0.6	0.6		-
MO-1液剤	催芽時300倍 24時間浸漬	I	463	0.0	0.0	0.0	90.0	-
		II	436	0.0	0.2	0.2		-
		III	457	0.0	1.1	1.1		-
		平均	452	0.0	0.4	0.4		-
タフブロック	催芽時200倍 24時間浸漬	I	461	0.0	0.0	0.0	90.0	-
		II	454	0.4	0.9	1.3		-
		III	445	0.0	0.0	0.0		-
		平均	453	0.1	0.3	0.4		-
エコホープDJ	催芽時200倍 24時間浸漬	I	452	0.0	0.7	0.7	87.5	-
		II	452	0.2	0.0	0.2		-
		III	446	0.0	0.7	0.7		-
		平均	450	0.1	0.5	0.5		-
温湯処理 エコフィット	60°C10分 催芽時100倍 24時間浸漬	I	446	0.0	0.0	0.0	97.5	-
		II	462	0.0	0.2	0.2		-
		III	456	0.0	0.0	0.0		-
		平均	455	0.0	0.1	0.1		-
温湯処理 MO-1液剤	60°C10分 催芽時300倍 24時間浸漬	I	463	0.0	0.0	0.0	100.0	-
		II	459	0.0	0.0	0.0		-
		III	472	0.0	0.0	0.0		-
		平均	465	0.0	0.0	0.0		-
温湯処理 タフブロック	60°C10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	452	0.0	0.0	0.0	97.5	-
		II	462	0.0	0.0	0.0		-
		III	444	0.0	0.2	0.2		-
		平均	453	0.0	0.1	0.1		-
温湯処理 エコホープDJ	60°C10分 催芽時200倍 24時間浸漬	I	450	0.0	0.0	0.0	100.0	-
		II	450	0.0	0.0	0.0		-
		III	426	0.0	0.0	0.0		-
		平均	442	0.0	0.0	0.0		-
テクリードC フロアブル	浸種前200倍 24時間浸漬	I	453	0.0	0.2	0.2	97.5	-
		II	462	0.0	0.0	0.0		-
		III	470	0.0	0.2	0.2		-
		平均	462	0.0	0.1	0.1		-
モミガードC 水和剤	浸種前200倍 24時間浸漬	I	465	0.2	0.2	0.4	95.0	-
		II	469	0.0	0.2	0.2		-
		III	459	0.0	0.0	0.0		-
		平均	464	0.1	0.1	0.2		-
無処理		I	449	2.4	2.4	4.8		-
		II	449	2.0	0.7	2.7		-
		III	455	2.4	2.0	4.4		-
		平均	451	2.3	1.7	4.0		-

対象病害の発生状況：少、温湯処理および浸種前処理：11月18日15°C24時間、浸種：11月19日～21日15°C、催芽：11月21～22日25°C24時間、播種：11月22日、出芽：11月22～25日35°C、緑化：11月25～28日25°C、以降はガラスハウスで通常管理 調査：12月17日（播種25日後） 薬害は随時肉眼で観察した。

4. 考察

ばか苗病、もみ枯細菌病、苗いもちに対して少～中発生の条件ではあるが、各処理の単用は一定の防除効果を示した。また、温湯処理と体系処理することで高い防除効果が得られる傾向であった。単用の比較では、エコフィット、M0-1 液剤はタフブロック、エコホープ DJ よりやや効果が劣る傾向であった。しかし、これらの資材は微生物資材の 1/10 以下の価格で同量の種子に処理できるため、コスト的なメリットがある（今回の使用方法の比較）。

もみ枯細菌病の試験では、エコフィット単用、エコフィットまたは M0-1 液剤と温湯処理の体系で出芽数の減少、生育不良苗の増加が認められた。この要因として、充実不足の保菌糶を 30%混和して使用していること、催芽・出芽温度が 35℃と高温なこと、育苗期間中低温で経過したこと（データなし）が考えられる。ばか苗病、苗いもちの試験では薬害は認められなかったことから実用的には問題ないと思われるが、充実不足の種子の使用や育苗環境（極端な高温や低温）によっては薬害に注意が必要である。

ばか苗病は、育苗期間は潜在的に感染して本田で発病する場合は考えられるため、潜伏感染のリスクを含めて防除効果を評価する必要がある。今回試験した資材はエコフィット、M0-1 液剤は表面殺菌、タフブロック、エコホープ DJ は拮抗微生物による発病抑制が主な作用機作のため、潜伏感染のリスクを有すると思われる。

5. 今後の課題

各病害について多発生条件での体系処理の防除効果の検証

ばか苗病の潜伏感染のリスクを含めた防除効果の検証

軽量培土や他の新規資材と組み合わせた場合の防除効果の検証

6. 要約

ばか苗病、もみ枯細菌病、苗いもちに対して温湯処理と催芽時処理の各資材を体系処理することで高い防除効果が得られる傾向であった。充実不足の種子の使用や育苗環境（極端な高温や低温）によっては薬害に注意が必要である。今後、潜伏感染のリスクを含めて防除効果を評価する必要がある。

7. 成果の公表及び特許

特になし

ダイズ害虫のウコンノメイガに対する フェロモンを用いた発生予察技術の確立（1）

氏名：渋谷和樹、遠藤信幸、竹内博昭

所属：農研機構中央農業研究センター北陸研究拠点

[〒943-0193 新潟県上越市稲田1-2-1]

1. 調査背景と目的

多くの害虫種において、合成フェロモンを用いた発生予察が行われている。ウコンノメイガのフェロモン成分はすでに解明されているが、従来のSEトラップでは捕獲効率が悪いことから、発生予察には利用されていない。昨年度の予備試験より、トラップの形状を変えることで本種の捕獲効率が改善される可能性が示された。本年度はトラップ形状および設置条件を検討して捕獲効率を最適化するとともに、発生予察への利用法を検討する。

2. 調査方法

1) 捕獲効率を最適化するためのフェロモントラップの形状および設置法の検討

①SEトラップと透明コーントラップの比較

試験圃場の概要

場所	品種	面積	播種日	畝間間隔	防除
北陸拠点A	エンレイ	7.1 a	5月29日	75 cm	無防除
北陸拠点B	エンレイ	7.8 a	5月29日	75 cm	無防除

調査内容

各圃場内部にSEトラップ（サンケイ化学）と透明コーントラップ（円錐部：硬質塩ビ板、捕獲容器：ポリプロピレン樹脂）を設置し、トラップ種類による成虫捕獲数の違いを調査した。誘引源として、(E)-10-hexadecenal と (Z)-10-hexadecenal の 84:16 混合液 1.0 mg をゴムセプタムに含浸させたものを用いた（信越化学工業製）。トラップ間の距離は 10 m とし、トラップ底面がダイズ草冠高マイナス 10 cm となるように設置した。3 日ごとにトラップ位置の入れ替えおよびトラップ設置高の調整を行った。トラップを 7 月 6 日に設置し、8 月 2 日まで成虫捕獲数を毎日調査した。

1) ②透明コーントラップ設置高検討

試験圃場の概要

場所	品種	面積	播種日	畝間間隔	防除
上越市頸城区	里のほほえみ	82 a	6月3～6日	75 cm	プレバソンプレアブル5 (7月27～30日)

調査内容

圃場を3ブロックに分けて試験を行った。それぞれのブロックに透明コーントラップを5段階の異なる高さで設置し、成虫捕獲数の違いを調査した。設置高はトラップ底面が畝から10、30、50 cm、ダイズ草冠高マイナス10 cm、草冠高プラス10 cmとなる高さとした。トラップ間距離は15 mとした。2～4日ごとにトラップ高さの調整および捕獲数を調査し、週1回トラップ位置をランダムに入れ替えた。トラップを7月11日に設置し、8月3日まで調査した。

2) フェロモントラップの発生予察への利用法の検討

試験圃場の概要

場所	品種	面積	播種日	開花日	畝間間隔	防除
北陸拠点C	里のほほえみ	7.1 a	5月30日	7月21日	75 cm	無防除
北陸拠点D	里のほほえみ	7.1 a	5月30日	7月21日	75 cm	無防除
北陸拠点E	エンレイ	10 a	5月30日	7月17日	75 cm	無防除

調査内容

圃場中央に透明コーントラップを畝から30 cmの高さで設置し、捕獲数を毎日調査した。加えて週一回、葉巻数調査と叩き出しによる成虫数調査を実施した。葉巻数については平均的な生育地点4か所を調査地点とし、一か所につき畝2 mの範囲にある葉巻数を数えた。叩き出しについては、畝間を100 m歩きながら両側の畝のダイズ草冠を棒でたたき、出てきた成虫の数を数えた。

3. 調査結果

- 1) ① 一日当たりの平均捕獲数は、SEトラップで0.074頭、透明コーントラップで1.87頭だった(図1)。捕獲数を応答変数、トラップ種類を説明変数、圃場と調査日を変量効果として一般化線形混合モデル(GLMM)で解析した結果、透明コーントラップの捕獲数はSEトラップの約25倍と推定された(表1)。

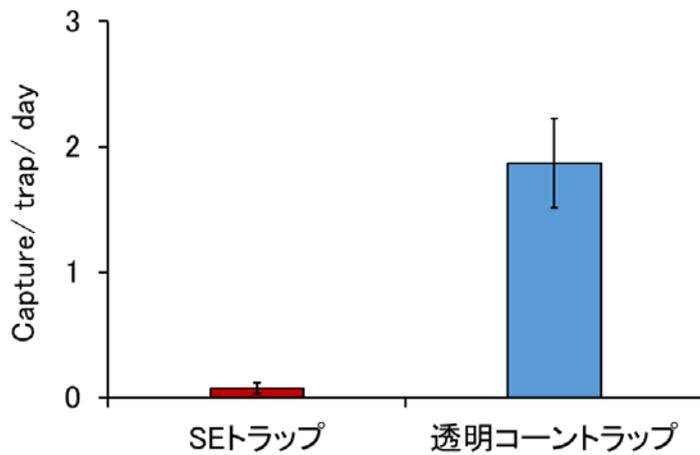


図1 トラップ種類によるウコンノメイガ捕獲数の違い

応答変数	説明変数	Estimate	Std. Error	Z value	Pr (> z)
捕獲数	切片	-3.1588	0.6839	-4.619	3.86e-06
	<u>コーントラップ</u>	3.2288	0.4821	6.697	<u>2.13e-11</u>

表1 一般化線形混合モデルによる解析結果

1) ② 捕獲数と草冠高の消長を図2に示す。草冠高マイナス10 cmと30 cmは類似した消長を示し、7月17日から24日の捕獲数が多かった。この期間における総捕獲数は草冠高マイナス10 cmで11.3頭、30 cmで7.67頭だった(3ブロックの平均)。50 cmについては、7月20日までは捕獲数が少なく、草冠高が60 cm以上となった7月24日に捕獲数がやや多くなった。10 cm、草冠高プラス10 cmは調査期間を通して捕獲数が少なく、明瞭なピークは見られなかった。

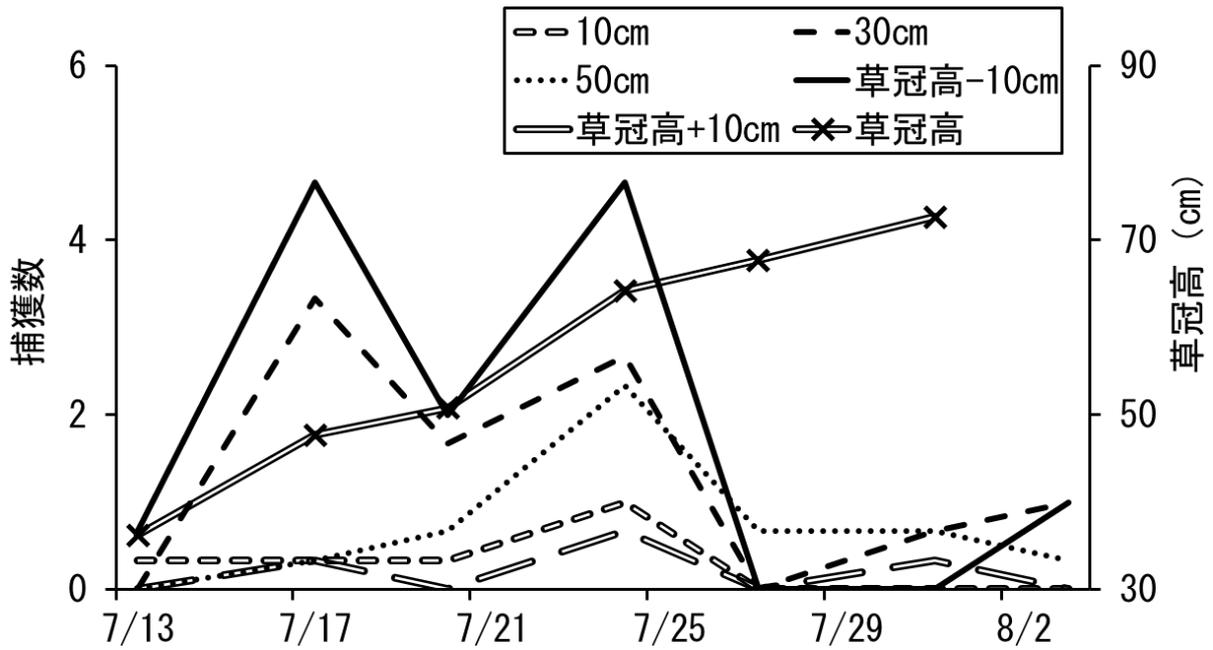


図2 設置高による捕獲数の違い (3ブロックの平均)

2) トラップ捕獲数、葉巻数、叩き出し数の消長を図3, 4, 5に示す。トラップ捕獲数の初発は圃場Cが7月11日、Dが7月15日、Eが7月9日だった。誘殺ピークは7月19~26だった。葉巻の初発はいずれの圃場も7月17日、ピークは8月13~20日だった。叩き出しの初発は圃場Cが7月17日、DとEは8月7日だった。

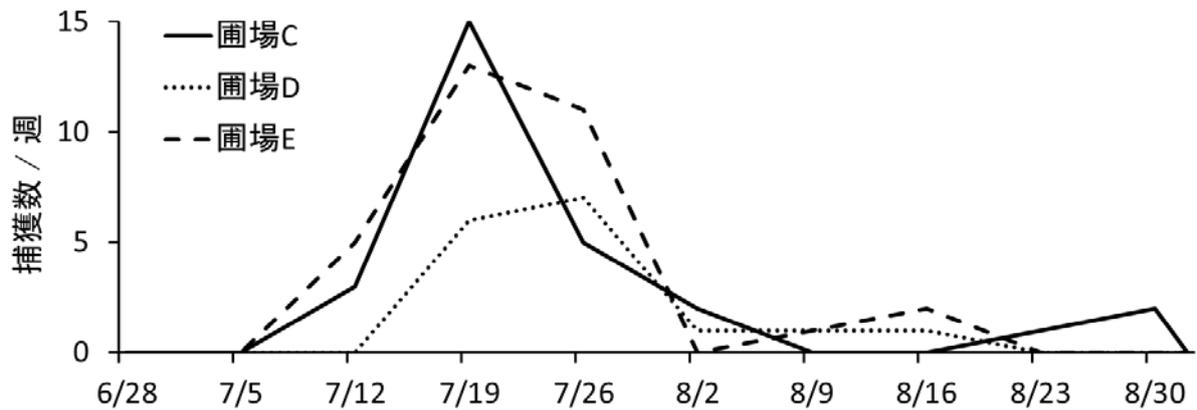


図3 透明コーントラップで捕獲した成虫の消長

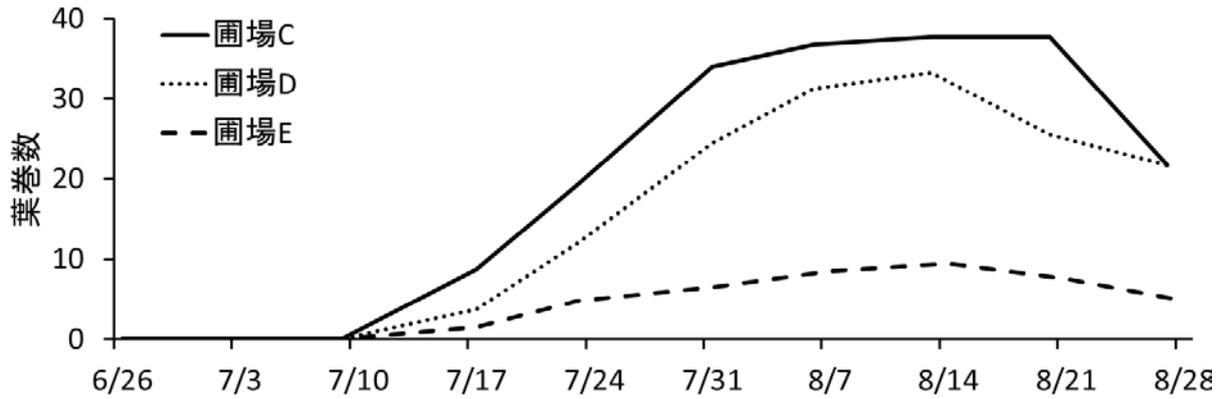


図4 葉巻数の消長

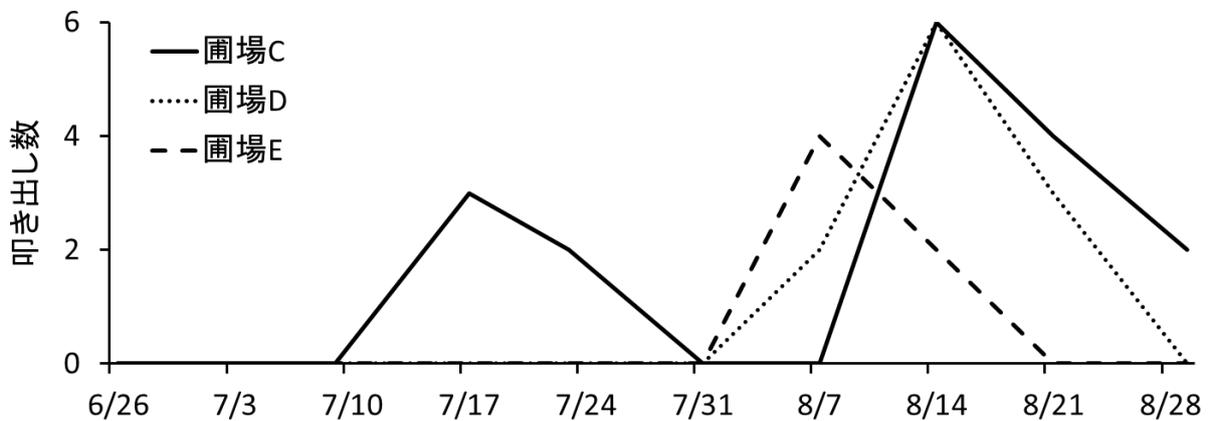


図5 叩き出し数の消長

4. 考察

1) ①より、透明コイントラップで多くの成虫を捕獲できることが明らかになり、本種の発生予察に適することが示された。

1) ②より、草冠高プラス 10 cm で捕獲数が少なかったことから、トラップが草冠高より高いと本種の捕獲効率が低くなることが示された。50 cm についても、7 月前半はトラップが草冠高よりも高かったため、その期間の捕獲数が少なかったと考えられる。また、10 cm で捕獲数が少なかったことから、草冠高より低すぎる、または地面に近すぎても本種を捕獲できないと考えられる。

草冠高マイナス 10 cm は越冬世代とみられる成虫を最も多く捕獲しており、発生予察に適した設置高と考えられる。しかし、定期的に設置高を調整する手間がかかるため、現場では設置高を固定して成虫の発生をとらえるほうが便利である。高さを固定した条件の 10、30、50 cm のうち、30 cm のみが草冠高マイナス 10 cm と似た消長を示し、捕獲数も草冠高マイナス 10 cm に次いで多かった。このことから、30 cm 固定でも発生予察に利用できる可能性が示された。しかし前述のようにトラップ高さと草冠高との関係が捕獲数に影響することが考えられるので、成虫発生時期やダイズ生育の

年次間差を考慮する必要がある。

2) より、トラップでは7月中下旬ごろに越冬世代とみられる多くの成虫が捕獲され、トラップ初発日の数日後から葉巻が確認された。叩き出し数はトラップ捕獲数より少なく、初発日もトラップや葉巻の初発より遅れる傾向にあった。3圃場ともピーク時の葉巻数は2 mあたり40個以下という小発生条件であったため、叩き出しでは消長を明確にとらえられなかった可能性がある。フェロモントラップはこのような小発生圃場でも成虫の発生活消長を明確にとらえることができ、発生予察に有効だと考えられた。

5. 今後の課題

トラップ設置位置の検討、捕獲数と葉巻数の関連を継続して調査

6. 要約

透明コーントラップは従来の SE トラップに比べ、ウコンノメイガ成虫を多く捕獲できることが明らかになった。また、小発生条件においても成虫の消長を明確にとらえることができ、本種の発生予察に有効なトラップだと考えられた。設置高は草冠高マイナス10 cmが最も捕獲数が多いが、30 cm固定でも発生予察に利用できる可能性が示された。

7. 成果の公表及び特許

北陸病害虫研究会および日本応用動物昆虫学会で発表予定

ダイズ害虫のウコンノメイガに対するフェロモンを用いた 発生予察技術の確立（2）

氏名 岩田 大介、石本 万寿広

所属 新潟県農業総合研究所作物研究センター

[〒940-0826 住所 新潟県長岡市長倉町 857]

1. 調査背景と目的

ウコンノメイガのフェロモン成分はすでに解明され、合成物による試験が行われてきたが、従来のSEトラップでは捕獲効率が悪いことから、発生予察には利用されていない。近年トラップの形状をSE型から透明コーン型にすることで、合成フェロモントラップへの捕獲効率が改善することが明らかとなった（渋谷ら、2018）。そこで本課題では、透明コーン型のフェロモントラップを用いたウコンノメイガに対する発生予察技術の開発を目的とする。

2. 調査方法

1) フェロモントラップ調査

新潟県内の2地区（A地区、B地区）合計12圃場にフェロモンルアーを取り付けた透明コーン型のトラップを圃場中央部に設置し、6月第5半旬から8月第2半旬まで原則1週間間隔で誘殺数を調査した。設置高（畝上面からトラップ底面までの距離）は30cmで固定した。

2) 叩き出し調査

フェロモントラップ調査圃場で6月第6半旬から8月第2半旬まで原則1週間間隔で、歩く距離が100mになるまで畝間を歩きながら両脇の畝の大豆草冠を叩き、飛び出した成虫を計数した。

3) 幼虫、卵、蛹調査

フェロモントラップ調査圃場の中から1地区当たり2圃場を抽出し、7月第1半旬から8月第1半旬まで原則1週間間隔で、1圃場当たり10株を抜き取って卵、幼虫、蛹数を調査した。

4) 被害葉(葉巻)調査

フェロモントラップ調査圃場で、7月第2半旬から8月第2半旬と、葉巻の数が最も多くなる8月第5半旬に、畝2mの範囲にある大豆の葉巻数を計数した。

3. 調査結果

1) 成虫のモニタリングにおけるフェロモントラップの有効性

- ・フェロモントラップ誘殺数の推移は、叩き出し調査による成虫数の推移と良く一致した(図1)。
- ・A地区ではフェロモントラップ誘殺数と叩き出し成虫数の間に正の相関関係が見られた(図2)。

2) フェロモントラップ誘殺数と卵、幼虫、葉巻数の関係

- ・フェロモントラップ誘殺数の推移は卵の発生推移と概ね一致し、フェロモントラップ誘殺数のピークは7月第3～第4半旬、卵のピークは7月第4半旬であった(図3)

- ・フェロモントラップ総誘殺数と最多発生時の葉巻数の間に正の相関関係が認められた(図4)。

表 フェロモントラップ誘殺数と叩き出しによる成虫の発生状況

地区	圃場数	フェロモン トラップ 総誘殺数		叩き出し 成虫数	
		平均値 (レンジ)	平均値 (レンジ)		
A地区	6	107.5 (25-185)	4.2 (1-13)		
B地区	6	6.25 (1-13)	0.5 (0-1)		

注) 叩き出し成虫数は、A地区では8回、B地区では7回調査の合計値

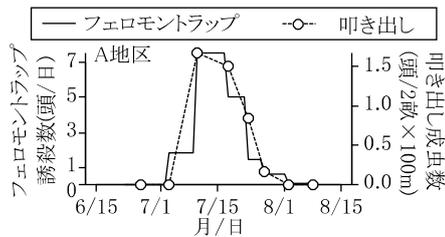


図1 フェロモントラップ誘殺数と叩き出し成虫数の推移
注) 値は6圃場の平均値

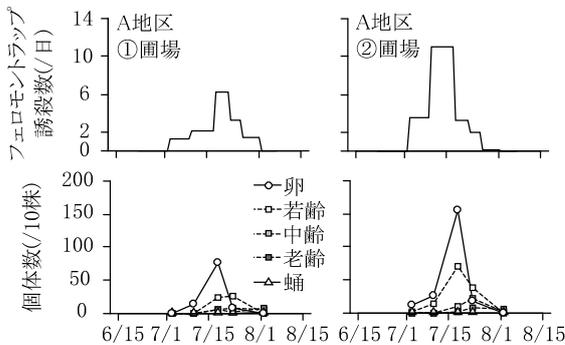


図3 フェロモントラップ誘殺数と卵、幼虫、蛹の発生推移

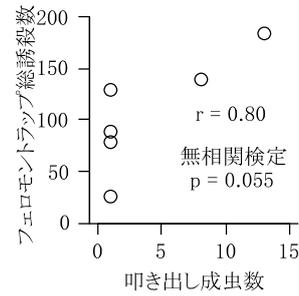


図2 叩き出し成虫数とフェロモントラップ誘殺数との関係(A地区)

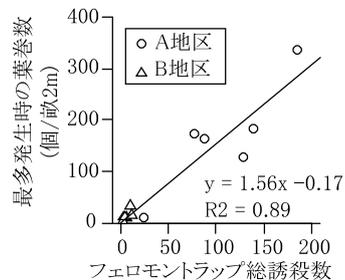


図4 フェロモントラップ誘殺数と最多葉巻数との関係

4. 考察

透明コーン型のトラップを用いたフェロモントラップは、成虫の密度が低い場合でもモニタリングが可能であり、有用性は高いと思われた。また、フェロモントラップ誘殺数から最多発生時の葉巻数を予測できることが示唆された。

5. 今後の課題

- ・フェロモントラップ誘殺数から被害(葉巻数)を予測し、防除要否を判断する技術を開発する。
- ・ウコンノメイガの成虫の発生量や発生時期に影響する要因を明らかにする。

6. 要約

新潟県内の現地圃場(2地区合計12圃場)で透明コーン型のフェロモントラップによる調査と各種調査を行った。透明コーン型のフェロモントラップは、成虫の密度が低い場合でもモニタリングが可能であり、有用性は高いと思われた。フェロモントラップの成虫誘殺数と最多発生時の葉巻数との間に正の相関関係が認められ、フェロモントラップ誘殺数から最多発生時の葉巻数を予測できることが示唆された。

7. 成果の公表及び特許

第63回応用動物昆虫学会で口頭発表予定

ダイズ害虫のウコンノメイガに対する フェロモンを用いた発生予察技術の確立（3）

青木由美、吉島利則

富山県農林水産総合技術センター農業研究所
[〒939-8153 富山県富山市吉岡 1124-1]

1. 調査背景と目的

多くの害虫種において、合成フェロモンを用いた発生予察が行われている。ウコンノメイガのフェロモン成分はすでに解明され、富山県では合成物と SE トラップを用いた試験に基づき要防除水準を設定しているが、トラップへの捕獲効率が低いことなどから発生予察には利用されていない。昨年度の試験でトラップの形状を SE 型から透明コーン型にすることで、合成フェロモントラップへの捕獲効率が高まることが明らかとなった（渋谷ら, 2018）。そこで本課題では、透明コーン型のフェロモントラップを用いたウコンノメイガに対する発生予察技術の開発に向けて、その有効性を評価するとともに、トラップの種類や品種の変更に伴う要防除水準の改定に向けた検討を行う。

2. 調査方法

(1) 透明コーン型のフェロモントラップによる調査および有効性の評価

1) 調査圃場

富山県内の4地区において、「エンレイ」4圃場、新品種「えんれいのそら」10圃場の計14圃場で調査を行った（表1）。

表1 試験圃場の設置状況

地区	品種	圃場数	播種日	開花期	イラクサ科植物群落からの距離(m)
A 朝日町藤塚1	えんれいのそら	2	5月24日	7月14日	2,500-2,600
B 朝日町藤塚2	えんれいのそら	3	5月27~28日	7月16日	1,500-2,500
	エンレイ	2			
C 朝日町高畠	えんれいのそら	3	6月5日	7月21日	3-90
	エンレイ	1			
D 富山市上大久保	えんれいのそら	2	6月2~3日	7月20日	3-110
	エンレイ	1			

注)各地区の調査圃場は単一経営体。条間はすべて80cm。B地区では7月25日にウコンノメイガを対象とした殺虫剤を散布。

2) 調査方法

(ア) 透明コーントラップ調査

畦畔から10m以上離れたダイズ圃場内の畝上に、ウコンノメイガのフェロモン剤を取り付けた透明コーン型のトラップ（以下、コーントラップ）を設置した。設置高は、畝上からコーントラップ底面までの距離が30cmとなるようにし、中耕後は高くなった畝に合わせて設置し直した。フェロモン剤はトラップ円錐内部の針金に取り付け、約1か月後に交換した。また、トラップ上部（捕獲部分）には殺虫プレートを1枚入れ、捕獲虫を殺虫した。コーントラップへの誘殺数は、6月25日から8月28日まで6~8日間隔で調査した。

(イ) たたき出し調査

圃場内で両側の畝のダイズ草冠を直径5mm、長さ1.5mの棒でたたきながら畝間を100m歩き、出てきた成虫数を数えた。調査は、コーントラップ誘殺数の調査日にトラップから離れた畝を任意に選んで行った。また、平均的な生育地点において畝上からの草冠高を測定した。

(ウ) 葉巻数調査

圃場内の平均的な生育地点4か所、各2mを調査地点として固定し、7月3日から8月9日(調査間隔は6~8日)および8月22日に葉巻数を数えた。なお、葉巻の大きさによる区別はしなかった。また、7月24日に調査地点のダイズ本数を数え、1本当たり葉巻数の算出に用いた。

(2) 透明コーン型とSE型のフェロモントラップにおける誘殺数の比較

コーントラップを設置した同一圃場内に、ウコンノメイガのフェロモン剤を取り付けた白色SEトラップを草冠高および畝上10cmの高さに設置した。3種のトラップは10m以上離れた。SEトラップへの誘殺数は、6月25日から8月9日まで6~8日間隔で調査し、粘着板は調査ごとに交換した。フェロモン剤は粘着板の中央に取り付け、調査終了時まで交換しなかった。

(3) 「エンレイ」と「えんれいのそら」における各調査結果の比較

調査(1)の結果を用い、品種別にウコンノメイガのコーントラップ誘殺数、たたき出し成虫数および葉巻数について比較した。

3. 調査結果

調査圃場は、条間が全て80cmで、栽植本数は13.0~15.0本/m²であった。

(1) 透明コーン型のフェロモントラップによる調査および有効性の評価

1) コーントラップ誘殺数、たたき出し成虫数および葉巻数の推移

- ウコンノメイガ成虫の発生量が少なかったC地区を除き、各地区のいずれの圃場においても、コーントラップ誘殺数とたたき出し成虫数の推移はほぼ同調していた(図1)。コーントラップ誘殺数は7月9~24日、たたき出し成虫数は7月9日~8月1日の調査でピークとなった。
- 葉巻数は7月下旬から8月上旬にかけて急激に増加し、8月中下旬に最大となった。殺虫剤を散布したB地区では、葉巻数は少なく推移した。

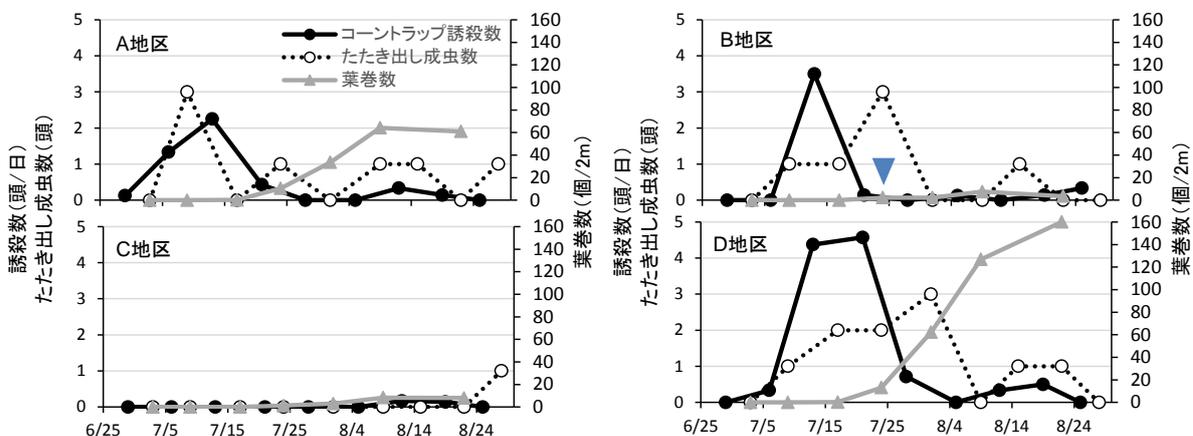


図1 各地区の主な圃場におけるコーントラップ誘殺数、たたき出し成虫数および葉巻数の推移(えんれいのそら)

注) ▼: ウコンノメイガを対象とした殺虫剤散布(B地区)

2) 調査期間におけるたたき出し総成虫数とコントラップ総誘殺数の関係

- ・ 6月25日から8月28日までのたたき出し総成虫数とコントラップ総誘殺数の間に有意な正の相関が認められた (図2)。

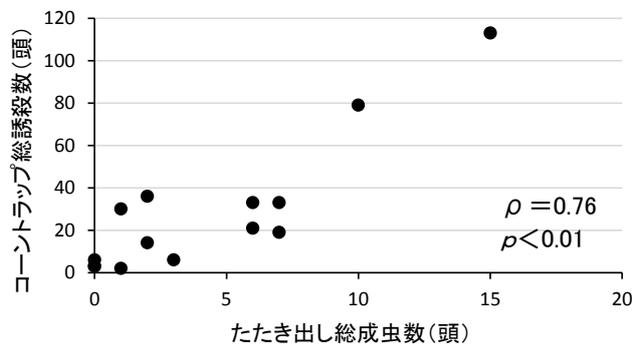


図2 たたき出し総成虫数とコントラップ総誘殺数の関係

注) 調査期間：6月25日～8月28日、 ρ : Spearman の順位相関係数

3) 調査期間別のコントラップ誘殺数と8月下旬の葉巻数の関係

- ・ 調査期間別のコントラップ誘殺数と8月下旬の葉巻数との間に有意な正の相関が認められた (図3)。
- ・ 最も相関が高かった6月25日から7月17日までの調査期間において、主な環境要因がコントラップ誘殺数に及ぼす影響をみたところ、イラクサ科植物群落からの距離と誘殺数との間に相関が認められなかったが、播種日および7月17日の草冠高と誘殺数との間に有意な相関関係が認められた (図4)。

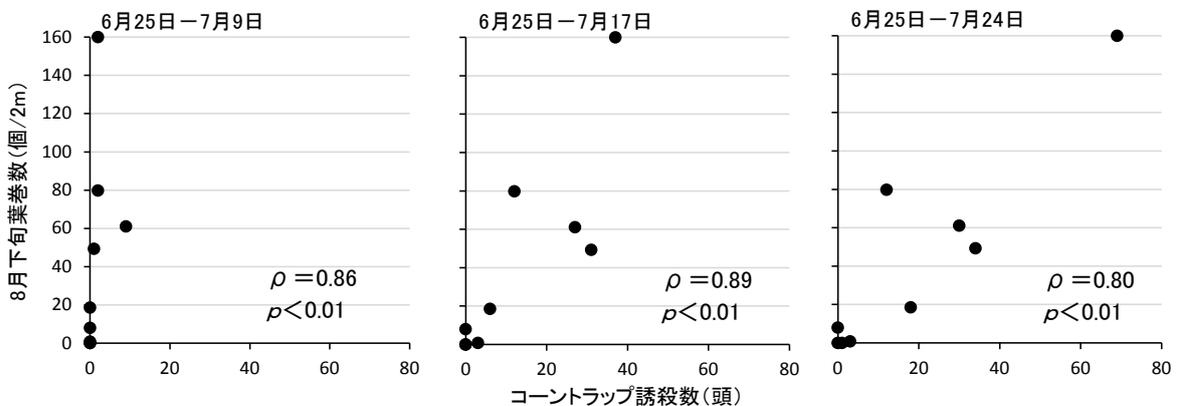


図3 調査期間別のコントラップ誘殺数と8月下旬の葉巻数の関係

注) B地区 (殺虫剤散布) を除く。 ρ : Spearman の順位相関係数

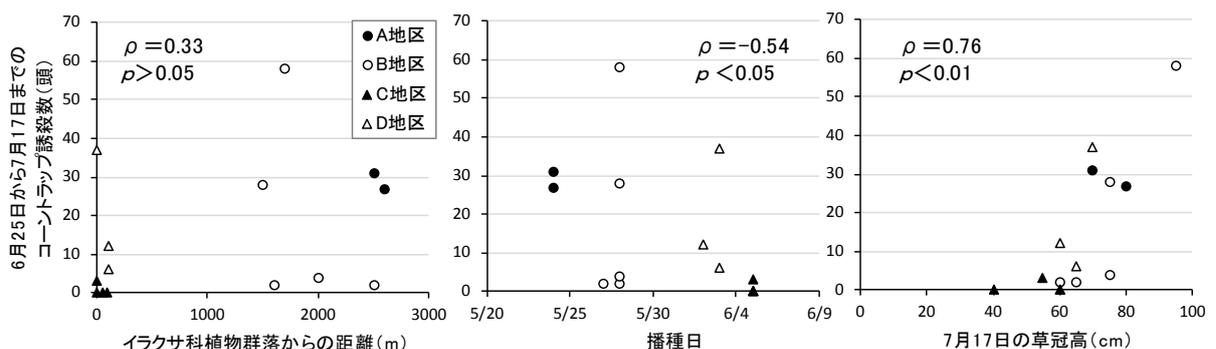


図4 主な環境要因と6月25日から7月17日までのコントラップ誘殺数の関係

注) ρ : Spearman の順位相関係数

4) フェロモントラップに混入した非標的チョウ目昆虫

- ・コーントラップには、ウコンノメイガ成虫の他、非標的チョウ目昆虫の混入が認められた。主なチョウ目昆虫は、開張23mm前後で翅に黒点模様があり、模様の大さやにじみ、ラビアル・パルプス上方が黒褐色であったことから、モモノゴマダラノメイガと同定された(図5、6)。



図6 透明コーン型フェロモントラップに誘引されたチョウ目昆虫
(左) モモノゴマダラノメイガ
(右) ウコンノメイガ

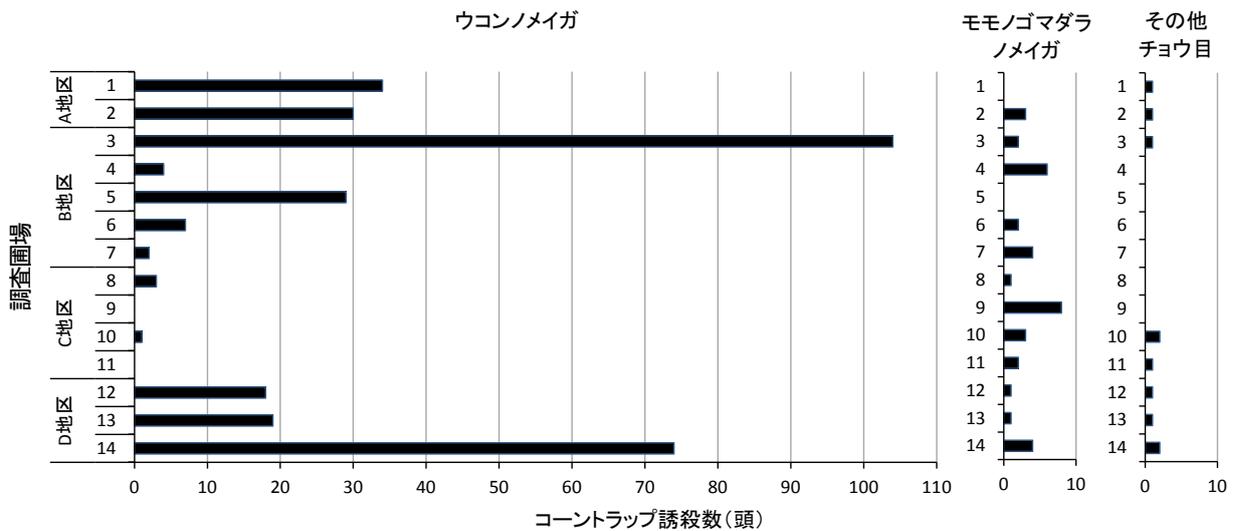


図5 コーントラップに誘殺されたチョウ目昆虫の成虫数
注) 6月25日から8月1日の誘殺数

(2) 透明コーン型とSE型のフェロモントラップにおける誘殺数の比較

- ・たたき出し成虫数と各種トラップ誘殺数との間に有意な正の相関が認められ、特にコーントラップ誘殺数との相関が高かった(図7)。
- ・調査期間1日当たり誘殺数に基づき算出した各種トラップにおける調査期間別誘殺数と8月下旬の葉巻数との間で回帰分析を行った(表2)。7月1-3半旬の調査期間では、草冠高に設置したSEトラップ誘殺数と葉巻数との間に関係が認められなかったが、7月1-4半旬では、いずれのトラップ誘殺数においても有意な正の直線関係が認められた。

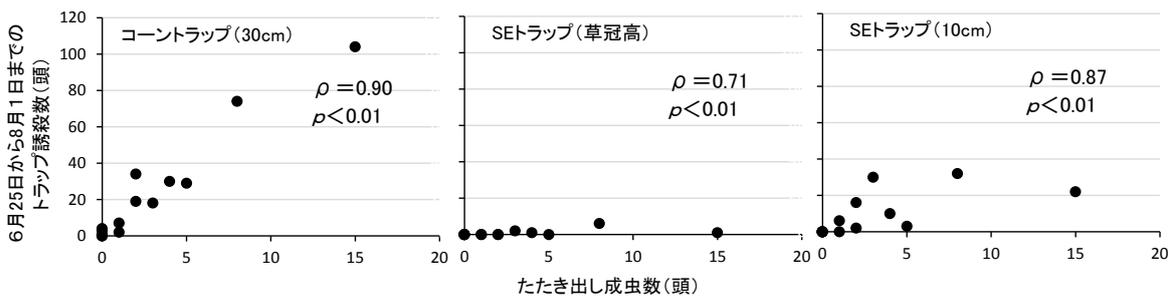


図7 たたき出し成虫数と各種トラップ誘殺数の関係

注) 調査期間：6月25日～8月1日、 ρ : Spearmanの順位相関係数

表2 各種トラップにおける調査期間別誘殺数と8月下旬の葉巻数の関係^{注1)}

誘殺期間	トラップの種類	設置高	回帰式 (y:8月下旬の葉巻数,x:トラップ誘殺数)	葉巻数20個/本 ^{注2)} となる誘殺数(頭)	葉巻数1個/本増加に 必要な誘殺数(頭)
7月1-3半旬	コーン	30cm	$y=0.1773x+0.1033$ ($R^2=0.73, p<0.01$)	112.2	5.64
	SE	草冠高	$y=4.4279x+1.0130$ ($R^2=0.54, p>0.05$)	4.3	0.23
	SE	10cm	$y=0.3463x+0.8639$ ($R^2=0.25, p<0.05$)	55.3	2.89
7月1-4半旬	コーン	30cm	$y=0.1199x+0.0464$ ($R^2=0.82, p<0.001$)	166.4	8.34
	SE	草冠高	$y=2.8535x+0.6963$ ($R^2=0.89, p<0.001$)	6.8	0.35
	SE	10cm	$y=0.3794x+0.1156$ ($R^2=0.69, p<0.01$)	52.4	2.64

注1) B地区(殺虫剤散布)を除く

注2) 8月下旬の葉巻数に基づく被害許容水準の目安(H16富山県成果情報)

(3) 「エンレイ」と「えんれいのそら」における各調査結果の比較

- ・各地区のコーントラップ誘殺数、たたき出し成虫数および葉巻数の推移は、「エンレイ」圃場(図8)と「えんれいのそら」圃場(図1)とではほぼ同様であった(「エンレイ」のないA地区を除く)。
- ・たたき出し総成虫数とコーントラップ総誘殺数(図9)およびコーントラップ誘殺数と8月下旬の葉巻数(図10)との間に、品種間で明らかな差は認められなかった。

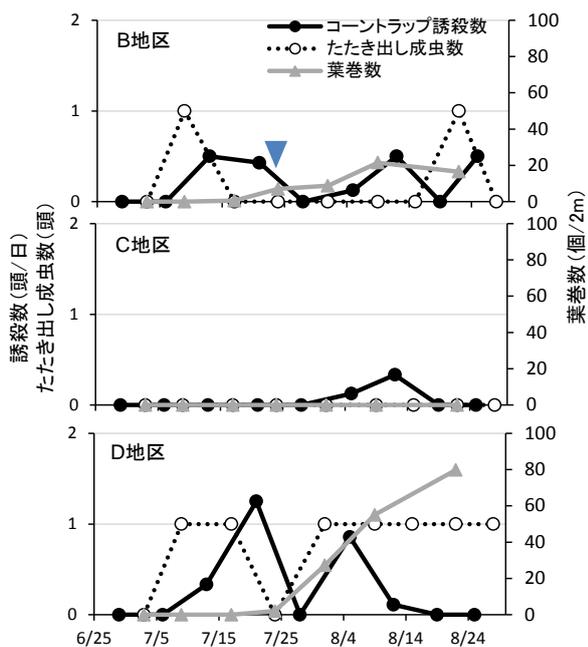


図8 各地区の主な圃場におけるコーントラップ誘殺数、たたき出し成虫数および葉巻数の推移(エンレイ)
注) ▼: ウコンノメイガを対象とした殺虫剤散布(B地区)

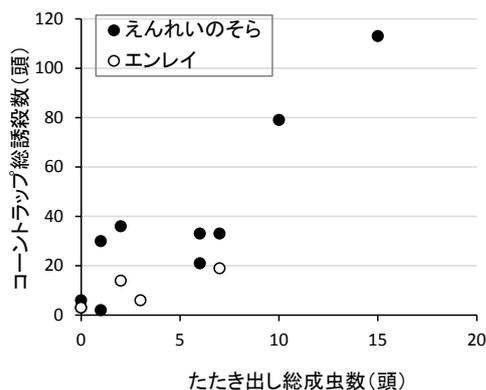


図9 たたき出し総成虫数とコーントラップ総誘殺数(図2を改変)
注) 調査期間: 6月25日~8月28日

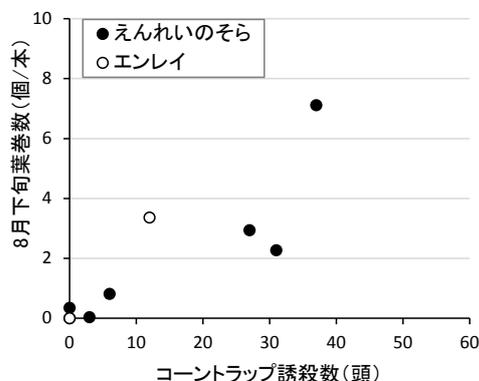


図10 コーントラップ誘殺数と8月下旬の葉巻数(図3の一部を改変)
注) B地区(殺虫剤散布)を除く
調査期間: 6月25日~7月17日

4. 考察

- ・ダイズ圃場に飛来する越冬世代のウコンノメイガ成虫数をコーントラップにより調査した結果、従来のたたき出し調査の結果とほぼ同調した推移を示し、調査も簡便であった。富山県では、次世代幼虫により作られる葉巻数と収量・品質との関係から、被害許容水準の目安を「8月下旬のダイズ1本当たり平均葉巻数20個」、防除要否判断基準を「7月6半旬のダイズ1本当たり平均葉巻数6個」としているが（H16 富山県成果情報）、コーントラップを用いた場合、7月中旬までの誘殺数と葉巻数との間に有意な正の相関が認められたことから、現在の防除要否判断時期である「7月6半旬」よりも早期かつ葉巻数調査を行わずに判定できると考えられる。
- ・コーントラップにはウコンノメイガ以外のチョウ目昆虫の混入が認められたが、ウコンノメイガ成虫の大きさに比べて小さく、斑紋の有無などで容易に識別できることから、発生予察技術への利用にあたり問題はないと考えられる。
- ・富山県ではウコンノメイガの合成フェロモンおよび草冠高に設置した SE トラップを用いた防除要否判断基準を「7月1-4半旬の誘殺数15頭」としていることから（H22 富山県成果情報）、SEトラップとコーントラップの誘殺数を比較したところ、コーントラップの誘殺効率が極めて高かった。草冠高に設置した SE トラップへの7月1-4半旬の誘殺数は、最も多い調査圃場でも2.3頭と少なかったことから、コーントラップを用いた場合の防除要否判断基準を「SEトラップ誘殺数15頭」からではなく、被害許容水準の目安である「8月下旬の葉巻数20個」を用いて予測したところ、「コーントラップ誘殺数166頭」であった。また、7月1-3半旬のコーントラップ誘殺数に基づく防除要否の判断も可能であると考えられた。
- ・今回の調査では、「エンレイ」と「えんれいのそら」におけるウコンノメイガ誘殺数や葉巻数などの推移に明らかな差は認められず、コーントラップ誘殺数に影響を及ぼす要因としてダイズの草冠高との関係が高いことが示唆された。同一地区内でも草冠高が高い圃場でウコンノメイガの発生リスクが高くなることが予想されることから、地区内の発生予察や防除要否判断を行う際のトラップの設置条件として、ダイズの草冠高などの生育量を考慮する必要があると考えられる。

5. 今後の課題

- ・「えんれいのそら」のコーントラップを用いたウコンノメイガの防除要否判断基準の策定
- ・ダイズの生育量とウコンノメイガ成虫の発生量との関係について検討

6. 要約

- ・透明コーン型トラップ調査は、従来のたたき出し調査法より簡便で SE トラップより誘殺効率が高いことから、8月下旬の葉巻数との関係に基づき、早期かつ簡便に防除要否の判断ができる。

7. 成果の公表及び特許

結果の一部を第71回北陸病害虫研究会にて口頭発表（予定）。

ダイズ害虫のウコンノメイガに対する フェロモンを用いた発生予察技術の確立（4）

八尾充睦、渡邊照之

石川県農林総合研究センター

[〒920-3198 石川県金沢市才田町戊 295-1]

1. 調査背景と目的

多くの害虫種において、合成フェロモンを用いた発生予察が行われている。ウコンノメイガではフェロモン成分が解明され、合成物による試験も行われてきたが、従来の SE トラップの捕獲効率が低いことから、発生予察には利用されてこなかった。しかし、トラップの形状を SE 型から透明コーン型にすることで、合成フェロモントラップへの捕獲効率は改善することが明らかとなった（渋谷ら, 2018）。そこで本課題では、透明コーン型のフェロモントラップを用いたウコンノメイガに対する発生予察技術の開発を目的とする。

2. 調査方法

1) 調査場所・耕種概要：下表のとおり。なお施肥等の・栽培管理は現地慣行に準じた

No.	調査圃場	大豆品種	播種日	栽植密度	開花期	殺虫剤散布日
1	加賀市加茂 1	里のほほえみ	6/11	23.3 本 /m ²	7/24	7/27、8/13、8/30
2	加賀市加茂 2	里のほほえみ	6/ 8	22.7 本 /m ²	7/31	7/27、8/13、8/30
3	小松市長田 1	里のほほえみ	6/ 2	28.4 本 /m ²	7/24	7/27、8/11、8/31
4	小松市長田 2	里のほほえみ	6/ 2	23.7 本 /m ²	7/24	7/27、8/11、8/31
5	白山市上柏野 1	里のほほえみ	6/10	23.0 本 /m ²	7/31	8/2、8/13
6	白山市上柏野 2	里のほほえみ	6/ 7	24.6 本 /m ²	7/24	8/2、8/13
7	白山市安吉 1	里のほほえみ	6/22	16.9 本 /m ²	7/24	8/3、8/12
8	白山市安吉 2	里のほほえみ	6/22	23.8 本 /m ²	7/31	8/3、8/12

9	白山市明島	里のほほえみ	6/3	15.1 本 /m ²	7/24	7/29、8/10、8/30
10	農研1	里のほほえみ	6/4	16.8 本 /m ²	7/24	-
11	農研2	里のほほえみ	6/8	19.7 本 /m ²	7/31	-
12	中能登町良川1	里のほほえみ	6/7	22.9 本 /m ²	7/24	7/30、9/23
13	中能登町良川2	里のほほえみ	6/12	20.8 本 /m ²	7/31	7/30、9/23

2) フェロモントラップ調査

フェロモントラップは、信越化学工業(株)製のフェロモンルアーと北陸拠点で作成した透明コーン型トラップを用い、圃場内部の調査区画中央部、ダイズ畝上に設置した。トラップは1圃場1か所とし、設置高は畝からトラップ底面までの距離が30cmとなるようにした。ルアーはトラップ円錐内部の針金に取り付けた。ルアーの交換は設置から1か月ごとに交換した。トラップ上部(捕獲部分)には殺虫プレートを1枚入れ、プレートは調査期間中交換しなかった。トラップ設置は6月19日に行い、設置後約7日間隔で捕獲虫数を調査した。

3) 叩き出し調査

畝間を歩きながら両側の畝のダイズ草冠を棒で叩き、出てきた成虫数をカウントした。調査距離は100m/圃場とし、トラップから離れた畝を任意に選定し調査した。調査は6月25日から8月27日まで約7日間隔で行った。

4) 葉巻数調査

調査地点はトラップを中心とした正方形のおおよそ頂点くらいの、ダイズの生育が平均的な4か所の地点を選定した。調査地点は固定し、2m/地点の株の葉巻数を調査した。調査は7月2日から8月27日まで約7日間隔で行った。

3. 調査結果

1) フェロモントラップ捕獲数と（叩き出しによる）飛び出し虫数の推移

7月末までのトラップ捕獲数は圃場間で0～399頭の間で、飛び立ち虫数は1～53頭の間で変動していた。トラップ捕獲数は、飛び立ち虫数より多い傾向を示した（図1）。

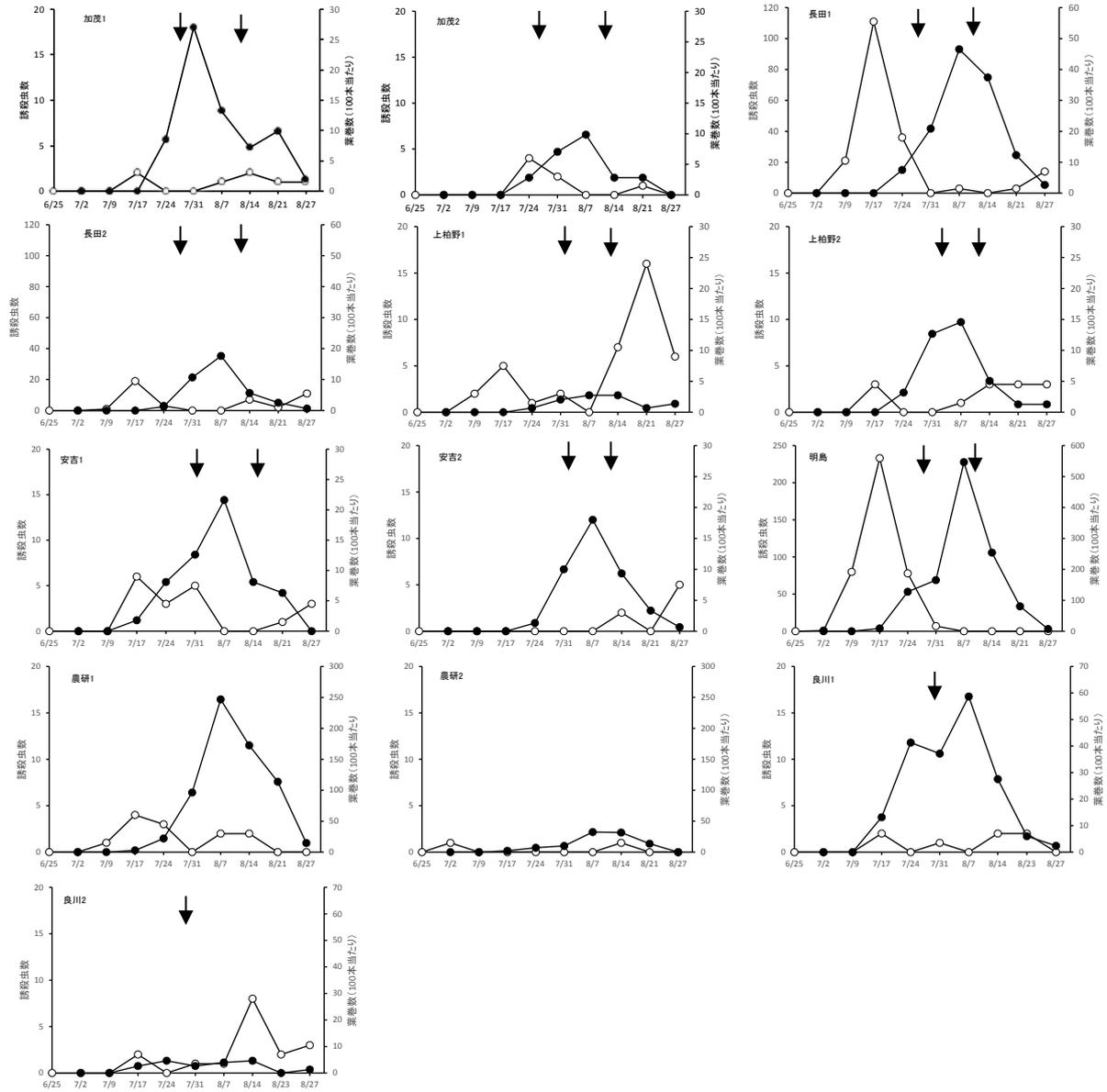


図1 フェロモントラップ捕獲数と飛び出し虫数の推移

○：フェロモントラップ、●：飛び出し虫数（叩き出し）

2) 第1回成虫の発生と被害（葉巻）の関係

第1回成虫の発生ピークは概ね7月17日であった。被害盛期は、ピークから約3週間後の8月7日となった（図2）。

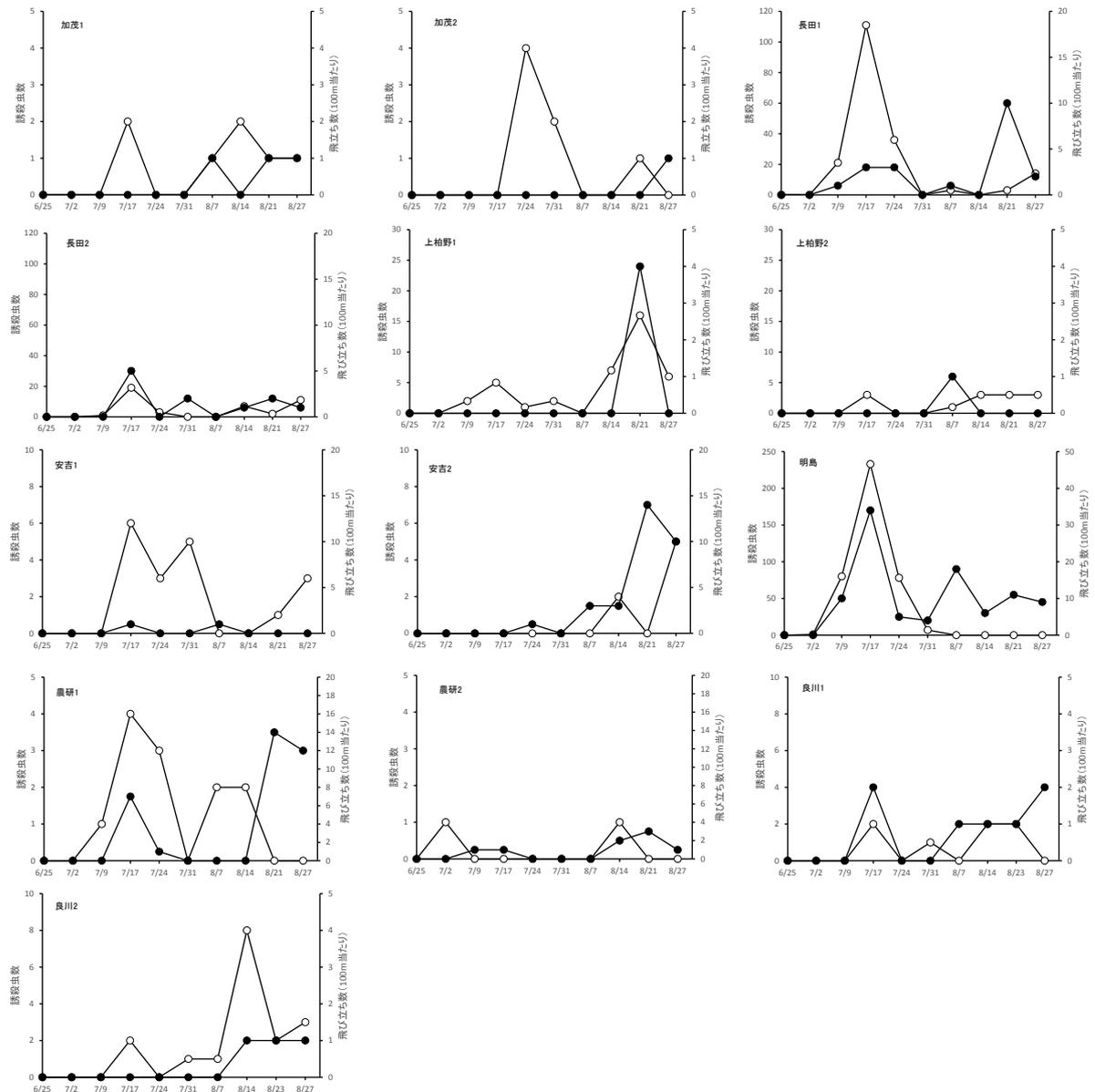


図2 フェロモントラップ捕獲数と被害（葉巻数）の関係

○：フェロモントラップ、●：葉巻数、↓：殺虫剤散布

4. 考察

トラップ調査と叩き出し調査から推定される第1回成虫の大豆圃場における発生ピークは、概ね7月17日頃と推定される。トラップ調査は、叩き出し調査で飛び出し虫が確認できなかった圃場においても捕獲されることから、第1回成虫の発生予察手法として有効であると考えられる。一方第2回成虫では、トラップに捕獲されない場合もあった。

トラップ捕獲数が多いと被害も多くなる傾向が見られる。なお、本調査は農研圃場を除いた防除実施圃場の結果である。

5. 今後の課題

引き続き調査を継続し、データを蓄積する。

6. 要約

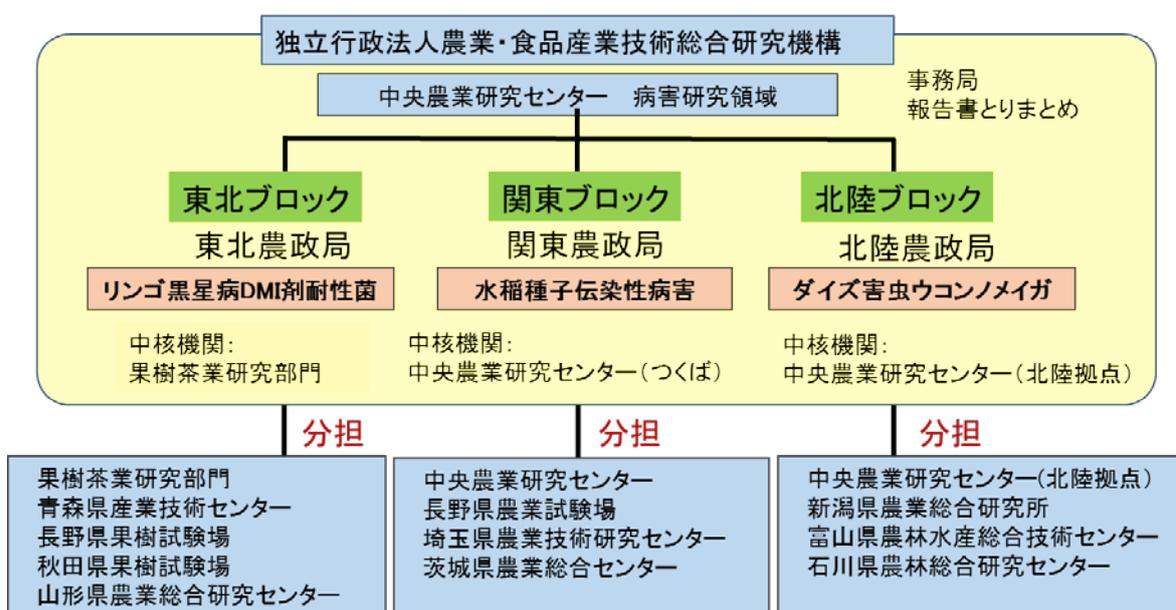
透明コーン型のフェロモントラップ調査は、叩き出し調査より捕獲数が多く、第1回成虫の発生活長をとらえている。

7. 成果の公表及び特許

なし

防除体制再編に向けた取り組み状況

本事業においては、現在、地域で問題となっている、又はなりつつある病虫害を対象として、モデル的に地域ブロック単位で、都道府県が課題を共有し、試験等を分担して防除体系等を確立する体制の構築を実証することを目的とする(下図)。ここでは、地方農政局を調整役とした効率的な体制の構築に向けた、3ブロック(東北、関東、北陸)の今年度の取り組み状況を報告する。



(1) 事業推進検討会

<キックオフ会議>

各地方農政局も出席し、本事業目的と30年度研究計画などに関して情報共有を図った。関東ブロックは農政局の会議室を会場として手配できた。年度末の成績検討会においては、農政局を中心に会議の準備にあたることを確認した。なお、研究課題の進行管理と取りまとめは各課題責任者が行い、事業全体の取りまとめは中央農研が担うことを確認した。

<成績検討会>

関東、および北陸ブロックは、それぞれ農政局の会議室での開催となった。東北ブロックは、果樹茶業研究部門リンゴ研究拠点で開催し、農政局の担当者も出席した。関東農政局は、会議室の手配・プレゼンの準備などを担当した。北陸農政局は、会場準備や他の農政局への連絡、参画機関以外の参加者の取りまとめ等を担当した。東北農政局へは岩手県病虫害防除所から成績検討会へのオブザーバー参加の要望があり、これを課題責任者(果樹茶業研究部

門)へ取り次いだ。また、山形県農林水産部からも同様の要望があった。

＜農政局主催の植物防疫地区協議会＞

関東、北陸、東北の各ブロック会議においては、本事業の研究課題の概要を報告した。成績の取りまとめ前の時期であり、具体的なデータの説明が出来なかったため、特に意見は出なかった。なお、北陸では、福井県が次年度以降に参画したいとの発言があった。

(2) 農政局を中心とした防除体制再編に向けた課題、意見など

3ブロックのすべての課題において、農政局を調整役とした検討会を開催し、試験成績の検討や問題解決に向けた活発な意見交換が行われた。農政局を核として課題を共有する体制の構築は、一部達成できているものと考えられる。

一方、これまで農政局は県や国の研究担当者とあまり交流がなく、現状では本事業の中心的な役割を果たすのは難しいとの意見もあった。防除所が対象であれば、すぐに農政局が中心的な役割を担える可能性もある。その他、予算的措置がなくなれば、県の積極的な対応・協力は難しくなることも予想される。農政局が関与するのであれば、試験の方向性が明確で、すぐに現場に導入できる技術でなければならない。現在の農政局の組織体制でどこまで対応できるのか未知数、などの意見があった。

(3) 参画機関間の協力や連携

会議時を含め、密接に意見交換を行っている。また、実験材料を融通しあったほか、試験方法の情報については共有化を図っている。

(4) 防除基準(案)策定等の見通し

北陸ブロックでは、暫定的な防除水準が一部できており、来年以降に防除基準案が提示できる見込みとなっている。関東ブロックでは、減農薬栽培に対応した効果の高い防除体系が一部確認できている。東北ブロックでは、今年度の試験結果を受けて、青森県が2つのSDHI剤(オルフィンフロアブル、ネクスターフロアブル)を開花期前後の黒星病防除薬剤として平成31年りんご病害虫防除暦および農作物病害虫防除指針に採用する。また、長野県は平成30年度の耐性菌発生地域からの導入苗木における黒星病多発を受け、一時的にはあるが、平成31年度から全県的にDMI剤を使用しない防除体系(開花直前にユニックス顆粒水和剤、落花直後にオルフィンフロアブルを散布する等)を採用する。